
本庄市・児玉郡神川町

向／十二天／青柳古墳群
南塚原支群／皂樹原Ⅱ

神流川沿岸農業水利事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2012

農林水産省 関東農政局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 向遺跡・十二天遺跡全景（合成）

むかい じゆうにてん 向遺跡・十二天遺跡の紹介

向遺跡と隣接する十二天遺跡は、児玉丘陵の裾に広がる斜面地に営まれた平安時代の集落跡です。今は道路をへだてて別々の遺跡として登録されていますが、本来は一つのムラだったと考えられます。これまでに本庄市教育委員会を中心に発掘調査が実施され、平安時代のはじめ頃から半ばにかけて（1,200～1,100年前）営まれた集落跡であることが明らかにされています。今回の調査では、十二天遺跡から古墳時代前期（約1,700年前）の住居跡が発見され、さらに古い時代の人々の生活の痕跡も見つかりました。

平安時代の住居跡からは、日常使われた土師器や須恵器などの食器のほかに、釉葉を掛けた緑釉陶器りよくゆうとうきや灰釉陶器かいゆうとうきなど的高级食器も出土しました。また、煮炊き用の土器にはこれまでの甕に代わって、新たに登場した鉄釜を模倣した羽釜はがまとよばれる土器も含まれていました。

このほかに表面に墨で文字を記した墨書土器にまじって、赤い朱墨で土器の内外面に文字を記した朱書土器が見つかりました。一般に朱墨は税金を収納する際に、台帳と合わせるためのチェックに使われることが多く、役所や役人との関連が想い起されます。朱書土器は、墨書土器に比べると出土例がきわめて少なく、当時の生活文化をさぐるうえで、大変貴重な文字資料といえます。



1 青柳古墳群南塚原支群（第1～3次調査）全景（合成）

あおやぎこふんぐんみなみつかはらしぐん 青柳古墳群南塚原支群の紹介

青柳古墳群は、^{かんながわ}神流川によって形成された扇状地の上に立地する古墳時代後期（1,500～1,400年前）を中心に営まれた総数270基の大規模な古墳群です。南塚原支群は、11に分けられる支群のうちの一つで、古墳群のほぼ中央部にあります。

今回の発掘調査では、^{はりし}埴輪や貼石をもった古墳跡が調査され、古墳群の実態が大きく解明されましたが、一方で、新たな発見の多い調査でもありました。

後期旧石器時代後半（約15,000年前）の槍先形尖頭器からは、丘陵から湧き出して流れてきた水を求めてやってきた獣類を射止めようとする狩人の姿を思い描くことができます。また、弥生時代からの墓制の系譜をひく^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓の発見は、古墳時代の初め頃（約1,700年前）にすでに墓域が成立していたことを物語るものとして、重要なものといえます。さらに、古墳の築造が終焉した後も、我々の遠い祖先のお墓という認識からか、灰釉陶器を副葬した平安時代（約1,250年前）の^{どこうぼ}土壇墓が古墳群の中に造られたこともわかりました。

さいかちはら 皂樹原遺跡の紹介

神川町の東北部に位置する皂樹原遺跡は、隣接する上里町^{ひのきした}檜下遺跡とともに奈良・平安時代の大規模な集落跡を形成していることが、工場建設などに伴う発掘調査によって明らかにされています。周辺部にも同時期の集落跡が複数存在しており、古代^{かみぐん}加美郡の中心地として繁栄していた場所と考えられます。

今回の発掘調査は、道路を横断する農業用パイプラインの建設に伴う小規模なものでしたが、平安時代の溝跡や土壇などの遺構・遺物が発見され、集落域の西方への広がりが明らかになりました。

序

埼玉県と群馬県との県境を流れる神流川は、古来より洪水による甚大な被害と渇水の際の水不足を引き起こし、沿岸の人々を長い間苦しめてきました。昭和43年に完成した下久保ダムを水源とする農業用水を効率的に利用するために、昭和42年から農林水産省により国営埼玉北部農業水利事業が着手され、幹線水路などの基幹水利施設の整備が進められました。しかし、30年以上経過した現在、基幹水利施設の老朽化が目立ち、近年の土地利用形態の変化や営農形態の変化に対応した用水供給を図るため、基幹水利施設の再整備が急務となっています。

神流川沿岸農業水利事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として本庄市向遺跡・十二天遺跡、神川町青柳古墳群南塚原支群・皂樹原遺跡の4遺跡が存在しています。これら埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議した結果、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課の調整により、当事業団が農林水産省関東農政局の委託を受けて実施いたしました。

向遺跡と隣接する十二天遺跡は、平安時代を中心とする集落遺跡で、竪穴住居跡からは土師器や須恵器のほかに、一般の集落からは出土することが稀な緑釉陶器や灰釉陶器なども見つかりました。青柳古墳群は、神流川右岸に広がる県内屈指の大古墳群で、とりわけ南塚原支群は「古墳のある風景」を今なお良く残しています。今回の発掘調査により、古墳時代前期の方形周溝墓群が発見され、墓域としての成り立ちがより古くさかのぼることがわかりました。さらに、皂樹原遺跡では、古代加美郡の中心的な集落遺跡の周辺部の様相が明らかにされました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、農林水産省関東農政局、神流川沿岸農業水利事業所、本庄市教育委員会、神川町教育委員会並びに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 藤野龍宏

例 言

1. 本書は、本市市児玉町保木野に所在する向遺跡第2次調査、十二天遺跡第4・5次調査、児玉郡神川町大字新里に所在する青柳古墳群南塚原支群第1～3次調査、児玉郡神川町大字元阿保に所在する皂樹原遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

向遺跡第2次
本市市児玉町保木野字前田98-3
平成20年2月15日付け 教文文第2-64号
十二天遺跡第4・5次
本市市児玉町保木野字中庭沼97
平成20年2月15日付け 教文文第2-65号
平成20年4月30日付け 教文文第2-6号
青柳古墳群南塚原支群第1次
児玉郡神川町大字新里字南塚原125番
平成20年5月31日付け 教文文第2-20号
青柳古墳群南塚原支群第2次
児玉郡神川町大字新里字北塚原157-1
平成20年12月27日付け 教文文第2-72号
青柳古墳群南塚原支群第3次
児玉郡神川町大字新里字北塚原148番地、282番地
平成21年6月24日付け 教文文第2-17号
皂樹原遺跡第4次
児玉郡神川町大字元阿保1130-18番地他
平成21年10月13日付け 教文文第2-43号
3. 発掘調査は、神流川沿岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、農林水産省関東農政局神流川沿岸農業水利事業所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成19・20・21年度）
向遺跡（2次）、十二天遺跡（4・5次）、青柳古墳群（1次）：「神流川沿岸農業水利事業新児玉幹線の工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」（平成19・20年度）
青柳古墳群（2・3次）：「神流川沿岸農業水利事業上里幹線呑口調整池建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」（平成20・21年度）
皂樹原遺跡（4次）：「神流川沿岸農業水利事業上里幹線付帯水路に伴う埋蔵文化財発掘調査」（平成21年度）
整理報告書作成事業（平成23年度）
「神流川沿岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（整理）」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

向遺跡（2次）、十二天遺跡（4次）は、平成20年2月1日から平成20年3月31日まで、昼間孝志、金子直行が担当した。十二天遺跡（5次）は、平成20年4月8日から平成20年5月30日まで、大谷徹、松本美佐子が担当した。青柳古墳群（1次）は、平成20年6月1日から平成20年8月29日まで、大谷、松本が担当した。青柳古墳群（2次）は、平成20年12月26日から平成21年3月31日まで、岩瀬譲、大谷が担当した。青柳古墳群（3次）は、平成21年7月1日から平成21年9月30日まで、山本禎、大谷が担当した。皂樹原遺跡（4次）は、平成21年10月1日から平成21年10月30日まで、大谷が担当した。
6. 基準点測量は、東松山測量設計株式会社（向

- 遺跡、十二天遺跡）、株式会社ビッソ測量設計（青柳古墳群1・3次、皂樹原遺跡）、吉田測量設計株式会社（青柳古墳群2次）に委託した。
7. 空中写真撮影は、中央航業株式会社に委託した。
 8. 遺構の写真撮影は各調査担当者が行った。遺物写真撮影は大谷が行い、大屋道則、福田聖の協力を得た。
 9. 出土遺物の整理および図版の作成は大谷が行い、細田勝、赤熊浩一、西井幸雄、福田、渡辺清志の協力を得た。

10. 本書の編集は大谷が行った。本書の執筆は、1-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、旧石器・縄文時代の遺物について渡辺が行い、その他を大谷が行った。
11. 本書にかかる諸資料は、平成24年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査から報告書の刊行まで、下記の機関、方々からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
本庄市教育委員会 神川町教育委員会
賀来孝代 加部二生 坂本和俊 宮瀧交二

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全域をカバーする方眼を設定した。ただし、皂樹原遺跡のみは調査区の関係で1グリッドを5m×5mとした。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、南方向にアルファベット（A・B・C…）、東方向に数字（1・2・3…）を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した主な遺構の略号は、以下のとおりである。
S J…竪穴住居跡 S D…溝跡 S K…土壌
S R…方形周溝墓 S S…古墳跡 S O…道路跡
S T…墓跡 S X…性格不明遺構 P…小穴・柱穴
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについて

は図中に縮尺とスケールを示した。

全測図 1/400

遺構図 1/80・1/60・1/30

遺物実測図・拓本 1/4・1/3

土製品・金属製品・石製品 1/3・1/2

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を示す。
7. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・遺物の計測値はcm、重さはgを単位とする。
 - ・土器計測値の（ ）は復元推定値、[]は残存値を示す。
 - ・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質 K：黒色粒子 L：小礫 M：チャート
 - ・遺物観察表に記した色調は、すべて農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』によった。
8. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図、本庄市都市計画図1/2,500、神川町都市計画図1/2,500を編集・使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 旧石器・縄文時代	71
1. 発掘調査に至る経過	1	(2) 古墳時代	73
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(3) 中・近世	79
(1) 発掘調査	2	VII 青柳古墳群南塚原支群第2次調査	91
(2) 整理・報告書の作成	2	1. 調査の概要	91
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	2. 遺構と遺物	91
II 遺跡の立地と環境	4	(1) 旧石器時代	91
1. 地理的環境	4	(2) 縄文時代	94
2. 歴史的環境	5	(3) 古墳時代	94
III 遺跡の概要	8	(4) 中・近世	108
IV 向遺跡第2次調査	9	VIII 青柳古墳群南塚原支群第3次調査	117
1. 調査の概要	9	1. 調査の概要	117
2. 遺構と遺物	12	2. 遺構と遺物	117
(1) 縄文時代	12	(1) 旧石器時代	117
(2) 古墳時代	12	(2) 縄文時代	119
(3) 平安時代以降	13	(3) 古墳時代	124
V 十二天遺跡第4・5次調査	24	(4) 平安時代	130
1. 調査の概要	24	(5) 中・近世	132
2. 遺構と遺物	26	IX 皂樹原遺跡第4次調査	141
(1) 縄文時代	26	1. 調査の概要	141
(2) 古墳時代	26	2. 遺構と遺物	143
(3) 平安時代	29	(1) 平安時代	143
(4) 中・近世	61	X 発掘調査のまとめ	145
VI 青柳古墳群南塚原支群第1次調査	67	1. 調査の成果	145
1. 調査の概要	67	2. 青柳古墳群の成立背景	146
2. 遺構と遺物	71		

写真図版

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第34図	第3号住居跡出土遺物(1)	38
第2図	周辺の遺跡(古墳時代)	6	第35図	第3号住居跡出土遺物(2)	39
第3図	周辺の遺跡(奈良・平安時代)	7	第36図	第3号住居跡出土遺物(3)	40
向遺跡					
第4図	向遺跡・十二天遺跡周辺地形図	9	第37図	第4号住居跡	41
第5図	向遺跡・十二天遺跡調査区位置図	10	第38図	第4号住居跡出土遺物	42
第6図	向遺跡第2次調査区全測図	11	第39図	第5号住居跡	42
第7図	グリッド出土遺物	12	第40図	第7号住居跡(1)	43
第8図	第6号土壌・出土遺物	12	第41図	第7号住居跡(2)	44
第9図	グリッド出土遺物	12	第42図	第7号住居跡出土遺物	45
第10図	第1号住居跡	14	第43図	第8号住居跡	47
第11図	第1号住居跡出土遺物	15	第44図	第8号住居跡出土遺物	48
第12図	第2号住居跡	17	第45図	第9号住居跡	49
第13図	第2号住居跡出土遺物	17	第46図	第9号住居跡出土遺物	50
第14図	第3・4号住居跡	18	第47図	第10号住居跡・出土遺物	50
第15図	第3号住居跡出土遺物	19	第48図	第11号住居跡・出土遺物	51
第16図	第4号住居跡出土遺物	20	第49図	第12号住居跡	51
第17図	第1号溝跡・出土遺物	21	第50図	第12号住居跡出土遺物	52
第18図	第1～5・7・8号土壌	22	第51図	第15号住居跡・出土遺物	54
第19図	土壌出土遺物	23	第52図	第12・13・15号溝跡	55
第20図	グリッド出土遺物	23	第53図	第16・17・18号溝跡	56
十二天遺跡					
第21図	十二天遺跡第4・5次調査区全測図	25	第54図	溝跡出土遺物	57
第22図	グリッド出土遺物	26	第55図	第1・9・22・33・34・36・37号土壌	58
第23図	第6号住居跡	26	第56図	土壌出土遺物	59
第24図	第6号住居跡出土遺物	27	第57図	グリッド出土遺物(1)	60
第25図	第13号土壌・出土遺物	27	第58図	グリッド出土遺物(2)	61
第26図	グリッド出土遺物	28	第59図	第1～7号溝跡	63
第27図	第1号住居跡	29	第60図	第8・10・11・14号溝跡	64
第28図	第1号住居跡出土遺物	30	第61図	第2～8・10～12・14～17号土壌	65
第29図	第2号住居跡(1)	32	第62図	第18～21・23～32号土壌	66
第30図	第2号住居跡(2)	33	第63図	グリッド出土遺物	66
第31図	第2号住居跡出土遺物	34	青柳古墳群南塚原支群(1次)		
第32図	第3号住居跡(1)	36	第64図	青柳古墳群分布図	68
第33図	第3号住居跡(2)	37	第65図	青柳古墳群南塚原支群分布図	69
			第66図	青柳古墳群南塚原支群周辺地形図	70
			第67図	青柳古墳群南塚原支群調査区位置図	71

第68図	南塚原支群第1次調査区全測図	72
第69図	グリッド出土遺物(1)	72
第70図	グリッド出土遺物(2)	73
第71図	南塚原82号墳(1)	74
第72図	南塚原82号墳(2)	75
第73図	南塚原82号墳出土遺物	76
第74図	南塚原84号墳	77
第75図	南塚原84号墳出土遺物	77
第76図	南塚原85号墳	78
第77図	第1号溝跡	79
第78図	第1号溝跡出土遺物	80
第79図	第2号溝跡	81
第80図	第2号溝跡出土遺物	82
第81図	第3・4号溝跡	83
第82図	第1～4・10号土壌	84
第83図	第5～9・11～15号土壌	85
第84図	第16～27・29号土壌	86
第85図	第28・30～33号土壌	87
第86図	土壌出土遺物	87
第87図	第21号土壌出土遺物	88
第88図	ピット分布図	89
第89図	ピット出土遺物	90
第90図	グリッド出土遺物	90
青柳古墳群南塚原支群(2次)		
第91図	南塚原支群第2次調査区全測図	92
第92図	旧石器時代調査区・出土遺物	93
第93図	グリッド出土遺物	94
第94図	第1号方形周溝墓・出土遺物	95
第95図	第2号方形周溝墓	96
第96図	第3号方形周溝墓・出土遺物	97
第97図	南塚原29・74号墳	98
第98図	南塚原29号墳・出土遺物	99
第99図	南塚原74号墳(1)	100
第100図	南塚原74号墳(2)	101
第101図	南塚原74号墳出土遺物(1)	102
第102図	南塚原74号墳出土遺物(2)	103
第103図	南塚原74号墳出土遺物(3)	104

第104図	南塚原74号墳出土遺物(4)	105
第105図	第44号土壌	106
第106図	グリッド出土遺物	107
第107図	第5・11号溝跡	108
第108図	第6～10号溝跡	109
第109図	第12～17号溝跡(1)	110
第110図	第12～17号溝跡(2)	111
第111図	第18号溝跡・出土遺物	112
第112図	第1号道路跡	113
第113図	第34～43号土壌	114
第114図	第45～56号土壌	115
第115図	第57～62号土壌	116
第116図	第38号土壌出土遺物	116
第117図	ピット	116
青柳古墳群南塚原支群(3次)		
第118図	南塚原40号墳・第3次調査区1	117
第119図	南塚原支群第3次調査区1全測図	118
第120図	南塚原支群第3次調査区2全測図	119
第121図	旧石器時代調査区・出土遺物	120
第122図	第67・71・74～78・80号土壌、 O-15Gピット1	121
第123図	土壌出土遺物	122
第124図	グリッド出土遺物	123
第125図	第4号方形周溝墓	124
第126図	第5号方形周溝墓・出土遺物	125
第127図	第33号溝跡	126
第128図	第33号溝跡出土遺物	126
第129図	第72号土壌	127
第130図	第1号性格不明遺構	128
第131図	第1号性格不明遺構出土遺物	129
第132図	グリッド出土遺物	129
第133図	第28号溝跡	131
第134図	第1号土壌墓・出土遺物	131
第135図	第19～21号溝跡	132
第136図	第22～26号溝跡	133
第137図	第22号溝跡出土遺物	133
第138図	第27・29～31・39・40号溝跡	134

第139図	第32・36号溝跡	135
第140図	第34・35・37・38号溝跡	136
第141図	第63～66号土壌	137
第142図	第68～70・73・79号土壌	138
第143図	ピット(1)	139
第144図	ピット(2)	140

皂樹原遺跡

第145図	皂樹原遺跡第4次調査区全測図	141
第146図	皂樹原遺跡位置図	142
第147図	第1号溝跡	143
第148図	第1～5号土壌	143
第149図	ピット	144
第150図	グリッド出土遺物	144
第151図	青柳古墳群変遷図	146

挿 表 目 次

向遺跡

第1表	第6号土壌出土遺物観察表	12
第2表	グリッド出土遺物観察表	13
第3表	第1号住居跡出土遺物観察表	16
第4表	第2号住居跡出土遺物観察表	17
第5表	第3号住居跡出土遺物観察表	19
第6表	第4号住居跡出土遺物観察表	20
第7表	第1号溝跡出土遺物観察表	22
第8表	土壌出土遺物観察表	23
第9表	グリッド出土遺物観察表	23

十二天遺跡

第10表	第6号住居跡出土遺物観察表	27
第11表	第13号土壌出土遺物観察表	27
第12表	グリッド出土遺物観察表	28
第13表	第1号住居跡出土遺物観察表	31
第14表	第2号住居跡出土遺物観察表	35
第15表	第3号住居跡出土遺物観察表	40
第16表	第4号住居跡出土遺物観察表	42
第17表	第7号住居跡出土遺物観察表	46
第18表	第8号住居跡出土遺物観察表	48
第19表	第9号住居跡出土遺物観察表	50
第20表	第10号住居跡出土遺物観察表	51
第21表	第11号住居跡出土遺物観察表	51
第22表	第12号住居跡出土遺物観察表	53
第23表	第15号住居跡出土遺物観察表	54
第24表	溝跡出土遺物観察表	57
第25表	土壌出土遺物観察表	59

第26表	グリッド出土遺物観察表	62
第27表	グリッド出土遺物観察表	66

青柳古墳群南塚原支群(1次)

第28表	南塚原82号墳出土土円筒埴輪観察表	76
第29表	南塚原82号墳出土形象埴輪観察表	76
第30表	南塚原84号墳出土遺物観察表	77
第31表	南塚原84号墳出土土円筒埴輪観察表	77
第32表	南塚原84号墳出土形象埴輪観察表	78
第33表	第1号溝跡出土遺物観察表	80
第34表	第2号溝跡出土遺物観察表	83
第35表	土壌出土遺物観察表	88
第36表	第21号土壌出土銭貨観察表	88
第37表	ピット出土遺物観察表	90
第38表	グリッド出土遺物観察表	90

青柳古墳群南塚原支群(2次)

第39表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	95
第40表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	97
第41表	南塚原29号墳出土遺物観察表	99
第42表	南塚原74号墳出土遺物観察表	104
第43表	南塚原74号墳出土土円筒埴輪観察表	105
第44表	南塚原74号墳出土形象埴輪観察表	106
第45表	グリッド出土形象埴輪観察表	107
第46表	第18号溝跡出土遺物観察表	113
第47表	第38号土壌出土遺物観察表	116

青柳古墳群南塚原支群(3次)

第48表	第5号方形周溝墓出土遺物観察表	125
第49表	第33号溝跡出土土円筒埴輪観察表	127

第50表	第1号性格不明遺構出土円筒埴輪 観察表	129
第51表	グリッド出土遺物観察表	130
第52表	グリッド出土円筒埴輪観察表	130
第53表	グリッド出土形象埴輪観察表	130

第54表	第1号土壇墓出土遺物観察表	132
第55表	第22号溝跡出土遺物観察表	133
皂樹原遺跡		
第56表	グリッド出土遺物観察表	144

写真図版目次

巻頭図版1	1 向遺跡・十二天遺跡全景(合成)
巻頭図版2	1 青柳古墳群南塚原支群(第1～ 3次調査)全景(合成)

向遺跡

図版1	1 向遺跡・十二天遺跡遠景(1)
	2 向遺跡・十二天遺跡遠景(2)
	3 向遺跡遠景
	4 調査区全景(1)
	5 調査区全景(2)
図版2	1 第1号住居跡
	2 第1号住居跡カマド
	3 第1号住居跡遺物出土状況(1)
	4 第1号住居跡遺物出土状況(2)
	5 第1号住居跡遺物出土状況(3)
	6 第1号住居跡遺物出土状況(4)
	7 第2号住居跡
	8 第2号住居跡カマド
図版3	1 第2号住居跡掘り方
	2 第3号住居跡カマド
	3 第4号住居跡
	4 第4号住居跡カマド
	5 第1号溝跡(1)
	6 第1号溝跡(2)
	7 第2号土壇
	8 第6号土壇
図版4	1 搔・削器(第7図1)
	2 第6号土壇(第8図1)
	3 グリッド(第9図1)
	4 グリッド(第9図3・4)

	5 第1号住居跡(第11図1)
	6 第1号住居跡(第11図2)
	7 第1号住居跡(第11図3)
	8 第1号住居跡(第11図4)
	9 第1号住居跡(第11図5)
図版5	1 第1号住居跡(第11図6)
	2 第1号住居跡(第11図7)
	3 第1号住居跡(第11図10)
	4 第1号住居跡(第11図12)
	5 第1号住居跡(第11図14)
	6 第1号住居跡(第11図15)
	7 灰釉陶器
	8 第3号住居跡(第15図6)
図版6	1 第4号住居跡(第16図1) 墨書
	2 第4号住居跡(第16図2) 墨書
	3 第4号住居跡(第16図5)
	4 第4号住居跡(第16図6)
	5 第1号溝跡(第17図1)
	6 青磁碗(第20図6)
	7 第3号住居跡(第15図8)
	8 鉄製品
	9 椀形鍛冶滓

十二天遺跡

図版7	1 十二天遺跡遠景(1)
	2 十二天遺跡遠景(2)
	3 調査区全景(1)
	4 調査区全景(2)
	5 調査区全景(3)
図版8	1 第6号住居跡

	2	第6号住居跡遺物出土状況(1)		7	第7号住居跡
	3	第6号住居跡遺物出土状況(2)		8	第7号住居跡カマドA・B
	4	第6号住居跡遺物出土状況(3)	図版13	1	第7号住居跡カマドA
	5	第1号住居跡		2	第7号住居跡掘り方
	6	第1号住居跡カマド		3	第7号住居跡遺物出土状況
	7	第1号住居跡遺物出土状況(1)		4	第8号住居跡
	8	第1号住居跡遺物出土状況(2)		5	第8号住居跡カマド
図版9	1	第1号住居跡遺物出土状況(3)		6	第8号住居跡遺物出土状況(1)
	2	第1号住居跡遺物出土状況(4)		7	第8号住居跡遺物出土状況(2)
	3	第1号住居跡遺物出土状況(5)		8	第9号住居跡
	4	第1号住居跡遺物出土状況(6)	図版14	1	第9号住居跡カマド
	5	第2号住居跡		2	第9号住居跡遺物出土状況
	6	第2号住居跡カマド		3	第10号住居跡
	7	第2号住居跡掘り方		4	第10号住居跡カマド
	8	第2号住居跡遺物出土状況(1)		5	第11号住居跡
図版10	1	第2号住居跡遺物出土状況(2)		6	第12号住居跡
	2	第2号住居跡遺物出土状況(3)		7	第15号住居跡カマド
	3	第2号住居跡遺物出土状況(4)		8	第16~18号溝跡
	4	第2号住居跡遺物出土状況(5)	図版15	1	第16~18号溝跡遺物出土状況(1)
	5	第3号住居跡		2	第16~18号溝跡遺物出土状況(2)
	6	第3号住居跡カマド		3	第1号土壌
	7	第3号住居跡掘り方		4	第9号土壌遺物出土状況(1)
	8	第3号住居跡遺物出土状況(1)		5	第9号土壌遺物出土状況(2)
図版11	1	第3号住居跡遺物出土状況(2)		6	第22号土壌
	2	第3号住居跡遺物出土状況(3)		7	第33・34号土壌
	3	第3号住居跡遺物出土状況(4)		8	第36号土壌
	4	第3号住居跡遺物出土状況(5)	図版16	1	第6号住居跡(第24図1)
	5	第3号住居跡遺物出土状況(6)		2	第6号住居跡(第24図7)
	6	第3号住居跡遺物出土状況(7)		3	第1号住居跡(第28図2)
	7	第3号住居跡遺物出土状況(8)		4	第1号住居跡(第28図3)
	8	第3号住居跡遺物出土状況(9)		5	第1号住居跡(第28図6)
図版12	1	第4号住居跡		6	第1号住居跡(第28図7)
	2	第4号住居跡遺物出土状況(1)		7	第1号住居跡(第28図11)
	3	第4号住居跡遺物出土状況(2)	図版17	1	第1号住居跡(第28図12)
	4	第4号住居跡遺物出土状況(3)		2	第1号住居跡(第28図13)
	5	第4号住居跡遺物出土状況(4)		3	第1号住居跡(第28図15)
	6	第5号住居跡		4	第1号住居跡(第28図16)

- 5 第1号住居跡 (第28図20)
- 6 第2号住居跡 (第31図1)
- 7 第2号住居跡 (第31図2)
- 8 第2号住居跡 (第31図4)
- 9 第2号住居跡 (第31図5)
- 10 第2号住居跡 (第31図6)
- 図版18 1 第2号住居跡 (第31図7)
- 2 第2号住居跡 (第31図9)
- 3 第2号住居跡 (第31図10)
- 4 第2号住居跡 (第31図11)
- 5 第2号住居跡 (第31図12)
- 6 第2号住居跡 (第31図13)
- 7 第2号住居跡 (第31図23)
- 8 第2号住居跡 (第31図24)
- 図版19 1 第3号住居跡 (第34図1)
- 2 第3号住居跡 (第34図2)
- 3 第3号住居跡 (第34図3)
- 4 第3号住居跡 (第34図4)
- 5 第3号住居跡 (第34図5)
- 6 第3号住居跡 (第34図7)
- 7 第3号住居跡 (第34図8)
- 8 第3号住居跡 (第34図10)
- 9 第3号住居跡 (第34図13)
- 10 第3号住居跡 (第34図14)
- 図版20 1 第3号住居跡 (第34図15)
- 2 第3号住居跡 (第34図17)
- 3 第3号住居跡 (第34図18)
- 4 第3号住居跡 (第34図19)
- 5 第3号住居跡 (第34図21)
- 6 第3号住居跡 (第34図24)
- 7 第3号住居跡 (第34図27)
- 8 第3号住居跡 (第35図28)
- 9 第3号住居跡 (第35図36)
- 図版21 1 第3号住居跡 (第35図37)
- 2 第3号住居跡 (第35図38)
- 3 第4号住居跡 (第38図2)
- 4 第7号住居跡 (第42図8) 墨書
- 5 第8号住居跡 (第44図2)
- 6 第8号住居跡 (第44図8)
- 7 第8号住居跡 (第44図9)
- 図版22 1 第8号住居跡 (第44図11)
- 2 第8号住居跡 (第44図12)
- 3 第8号住居跡 (第44図14)
- 4 第8号住居跡 (第44図18)
- 5 第8号住居跡 (第44図19)
- 6 第12号住居跡 (第50図6)
- 7 第12号住居跡 (第50図7) 朱書
- 8 第12号住居跡 (第50図8)
- 図版23 1 第12号住居跡 (第50図11)
- 2 第12号住居跡 (第50図12)
- 3 第15号住居跡 (第51図2)
- 4 第18号溝跡 (第54図10) 朱書
- 5 第18号溝跡 (第54図8)
- 6 第18号溝跡 (第54図14)
- 7 第1号土壇 (第56図1) 朱書
- 図版24 1 第1号土壇 (第56図2)
- 2 第1号土壇 (第56図3)
- 3 第9号土壇 (第56図7)
- 4 緑釉陶器
- 5 第36号土壇 (第56図16)
- 6 第22号土壇 (第56図13)
- 7 グリッド (第57図2)
- 8 グリッド (第57図3)
- 図版25 1 古式土師器 (第26図1~14)
- 2 灰釉陶器 (1)
- 3 灰釉陶器 (2)
- 図版26 1 石鏃 (第22図1)
- 2 グリッド (第57図34)
- 3 グリッド (第58図48)
- 4 土製品
- 5 土錘
- 6 鉄製品
- 7 椀形銅台座

- 図版27 1 青柳古墳群南塚原支群遠景
- 図版28 1 南塚原支群第1次調査区全景
2 南塚原82号墳(1)
- 図版29 1 南塚原82号墳(2)
2 南塚原82号墳(3)
3 南塚原82号墳(4)
4 南塚原84号墳
- 図版30 1 南塚原85号墳
2 第1号溝跡
3 第1号溝跡遺物出土状況
4 第2号溝跡(1)
5 第2号溝跡(2)
6 第2号溝跡(3)
- 図版31 1 第2号溝跡遺物出土状況(1)
2 第2号溝跡遺物出土状況(2)
- 図版32 1 第1号土壌
2 第2・10号土壌遺物出土状況
3 第4号土壌
4 第6号土壌
5 第13号土壌
6 第23号土壌
7 ビット群
8 AD-10G ビット49
- 図版33 1 尖頭器(第69図1)
2 打製石斧(第70図18)
3 南塚原82号墳(第73図1~3)
4 南塚原82号墳(第73図4・5)
5 南塚原84号墳(第75図1)
6 南塚原84号墳(第75図3)
7 第1号溝跡(第78図2)
8 第1号溝跡(第78図1・4)
- 図版34 1 第4号土壌(第86図6)
2 第6号土壌(第86図7)
3 第10号土壌(第86図10)
4 須恵器(第90図1・2)
5 平瓦(第90図4)
6 第2号溝跡(第80図2)
- 7 第2号溝跡(第80図3)
8 羽口
- 図版35 1 縄文土器(第70図1~17)
2 南塚原82号墳(第73図6~12)
3 銅・鉄製品、鉄塊
- 図版36 1 第21号土壌(第87図1~6)
2 第2号溝跡(第80図4)
3 第2号溝跡(第80図5)
4 第2号溝跡(第80図6)
5 第2号溝跡(第80図7)
- 青柳古墳群南塚原支群(2次)**
- 図版37 1 南塚原支群第2次調査区遠景(1)
2 南塚原支群第2次調査区遠景(2)
- 図版38 1 南塚原支群第2次調査区全景(1)
2 南塚原支群第2次調査区全景(2)
3 南塚原支群第2次調査区全景(3)
4 南塚原支群第2次調査区全景(4)
5 旧石器時代調査区(1)
6 旧石器時代調査区(2)
7 基本土層
8 尖頭器出土状況
- 図版39 1 方形周溝墓群全景(1)
2 方形周溝墓群全景(2)
3 方形周溝墓群全景(3)
- 図版40 1 第1号方形周溝墓(1)
2 第1号方形周溝墓(2)
3 第1号方形周溝墓(3)
4 第1号方形周溝墓(4)
5 第2号方形周溝墓(1)
6 第2号方形周溝墓(2)
7 第3号方形周溝墓
8 第3号方形周溝墓遺物出土状況
- 図版41 1 南塚原29号墳
2 南塚原74号墳(1)
3 南塚原74号墳(2)
4 南塚原74号墳遺物出土状況(1)
5 南塚原74号墳遺物出土状況(2)

- 6 南塚原74号墳遺物出土狀況 (3)
- 7 南塚原74号墳遺物出土狀況 (4)
- 8 南塚原74号墳遺物出土狀況 (5)
- 図版42 1 第12号溝跡
2 第1号道路跡 (1)
3 第1号道路跡 (2)
4 第38号土層
5 第54号土層
6 第55号土層
7 第57号土層
- 図版43 1 尖頭器 (第92図1)
2 打製石斧 (第93図1)
3 打製石斧 (第93図2)
4 第3号方形周溝墓 (第96図1)
5 南塚原29号墳 (第98図1)
6 南塚原74号墳 (第101図1)
7 第18号溝跡 (第111図1)
- 図版44 1 南塚原74号墳 (第101図4)
2 南塚原74号墳 (第101図6)
3 南塚原74号墳 (第101図7)
4 南塚原74号墳 (第101図8)
5 南塚原74号墳 (第101図13)
6 南塚原74号墳 (第101図15)
7 南塚原74号墳 (第102図17)
8 南塚原74号墳 (第102図18)
- 図版45 1 南塚原74号墳 (第102図20~31)
2 南塚原74号墳 (第102・103図32~40)
3 南塚原74号墳 (第103図41~46)
- 図版46 1 南塚原74号墳 (第103図47~54)
2 形象埴輪 (第106図1~6・8~12)
3 南塚原74号墳 (第104図55)
4 南塚原74号墳 (第104図56)
5 第38号土層 (第116図1)
- 青柳古墳群南塚原支群 (3次)**
- 図版47 1 南塚原支群第3次調査区遠景
2 南塚原支群第3次調査区全景 (1)
- 3 南塚原支群第3次調査区全景 (2)
- 4 南塚原支群第3次調査区全景 (3)
- 5 南塚原支群第3次調査区1南半部全景
- 図版48 1 旧石器時代調査区
2 基本土層
3 Q-16G剥片出土狀況 (1)
4 Q-16G剥片出土狀況 (2)
5 第71号土層
6 第74号土層
7 第75~77号土層
8 第78・80号土層
- 図版49 1 第4・5号方形周溝墓
2 第4号方形周溝墓
3 第5号方形周溝墓 (1)
4 第5号方形周溝墓 (2)
5 第5号方形周溝墓 (3)
6 第5号方形周溝墓 (4)
7 第5号方形周溝墓 (5)
8 第5号方形周溝墓 (6)
- 図版50 1 第33号溝跡
2 第33号溝跡遺物出土狀況
3 第72号土層
4 第1号性格不明遺構 (1)
5 第1号性格不明遺構 (2)
6 第1号土層墓遺物出土狀況 (1)
7 第1号土層墓遺物出土狀況 (2)
- 図版51 1 第28号溝跡 (1)
2 第28号溝跡 (2)
3 第28号溝跡 (3)
4 第27号溝跡
5 第29~31号溝跡
6 第32・36号溝跡
7 第36号溝跡
- 図版52 1 第34・35・37・38号溝跡
2 第34号溝跡
3 第68号土層

- 4 ビット群
 - 5 南塚原支群第3次調査区2全景(1)
 - 6 南塚原支群第3次調査区2全景(2)
 - 7 第19～21号溝跡
 - 8 第22～26号溝跡
- 図版53
- 1 剥片 (第121図1)
 - 2 打製石斧 (第124図35)
 - 3 打製石斧 (第124図36)
 - 4 人物埴輪 (第132図12)
 - 5 第22号溝跡 (第137図1・2)
 - 6 第1号土壇墓 (第134図1)
- 図版54
- 1 第67・72・74・75・80号土壇 (第123図1～12)
 - 2 縄文土器 (第124図1～34)
 - 3 埴輪 (第132図5～11・13・14)
- 皂樹原遺跡**
- 図版55
- 1 調査区北側全景(1)
 - 2 調査区北側全景(2)
 - 3 第1号溝跡
 - 4 調査区南側全景(1)
 - 5 調査区南側全景(2)
 - 6 椀形鍛冶滓 (第150図1)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

農林水産省関東農政局神流川沿岸農業水利事業所では、老朽化した農業水利施設の更新及び畑地灌漑未整備地区への安定的な農業用水配分のため、平成16年度から神流川沿岸の農業水利事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該事業の実施に先立ち、神流川沿岸農業水利事業所長から平成19年10月1日付けで、文化財の所在及び取扱いについて、埼玉県教育委員会教育長あてに照会があった。

これに対し生涯学習文化財課では、遺跡所在確認のための試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の所在が明らかになった。

生涯学習文化財課では、当該箇所について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存の発掘調査を実施するよう回答した。

また、文化財保護法第94条第1項に基づき神流川沿岸農業水利事業所より提出された通知に対して、一旦工事立会調査を勧告した向遺跡・十二天遺跡でも、立会時に埋蔵文化財が確認されたため、当該箇所についてあらためて同様に回答した。

神流川沿岸農業水利事業所と生涯学習文化財課は、これらの埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることになった。

記録保存のための発掘調査については、神流川沿岸農業水利事業所と生涯学習文化財課で調査計

画等について協議し、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が記録保存のための発掘調査を実施した。

本報告書に係る調査について、神流川沿岸農業水利事業所から提出された文化財保護法第94条第1項による発掘通知に対する同条第4項に基づく勧告、同法第92条第1項の規定により(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届に対する同条第2項に基づく指示通知は、下記のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

○向遺跡・十二天遺跡

平成19年11月30日付け教生文第4-778号

○青柳古墳群南塚原支群

平成20年3月14日付け教生文第4-1135号

平成20年11月28日付け教生文第4-811号

○皂樹原遺跡

平成21年8月4日付け教生文第4-427号

発掘調査届に対する指示通知：

○向遺跡・十二天遺跡

平成20年2月15日付け教生文第2-64号

平成20年2月15日付け教生文第2-65号

平成20年4月30日付け教生文第2-6号

○青柳古墳群南塚原支群

平成20年5月31日付け教生文第2-20号

平成20年12月27日付け教生文第2-72号

平成21年6月24日付け教生文第2-17号

○皂樹原遺跡

平成21年10月13日付け教生文第2-43号

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

神流川沿岸水利事業に伴う発掘調査は、平成19年度から平成21年度の3箇年にわたって4遺跡7次の調査を実施した。

平成19年度は、新児玉幹線の建設に伴う事前調査として、向遺跡第2次調査および十二天遺跡第4次調査を平成20年2月1日から平成20年3月31日まで実施した。向遺跡は年度内に調査を終了させ、十二天遺跡は次年度に調査を継続した。

平成20年度は、昨年度から継続して十二天遺跡第5次調査を平成20年4月8日から平成20年5月30日まで実施し、調査を終了した。引き続き、青柳古墳群第1次調査を平成20年6月1日から平成20年8月29日まで実施した。調査は、児玉幹線と上里幹線を分岐する青柳分水工関連施設の建設に伴うものである。青柳古墳群第2次調査は上里幹線呑口調整池建設に伴う事前調査として、平成20年12月26日から平成21年3月31日まで実施した。調査は、既存の調整池を北側に拡張する部分にあたる。

平成21年度は、上里幹線呑口調整池の西側と東側の2地点を青柳古墳群第3次調査として、平成21年7月1日から平成21年9月30日まで実施した。調査終了後、上里幹線付帯水路建設の事前調査として、皂樹原遺跡第4次調査を平成21年10月1日から平成21年10月30日まで実施した。調査は現道を横断する狭小な調査区であったため、片側交互通行の交通規制を実施し、安全対策に留意しつつ、慎重に調査を進めた。

発掘調査は、重機による表土除去後、人力により遺構確認作業を行った。その後、遺構の精査を開始し、順次土層断面図・遺構平面図の作成および写真撮影等の記録作業を実施した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書作成事業は、平成23年7月1日から平成24年3月23日までの9箇月間実施した。

出土遺物の整理作業は、まず水洗・注記作業を行い、その後、遺構単位に接合作業および欠損箇所を石膏で補てんする復元作業を実施した。また、接合・復元作業が完了したのから、順次実測用遺物や拓本用遺物を抽出した。実測作業は、平成23年8月より開始した。完形に近い遺物については、機械実測機で素図を作成した。破片遺物については、断面実測と拓本作業を行った。完成した実測図・断面図のトレース作業は9月から開始し、トレースを終了したのから、遺構ごとに遺物図版の版組作業を行った。

遺構図面の整理作業は、遺物の作業に並行して行った。始めに各種図面を分類・整理した上で、それぞれの実測図の整合性をとって第二原図を作成した。遺構図面のトレース作業はパソコン上で行い、9月より開始した。第二原図をスキャナーで取り込み、専用ソフトを用いてトレース図を作成した。遺構図版の作製は10月より開始し、トレースした遺構図と土層説明等の入力データを組み合わせる版下を作成した。また、遺構・遺物を計測して観察表を作成した。

写真図版の編集は、11月から開始した。遺構写真は発掘調査時に撮影したものを使用し、遺物写真はスタジオで撮影した。報告書掲載用に選別した写真は画像処理ソフトでトリミング等を行い、パソコン上で割り付け・写植等を行って写真図版を完成させた。

12月から完成した図版・表および本文の割付作業と原稿執筆を開始し、1月下旬に印刷業者を決定して入稿した。また、遺物・図面類・写真等の記録類は分類・整理し、報告書との対照が可能な状態で収納作業を行った。

印刷原稿の校正は3回行い、平成24年3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部長	村田 健二
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	調査監兼調査第一課長	金子 直行
総務課長	松盛 孝		

平成20年度（発掘調査）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部長	村田 健二
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	調査監兼調査第一課長	金子 直行
総務課長	松盛 孝	主 査	岩瀬 讓
		主 査	大谷 徹
		主 事	松本 美佐子

平成21年度（発掘調査）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部長	小野 美代子
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	調査監兼調査第一課長	金子 直行
総務課長	田中 雅人	主 査	山本 禎
		主 査	大谷 徹

平成23年度（報告書作成）

理事長	藤野 龍宏	調査部	
常務理事兼総務部長	根本 勝	調査部長	小野 美代子
総務部		調査部副部長	劔持 和夫
総務部副部長	金子 直行	主幹兼整理第一課長	細田 勝
総務課長	矢島 将和	主 査	大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本報告の各遺跡は、埼玉県北西部の児玉地域北部に位置している。児玉地域は都心から約80kmの圏域に含まれ、本庄市、美里町、神川町および上里町の1市3町からなる。

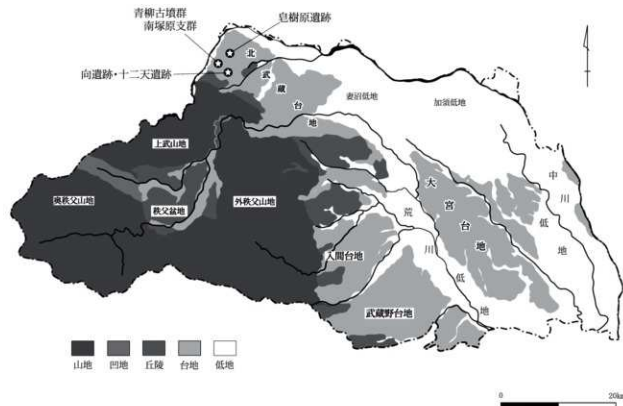
地形的には、秩父山麓に走る古い断層の「八王子一高崎構造線」を西の境、神流川および利根川を北の境として、上武山地から連なる児玉丘陵・松久丘陵が北東へと舌状に張り出し、さらに生野山・大久保山、諏訪山・日崎山と呼ばれる独立丘が列をなして点在する。また児玉丘陵の北東には神流川によって形成された洪積扇状地（神流川扇状地）である本庄台地が広がっている。

次に、各遺跡の地勢についてみると、本庄市児玉町保木野に所在する向・十二天遺跡は、児玉丘陵の麓に広がる低台地上に立地する。その東方には児玉丘陵の断層崖付近に源を発する赤根川（現

女堀川）と神川町大字二宮に鎮座する金鑽神社の沢を水源とする金鑽川が合流して形成された低地が広がり、この両河川は古くから用排水路として大きな役割を果たしてきたことが知られる。

青柳古墳群は、神流川扇状地の河岸段丘上を中心に11の支群が帯状に連なっている。神川町中央部の大字新里に所在する南塚原支群は、向・十二天遺跡から直線距離にして西へ約2.3kmに位置し、まさに金鑽川が丘陵部から平地に抜け出たところに、古墳群が占拠している。微視的には、赤根川・金鑽川水系に展開する古墳群として、その成立背景を検討すべきものである。

皂樹原遺跡は、神川町北部の大字元阿保に所在し、行政界を隔てて上里町榎下遺跡に接する。本来は同一の遺跡を形成しており、本庄台地西端部の標高約86mの平坦地に立地している。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

ここでは児玉地域北部を中心に古墳時代以降の遺跡の推移を概観したい(第2・3図)。

古墳時代前期の遺跡は、丘陵部に散開する弥生時代後期の遺跡とは様相を一変し、女堀川低地内の自然堤防や微高地上に多数の集落が形成され、この時期に沖積地の開発が本格化したことを物語っている。向・十二天遺跡の所在する赤根川流域でも、大規模集落はないが、微高地や丘陵部周辺の低台地上に小規模集落が出現し、女堀川中流域の集落群と一体となり開発が推し進められた。

一方、神流川扇状地周辺では丘陵部の前組羽根倉遺跡や新羽根倉遺跡で住居跡や方形周溝墓が知られるほかは、これまで神流川段丘上の海老ヶ久保遺跡で住居跡が調査されているだけで、該期の遺跡は希薄である。しかし、金鑛川を望む低台地上に立地する南塚原支群の一角に4世紀半ばの方形周溝墓群の存在が明らかとなり、周辺に築造母胎となる集落の存在が予想されるに至った。

古墳時代中期は、これらの前期集落の進展を基盤にして、低地内やその周辺に集落がさらに展開し、その様相は後期においても継続する。しかし、中期の赤根川流域では倉林後遺跡や枇杷橋遺跡など小規模集落が多く、本庄台地南縁部の夏目遺跡群や女堀川中流域の後張遺跡群のような中核的な集落群は形成されず、後期になり突如、沖積地内の微高地上に古式須恵器を多量に出土したミカド遺跡が出現し、地域的な高揚がうかがわれる。

神流川扇状地周辺でも中期の遺跡の分布はまだ少ないが、青柳古墳群の成立に呼応するかのように神川岡新里の広い低台地上に古墳時代後期の大集落である中道遺跡・精進場遺跡の形成が開始される。同時に、段丘上にも小規模集落が拡散し始め、神流川扇状地の開発が本格的に好動した。

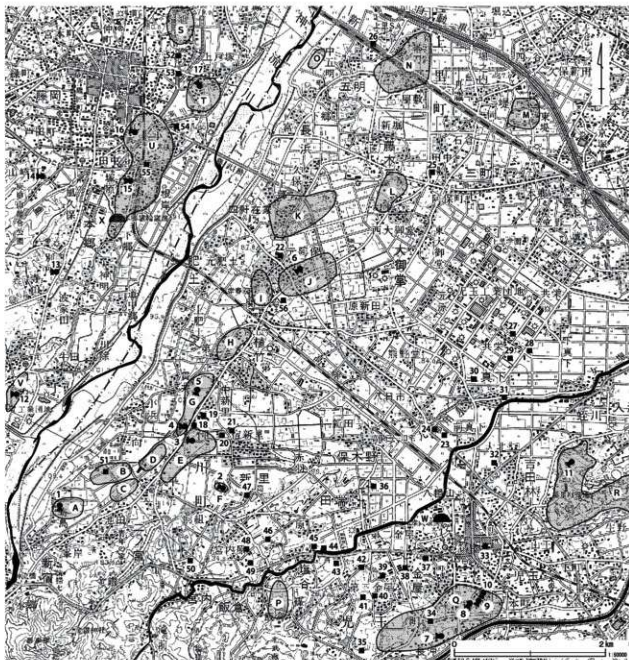
ところで、児玉地域北部の古墳群の分布を俯瞰すると、主要河川に沿って列状に並んでいることが見て取れる。西から、神流川に沿って並ぶ古墳

群列(青柳古墳群・大御堂古墳群・帯刀古墳群・東堤古墳群など)、利根川に沿った段丘上に並ぶ古墳群列(旭・小島古墳群・北原古墳群・塚合古墳群・御堂坂古墳群・鶴森古墳群など)、小山川に沿って並ぶ古墳群列(長沖古墳群・生野山古墳群・塚本山古墳群・西五十子古墳群・東五十子古墳群など)に大別し得る。とりわけ横穴式石室が採用された6世紀後半以降は横穴式石室の構造や構築石材の種類に顕著な地域色を発現している。

7世紀後半以降になると、低地帯内のほとんどの集落が廃絶し、本庄台地縁辺部や残丘斜面下の低台地上に移動する現象がみられる。本庄台地に新たに形成された将監塚・古井戸遺跡、皂樹原・檜下遺跡は9世紀前半頃まで継続的に集落が営まれている。このような当地域における集落の大規模な再編成は、律令国家体制の形成期の地方組織の編成過程と無関係ではあるまい。おそらく低地内の条里制施工のために計画的な集落移動を伴う地域社会の再編が行われたのであろう。

8世紀から9世紀にかけて低地を取り囲むように、さらに周辺部へと集落が拡散し、本庄台地縁辺部ではほとんど切れ間がないまでに集落が展開する。しかし、9世紀後半になると本庄台地上に営まれた律令期集落は縮小・解体し、10世紀にかけて周辺の沖積地に小規模集落が再び進出する。

向・十二天遺跡もこうした平安時代中期における在地社会の変動を背景に成立した集落の一つである。該期の集落の中では比較的規模が大きく、施釉陶器の保有率や役所や寺院などで文字の訂正などに使用されることの多い朱墨を用いた朱書土器の存在から「富豪の輩」と呼ばれた富裕層によって経営された集落の側面をうかがわせる。この時期は政治的にも律令制的な人民支配・租税収取に限界が生じ、律令国家体制から王朝国家体制に移行する変革期であり、東国の集落遺跡の動態に反映された史的背景の解明が今後の課題である。



①古墳群・支那 (A～V)

A 古墳古墳群跡(伊野支那) B 古墳古墳群跡(高老ヶ久保支那) C 古墳古墳群跡(十二ヶ谷支那) D 古墳古墳群跡(二ノ宮支那) E 古墳古墳群跡(南東支那) F 古墳古墳群跡(白岩支那) G 古墳古墳群跡(北保原支那) H 古墳古墳群跡(竹支那) I 古墳古墳群跡(元支那) J 古墳古墳群跡(元阿保支那) K 古墳古墳群跡(新在家支那) L 大願堂古墳群 M 東岡古墳群 N 帯刀古墳群 O 下郷古墳群 P 飯倉古墳群 Q 長沖古墳群 R 生野古墳群 S 戸塚古墳群 T 上栗原古墳群 U 小林古墳群 V 神田古墳群

②輪郭遺跡 (W・X)

W 八幡山輪郭遺跡 X 本郷輪郭遺跡

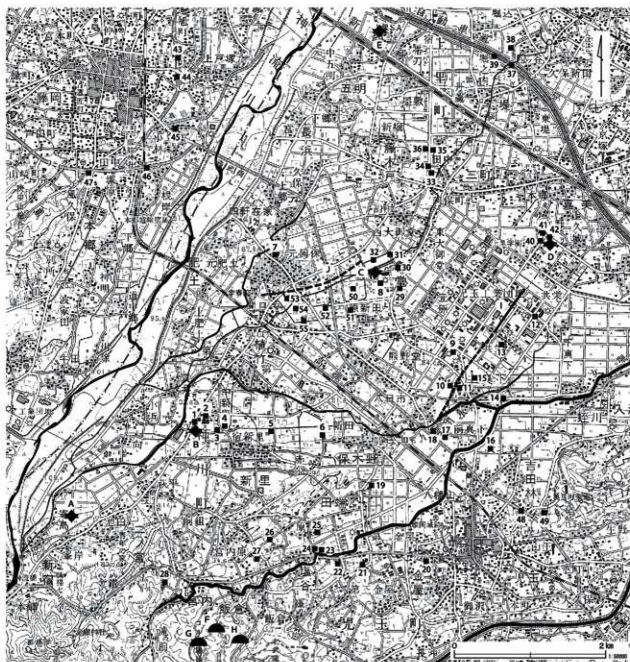
③前方後円墳 (1～17)

1 神田町№253古墳 2 白針鏡子塚古墳 3 南塚原9号墳 4 北塚原9号墳 5 中新里諏訪山古墳 6 元阿保稲荷神社古墳 7 長沖十兵衛塚古墳 8 長沖25号墳 9 長沖32号墳 10 長沖31号墳 11 鏡子塚古墳 12 日見丸里村194号墳 13 別所堂山古墳 14 上毛古墳群(飯倉)5号墳 15 本郷二子山古墳 16 高野神社古墳 17 戸塚神社古墳

④集落遺跡等 (18～56)

18 野道集落跡 19 中道集落跡2～24地点 20 中道集落跡1地点 21 西北原遺跡 22 安保氏遺跡 23 反町遺跡 24 八雲神南遺跡 25 第二次田中遺跡 26 天神林遺跡 27 古井戸南遺跡 28 平塚遺跡 29 塚山遺跡 30 上ノ内遺跡 31 上真下家遺跡 32 高崎田遺跡 33 神町遺跡 34 長沖久保遺跡 35 ウリ山遺跡 36 向ノ十二天遺跡 37 金屋北原遺跡 38 金屋南原遺跡 39 倉林後遺跡 40 倉林後B遺跡 41 念仏塚遺跡 42 肥後遺跡 43 塩谷下久保遺跡 44 ミカ下遺跡 45 ミカ下西遺跡 46 長野寺後遺跡 47 新羽尾倉遺跡 48 下原北遺跡 49 下原南遺跡 50 新羽尾倉遺跡跡 51 海老ヶ久保遺跡 52 萩木B遺跡 53 萩木遺跡 54 土師倉遺跡 55 堀ノ内遺跡 56 鏡目河原遺跡

第2図 周辺の遺跡(古墳時代)



①瓦出土遺跡 (A～E)

A 城ノ野後寺 B 難波塚遺跡 C 色原京遺跡 D 立野南・八幡大神南・熊野大神南遺跡 E 五明院寺

②空跡 (F～H)

F 見玉古京跡 G 金甲京跡 H 龜倉京跡

③古代河跡 (I・J)

I 真下大溝 J 女観大溝

④集落遺跡等 (1～55)

1 難波塚遺跡 2 中道遺跡第2～24地点 3 中道遺跡第1地点 4 西北京遺跡 5 中北京遺跡 6 保木野塚遺跡 7 安保氏別荘 8 色原原・榎下遺跡 9 神田町No.264遺跡 10 真下塚内遺跡
 11 真下塚東遺跡 12 野尻塚・古井戸遺跡 13 南江和遺跡 14 上真下塚遺跡 15 比ノ内遺跡 16 榎塚遺跡 17 反町町遺跡 18 八雲神社南遺跡 19 向・十二天遺跡 20 金原北京遺跡
 21 難波塚遺跡 22 龜倉大塚遺跡 23 ミカド遺跡 24 ミカド西遺跡 25 朝尾後遺跡 26 真鏡寺後遺跡 27 下野南遺跡 28 大田遺跡 29 不二塚前遺跡 30 大塚堂榎下遺跡 31 大塚堂
 女塚遺跡 32 池免遺跡 33 第二次中西遺跡 34 田中前遺跡 35 第一次中西遺跡 36 月日遺跡 37 新女地遺跡 38 新女地B遺跡 39 中塚遺跡 40 立野南遺跡 41 八幡大神南遺跡
 42 熊野大神南遺跡 43 桃木B遺跡 44 桃木遺跡 45 上御倉空遺跡 46 堀ノ内遺跡群 47 山前遺跡 48 新林下遺跡 49 阿知城遺跡 50 中塚遺跡 51 金原京遺跡 52 久保宮遺跡
 53 藤白宮遺跡 54 光興寺遺跡 55 北京遺跡

第3図 周辺の遺跡(奈良・平安時代)

III 遺跡の概要

向遺跡・十二天遺跡（本市市児玉町保木野）

向遺跡と隣接する十二天遺跡は、JR八高線児玉駅の北西約2kmの本庄市児玉町保木野に所在する。周囲には水田と畑が広がり、のどかな風景をみせている。市道を隔て別々の遺跡として登録されているが、本来は一つの遺跡を形成するものである。遺跡は女堀川（旧赤根川）によって開析された低地帯を東に望む標高約93mの低台地上に立地する。これまでに旧児玉町教育委員会により数次にわたって調査が実施され、平安時代を中心とする集落跡であることが明らかにされている。

また、十二天遺跡の南端では「田端大溝」と呼ばれる古代の灌漑用排水路が検出され、台地の縁辺に沿って南西方向に延びていることが確認されている。この大溝は赤根川水系の灌漑用排水系統に属しており、女堀川低地に広がる金屋条里の基幹水路としての機能を果たしていたと推定されている（鈴木他1981）。

青柳古墳群南塚原支群（神川町大字新里）

青柳古墳群は、群馬県との県境を流れる神流川によって形成された神流川扇状地の河岸段丘部を中心に分布する11支群、総数270基余を数える県内屈指の古墳群である。南から城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮・南塚原・北塚原・植竹・関口・元阿保・四軒在家の各支群が連続と続き、北方の上里町内の古墳群へと続いている。また、南塚原支群の南東にある白岩丘陵上には前方後円墳の白岩鏡子塚古墳を含む白岩支群がある。

南塚原支群は、JR八高線丹荘駅の南西約2kmの神川町大字新里に所在し、南北約800m、東西約300～400mの範囲に、大塚稲荷古墳を主墳として90基以上もの古墳が密集していたことが、過去の記録や発掘調査によって明らかにされている。段丘沿いに分布する他の支群とは異なり、段丘崖からやや奥まった内陸部の起伏の少ない低台地上

に展開する。本支群の東側には、児玉丘陵の狭大な谷間から平地に流出した金鏡川の潤す水田地帯が、白岩丘陵を取り巻くように広がっている。さらに、古墳群の北側には古墳時代後期の集落跡としては当該地域最大の中道遺跡が控えている。

次に、青柳古墳群の分布状況を見ると、神流川の沖積地に面する低位段丘面の城戸野・海老ヶ久保支群、上位段丘面の十二ヶ谷戸・二ノ宮・北塚原・南塚原支群、丘陵上の白岩支群、さらに九郷用水より北側の沖積面との比高差の少ない植竹・関口・元阿保・四軒在家支群に大別することができる。こうした立地環境の違いが、群形成の開始時期や造墓期間、群構成にも反映されているものと考えられる。群中には中新里諏訪山古墳（42m）と白岩鏡子塚古墳（46m）の2基の前方後円墳のほか、それよりも一回り小さい前方後円墳の北塚原9号墳（29m）と南塚原9号墳（22.5m）、さらに直径40mの大型円墳の大塚稲荷古墳が6世紀初頭から末葉にかけて継ぎ的に築造されており、首長墓の変遷と群形成の関連性の究明など、今後に残された課題は多い。

皂樹原遺跡（神川町大字元阿保）

皂樹原遺跡は、JR八高線丹荘駅の東約1.5kmの神川町大字元阿保に所在する。遺跡は、神流川によって形成された標高83～86mの比較的平坦な本庄台地西端部に立地している。昭和58年から昭和62年にかけて工場建設に伴い、隣接する上里町繪下遺跡とともに大規模な発掘調査が実施され、奈良・平安時代の集落跡および中世の館跡（阿保境の館跡）が発見された。また平成21年には当事業団が、倉庫建設に伴い隣接地の発掘調査を実施した。周辺部でも神川町教育委員会と上里町教育委員会が、道路建設や農業基盤整備事業に伴う発掘調査を数多く実施し、古代加美郡における中核的遺跡群の実態が明らかにされつつある。

IV 向遺跡第2次調査

1. 調査の概要

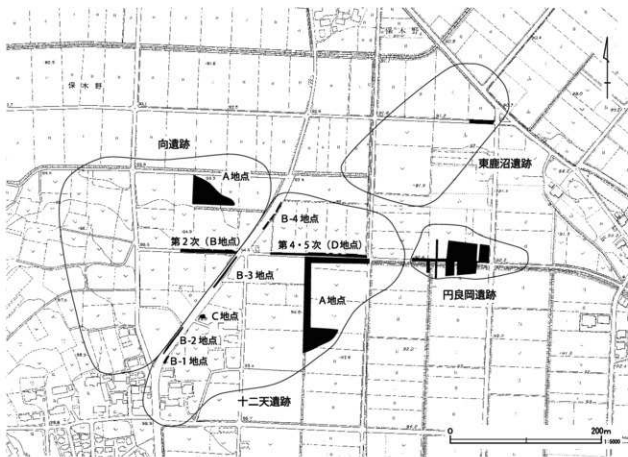
向遺跡は、金屋遺跡群（鈴木他1981）を構成する遺跡のひとつとして昭和53年に旧児玉町教育委員会によって調査されたのを嚆矢とする（A地点）。調査地点は、北東に張り出した児玉丘陵の小支丘の先端部に位置し、旧金鑛川によって開析された低地帯に接する台地の縁辺部にあたる。調査では古代にさかのぼる溝跡7条、井戸跡1基、土壌6基等が検出された。

今回の第2次調査区は、A地点から南に約60m離れた標高95mの平坦地に位置する。長さ約75m、幅約5mの東西に延びる調査区で、調査面積は399㎡である。市道を隔てた東側には十二天遺跡第4・5次調査区が隣接しているほか、周辺には昭和54年に調査が行われた十二天遺跡A地点、平

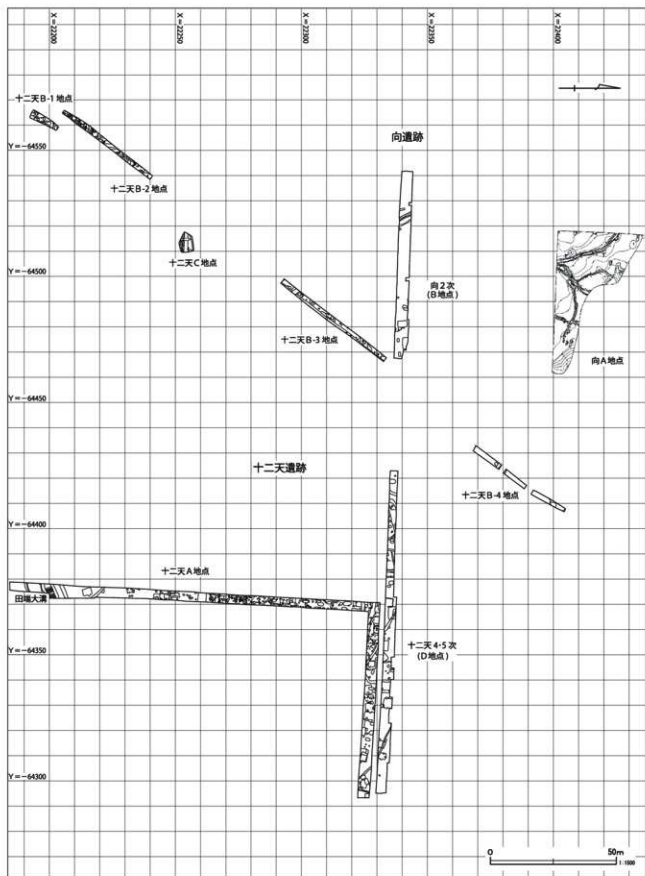
成8年に調査が行われた十二天遺跡B・C地点があり、断続的ながら調査が進展している。

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期の土壌1基、平安時代の竪穴住居跡4軒、溝跡1条、中・近世の土壌7基、ピット42基である。以下、各時代の概要について説明する。

古墳時代前期の遺構は、調査区の中央部で第6号土壌が単独で検出された。遺物は平底の小型壺が出土している。この他に遺構外から小型器台と吉ヶ谷式系の甕が出土している。後述するように十二天遺跡第4・5次調査でも該期の住居跡1軒と土壌1基が検出された。また過去の十二天遺跡の調査でも、A地点の土壌から複合口縁壺が、B-4地点では住居跡1軒が検出されている。



第4図 向遺跡・十二天遺跡周辺地形図

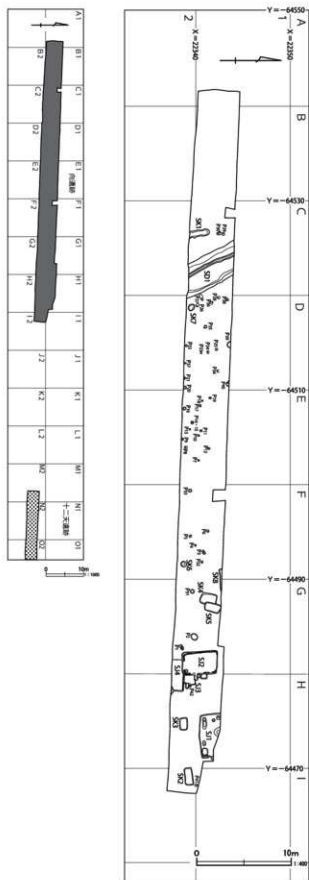


第5图 向遺跡・十二天遺跡調査区位置图

このように分布密度はあまり濃くないが、向・十二天遺跡では低地帯を臨む台地縁辺部を中心に該期の小規模な集落が形成されていたものと考えられる。周辺では赤根川上流部の沖積低地内の微高地に占地する田端南堂遺跡、ミカド遺跡、ミカド西遺跡、丘陵部や台地上に占地する塩谷下大塚遺跡、枇杷橋遺跡、念仏塚遺跡、金屋池脇遺跡、田端中原遺跡等で住居跡や方形周溝墓が検出されている。女堀川中流域の後張遺跡のような大規模集落は形成されていないが、丘陵部の弥生時代以来の伝統的な集落と低地部に進出した新興集落によって水田開発が積極的に進められたのであろう。

平安時代の竪穴住居跡は、十二天遺跡側に寄った調査区東端部において1軒が単独で、他の3軒は重複した状態で検出された。第1号住居跡からは須恵器、土師器に加え、緑釉陶器も出土している。また椀形鍛冶滓等の小鍛冶関連遺物の出土も注目される。第2～4号住居跡は出土遺物や重複関係から(古)S J 3→S J 4→S J 2(新)の順で、建て替えが行われたことが判明した。住居の時期は出土遺物の特徴から、第3号住居跡が9世紀後葉から末葉、第2・4号住居跡が10世紀前葉、第1号住居跡が10世紀前葉から中葉に位置づけられる。

調査区西端で検出された第1号溝跡は、上幅約3.4m、深さ約70cmを測る断面逆台形の溝跡で、北西方向に向かって走行する。埋土には砂層と粘土層の互層がみられ、流水の痕跡が明瞭であった。この溝跡を南に延長した十二天遺跡B-3地点でも同規模の溝跡が検出されている。さらに延長すると、条里水田の基幹水路と推定されている「田端大溝」に至ることから、田端大溝から取水された灌漑水路の可能性も考えられる。第1号溝跡の開鑿時期は、平底の北武蔵型環の出土から少なくとも8世紀末葉までさかのぼる。廃絶時期は、出土須恵器や埋土中に浅間B軽石を含まないことから10世紀末葉までには埋没したようである。



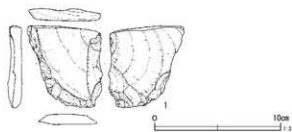
第6図 向遺跡第2次調査区全測図

2. 遺構と遺物

(1) 縄文時代

ア. グリッド出土遺物 (第7図)

1は掻・削器と考えたが、打製石斧の基部の可能性もある。表面に主要剥離面を残し、左側縁は表面から、下端部のみ表裏両面からの調整剥離がみられる。石材は頁岩である。



第7図 グリッド出土遺物

(2) 古墳時代

ア. 土壌

第6号土壌 (第8図)

F-2グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は径0.60m、深さ0.53mである。埋土の状況は1・2層が柱痕、3~6層が掘り方埋土と考え



第8図 第6号土壌・出土遺物

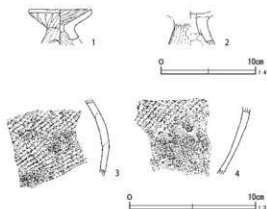
られる。本来ならば柱穴とすべきであるが、単独であることから土壌とした。遺物は埋土中層から1の土師器小型壺が出土した。胴部中位に最大径を有し、内面調整は粗いヘラナデを施す。古墳時代前期の所産である。

第1表 第6号土壌出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	—	[8.1]	6.5	ABC1	60	普通	橙	No.1 胴部外面器面粗れる	4-2

イ. グリッド出土遺物 (第9図)

遺構に伴わない古墳時代前期の遺物を一括する。1・2は小型器台である。1は器受部から接合部にかけての破片で、脚部を欠損する。器受部は小さく、接合部は細くすばまる。脚部には三方に円孔を穿孔している。器受部内外面にはヘラミガキを施し、脚部内面にはヘラナデを施す。F-1グリッドから出土した。五領式期中葉から後葉に位置づけられる。2は接合部から脚部にかけての破片である。器受部を剥離する。脚部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラナデを施している。第2



第9図 グリッド出土遺物

第2表 グリッド出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	器台	6.6	[3.8]	—	ABEHI	90	普通	明褐色	F1G 円孔三方透し	4-3
2	土師器	器台	—	[3.0]	—	CGHIK	80	普通	にぶい橙	SJ2 No.1 器受部剥離 内面に指頭圧痕を残す	
3	土師器	甕	—	[6.1]	—	ABEHI	破片	普通	明赤褐	F-1G 表採 外面縄文・ナデ 内面ヘラミガキ	4-4
4	土師器	甕	—	[5.4]	—	ABEHI	破片	普通	にぶい赤褐	Pt31 外面縄文・ヘラミガキ 内面ヘラミガキ	4-4

号住居跡の埋土中から出土した。

3・4は、弥生後期の吉ヶ谷式土器の系譜をひくと考えられる甕の胴部片である。胴部上半の外面にLR単節横位回転の縄文を施文する。3はF-1グリッド、4はビット31からそれぞれ出土した。五領式期の前葉から中葉に位置づけられる。

(3) 平安時代以降

A. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第10図)

調査区東端のH-1グリッドに位置する。住居の北半分が調査区域外にかかるため全容は明確でない。カマドを東壁に設けた方形もしくは縦長長方形の住居跡と推定される。検出した規模は長軸長4.70m、短軸長2.20m、深さ0.25mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。貼床は部分的に施されており、ロームと黒褐色土との混土層 (第8層) による硬化面を形成していた。壁溝は認められなかったが、ビット6基が検出された。ビット1は南壁の中央部付近にあり、埋土に多量の焼土ブロック・焼土粒子を含んでいた。周辺から焼形鍛冶滓や鉄製品等が出土していることから鍛冶炉の可能性も考えたが、明確にし得なかった。ビット2はカマド右脇の南西隅部に位置する。平面楕円形で掘り込みが浅く、底面が平坦であることから、貯蔵穴と考えられる。ビット3は床面中央部にあり、平面楕円形と推定される。土層断面の観察では住居廃絶後に掘り込まれた可能性が高い。ビット4~6は、西壁際に沿って並んでいた。このうちビット4のみが72cmと深く掘り込まれていた。位置的には柱穴とするよりも入口施設に関わるも

のであろうか。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設けられていると推定される。燃焼部は壁を切り込んで円く掘り込まれていた。燃焼部の長さ0.55mで、底面は浅く凹み、奥壁は緩やかに立ち上がる。燃焼部壁面には、補強材として用いられた片岩がわずかに残っていた。

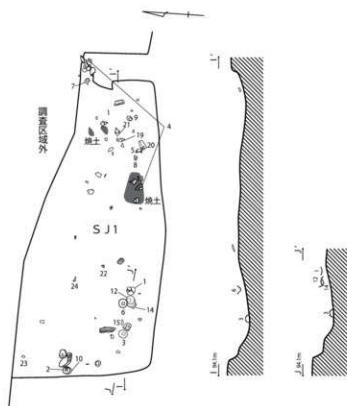
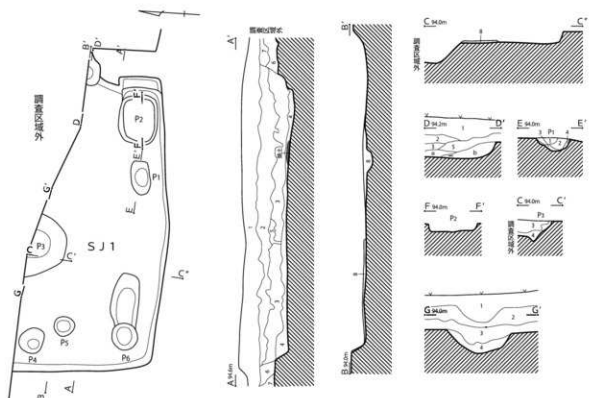
遺物はビット1・2およびビット6の周辺からまとまって出土した (第11図)。特にビット6からは完形に近い高台付環・高台付塊・高台付皿などが意図的にまとめて置かれていた。

住居の時期は、15の緑釉陶器輪花皿や16・17の灰釉陶器碗に古い様相がみられるが、酸化焙焼成の高台付環が主体を占め、13・14の足高台塔が共存することから、10世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。

第2号住居跡 (第12図)

調査区東端のG-1・2、H-1グリッドに位置し、第1号住居跡から西へ約4m離れている。第3・4号住居跡と重複し、双方とも壊していた。平面形は、南北に長い横長長方形で、東壁のほぼ中央にカマドを設けていた。規模は長軸長3.73m、短軸長2.42m、深さ0.22mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。貼床は土層断面図に表現していないが、ほぼ全面にわたって施されていた。壁溝は北壁と南壁の東寄りの部分にはなかったが、他の壁面には断続的に巡らされていた。幅9cm、深さ5cmほどの小規模なものである。明確な柱穴はないが、南東隅部にビット1が検出された。ビット1は平面楕円形で径長0.44m、短径



- SJ1**
- 1 暗褐色土 浅間A軽石粒子含む（耕作土）
 - 2 黒褐色土 暗褐色ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 4 褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 5 褐色土 黒褐色ブロック・ローム粒子を含む
 - 6 褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 7 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 8 暗褐色土 ロームと黒褐色土との混土層 しまりよく、粘性弱（粘土）

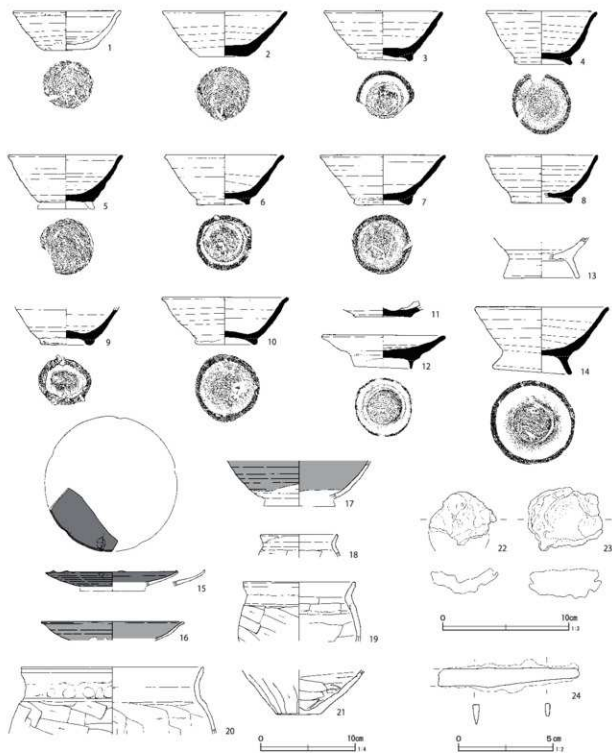
- SJ1 カマド**
- a 赤褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック少量含む
 - b 暗褐色土 焼土粒子多量混入

- ビット1**
- 1 赤褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒子を微量含む
 - 2 赤褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒子を少量含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 4 暗褐色土 焼土ブロック・炭化ブロックを少量、ローム粒子を微量含む

- ビット3**
- 1 暗褐色土 浅間A軽石粒子を含む（耕作土）
 - 2 黒褐色土 暗褐色ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む
 - 3 暗褐色土 φ5mm程度の炭化物を少量含む
 - 4 黄褐色土 3層土とロームとの混土層 φ5~10mm程度の炭化物を多量に含む

0 2m 1m

第10図 第1号住居跡



第11図 第1号住居跡出土遺物

0.33m、深さ0.12mである。位置的にみて貯蔵穴として良いだろう。埋土は自然堆積を示す。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられていた。燃燒部は壁を切り込んで、方形に掘り込まれている。規模は燃燒部長0.72m、燃燒部幅0.35mである。

底面は概ね平坦で、燃燒部の奥壁は急角度で立ち上がる。土層断面の観察によると、e層が火床面（使用面）、a・f層が天井部崩落土、d層が袖部崩落土に相当する。カマド袖を半載した結果、地山の黄褐色土を掘り残して、灰褐色粘土を用い

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版		
1	土師器	環	11.4	4.2	5.0	ACEHI	90	普通	にぶい褐	№14 底部外面回転系切り 酸化焙焼成	4-5		
2	須恵器	環	13.2	4.8	5.4	ABEHL	100	良好	黄灰	№42 底部外面回転系切り	4-6		
3	須恵器	高台付環	12.4	5.6	6.0	ACEH	95	良好	にぶい褐	№8 底部外面回転系切り 酸化焙焼成	4-7		
4	須恵器	高台付環	11.6	5.6	6.2	ACEHL	80	良好	灰黄	カマド№1.P1 №1 底部外面回転系切り	4-8		
5	須恵器	高台付環	(12.0)	[4.9]	—	ACEHI	50	良好	暗灰黄	№22 底部外面回転系切り 高台割離	4-9		
6	須恵器	高台付環	12.4	5.2	5.7	AEH	100	良好	黄灰	№11 底部外面回転系切り	5-1		
7	須恵器	高台付環	(13.1)	5.2	6.2	ABCE	40	不良	にぶい黄橙	カマド№3, 表探 底部回転系切り 酸化焙焼成	5-2		
8	須恵器	高台付環	(11.8)	5.1	(6.4)	ACI	20	良好	黄灰	№21, 表探 底部外面回転系切り 黒色処理か			
9	須恵器	高台付環	—	[4.0]	5.6	ACHIK	40	不良	にぶい黄橙	№26 底部外面回転系切りか			
10	須恵器	高台付環	13.3	5.0	6.6	ABEHI	100	良好	灰黄褐	№43 底部外面回転系切り	5-3		
11	須恵器	皿	—	[1.7]	(6.0)	CEHIK	10	普通	灰	底部外面回転系切り 内面一部発泡			
12	須恵器	高台付皿	12.8	3.5	6.0	ACEH	95	普通	灰黄	№12 底部外面回転系切り	5-4		
13	土師器	高台付埴	—	[4.3]	(8.0)	ACEHI	30	普通	にぶい橙	№2 底部外面回転系切り 酸化焙焼成 足高高台			
14	須恵器	高台付埴	14.1	7.1	8.5	ABCEHI	100	普通	灰黄	№13 底部外面回転系切り 足高高台	5-5		
15	埴輪陶器	輪花皿	(14.0)	[1.6]	—	I	20	良好	灰白	№1 脇投産 口縁補修取 軸装: 灰オリーブ	5-6		
16	埴輪陶器	埴	(15.0)	[2.0]	—	IK	10	良好	灰白	表探 脇投産 黒世90号型式 ハケ埴り	5-7		
17	埴輪陶器	埴	—	[4.0]	—	IK	10	良好	灰黄	P3 静岡産 黒世90号型式 ハケ埴り	5-7		
18	土師器	小型甕	(8.0)	[2.5]	—	ACHI	20	良好	黒褐	焼土内 台付糞か			
19	土師器	小型甕	(11.7)	[6.3]	—	ACEHIK	20	普通	にぶい赤褐	№23 台付糞か			
20	土師器	甕	(19.2)	[7.1]	—	ACHI	25	普通	橙	P2 №1 コの字状口縁			
21	土師器	甕	—	[4.7]	4.8	AHI	60	普通	にぶい赤褐	P2 №4, 表探 底部外面ヘラケズリ			
22	鉄滓	椀形副治片	長さ4.2	幅5.2	厚さ1.0	重さ29.4					№16 やや小型 半月状	6-9	
23	鉄滓	椀形副治片	長さ4.5	幅5.8	厚さ2.2	重さ94.7					№45 砂鉄結塊が上面を覆っている	6-9	
24	鉄製品	刀子	長さ17.5	身長1.0	身長5.4	厚さ0.2	重さ9.3					刀身部折損 基尻を丸くおさめる	6-8

て構築されていることが判明した。またカマド掘り方を調査した際に、わずかに北側に外れた位置から別の古いカマドの痕跡が確認された。この他にカマド左脇には棚状施設が確認された。壁を長さ50cm、幅51cm、深さ10cmほど切り込んだものである。その性格を示すような特徴的な構造や遺物の出土状況はなかった。残念ながら土層断面による観察が不十分であるため、住居に伴う付属施設であるかどうか断定することは難しい。

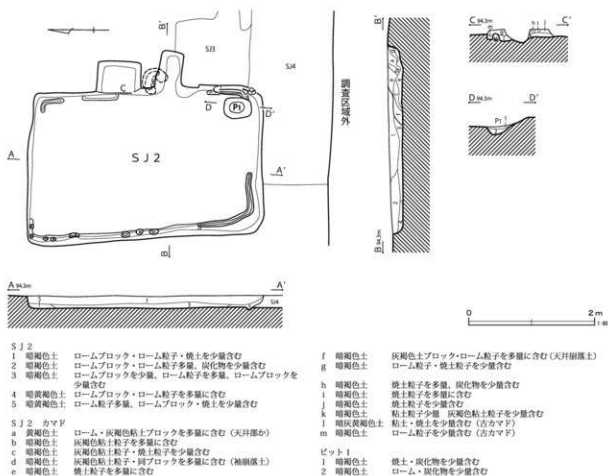
遺物は須恵器環、土師器甕が少量出土した(第13図)。1・2は酸化焙焼成の須恵器環で、全体に器壁が厚い。3は胴部外面のヘラケズリ調整や底部外面の離れ砂痕跡の特徴からコの字糞と考えられる。住居の時期は、重複関係から3軒の中では最も新しく位置づけられ、酸化焙焼成の須恵器環の特徴から、10世紀前葉を中心とした時期に位置づけておきたい。

第3号住居跡(第14図)

G-2、H-1・2グリッドに位置する。第2・4号住居跡と重複し、双方に壊されていた。カマドを東壁に設けた小型の住居跡で、北東隅部周辺のみを残す。平面形は方形系で、東西長は2.5m以下である。床面までの深さは12cmで、掘り込みは浅い。主軸方位はN-86°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。壁溝や柱穴等はない。カマドは東壁の北東隅部寄りに設けていた。燃焼部は壁を切り込んで、方形に掘り込まれている。規模は燃焼部長0.62m、燃焼部幅0.23mである。底面は浅く凹み、礎石脚が設置されていた。カマド袖の残りはあまり良好でない。

遺物はカマドを中心に出土した(第15図)。1は体部上半に指頭痕を残し、同下半をヘラケズリする土師器環である。2・3は内外面に黒色処理(燻し焼き)を施した須恵器環で、軟質の焼き上



第12図 第2号住居跡



第13図 第2号住居跡出土遺物

第4表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	[3.0]	—	ABCE	30	普通	灰褐	P1 酸化焙焼成	
2	須恵器	坏	(12.7)	[4.3]	—	ACHI	20	普通	にぶい黄褐	表採 酸化焙焼成	
3	土師器	甕	—	[6.8]	(3.6)	AEHI	25	普通	橙	掘方 P1 底部外面離れ砂り痕	

がりである。5～7は台付甕と考えられる小型甕である。5の口縁部は比較的形の整ったコの字状口縁で、やや器壁が厚い。6・7は口縁部が緩やかに反外するくの字甕である。住居の時期は、3軒の中では最も古く位置づけられ、9世紀後葉から末葉を中心とする時期と考えられる。

第4号住居跡 (第14図)

G・H-2グリッドに位置する。住居の南側半分が調査区域外にかかるため、その全容については不明である。第2・3号住居跡と重複し、第3号住居跡を壊し、第2号住居跡によって北東隅部が壊されていた。カマドを東壁の中央に設けた

方形もしくは縦長長方形の住居跡と推測される。検出された規模は東西長3.28m、南北長1.35m、深さ15cmである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

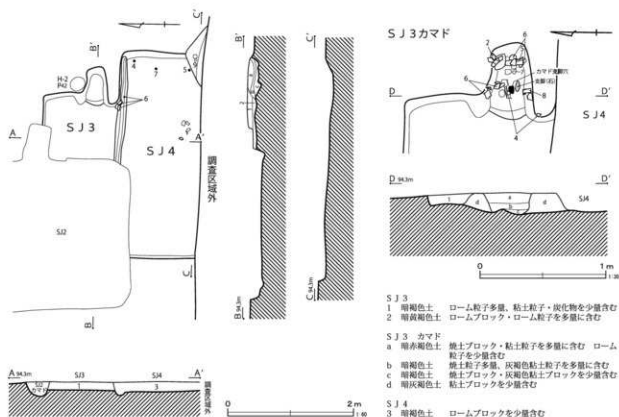
床面はやや凹凸がみられ、ほぼ全面にわたって貼床が施されていた。壁溝は北壁のみに巡り、東壁・西壁にはない。壁溝の規模は幅22cm、深さ7cmである。柱穴等の付属施設はなかった。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土である。概ね自然堆積であろう。

カマドは東壁の中央に設けられていた。燃焼部は壁を切り込み、先端部がやや尖る。燃焼部底面は緩やかに傾斜し、赤色硬化したような火床面は検出されなかった。カマドの長さは0.85mである。

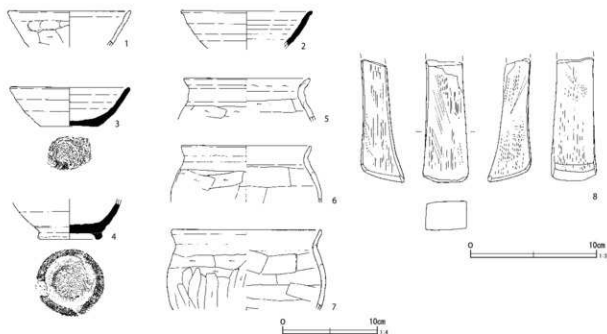
遺物はカマドおよびカマド左脇の東壁沿いから少量出土した(第16図)。1~3は須恵器環である。1・2は外面に墨書が認められる。小片のた

め一文字分しか判読できない。1の字形は「田」であろうか。「田」の墨書は、周辺では阿知遺跡跡A地点第2号住居跡からまともに出て出している。その他に「大田」の墨書が、将監塚・古井戸遺跡から出土している。4は須恵器皿で、口径が小さく器壁が厚い。5・6は須恵器高台付環で、5はカマドから出土した。高台が長くのびて、ハの字に開く。7は土師器の小型甕で、台付甕の可能性が高い。くの字状口縁で、口唇部には凹線状のヨコナデを施す。8は土師器甕で、コの字状口縁の屈曲が弱く、退化している。9は楕円形の椀形鍛冶滓の破片である。表面は細かな凹凸があり、気孔がみられる。裏面は半球状で中央部が突出している。カマドから出土した。

住居の時期は、重複関係と出土土器の様相から、第3号住居跡よりも新しい10世紀前葉に位置づけておきたい。



第14図 第3・4号住居跡



第15図 第3号住居跡出土遺物

第5表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	(13.6)	[3.8]	—	ABHI	10	普通	橙	カマド 体部外面ヘラケズリ	
2	須恵器	環	(13.6)	[4.0]	—	ACEI	25	普通	黒褐	カマド№11, カマド一括, 試験 黒色処理か	
3	須恵器	環	(12.4)	4.1	(6.0)	AEHI	20	普通	灰黄褐	カマドSJ2一括 底部回転糸切り 黒色処理か	
4	須恵器	高台付環	—	4.3	6.8	ACHI	70	普通	灰黄褐	カマド№15.25, カマド一括 底部回転糸切り	
5	土師器	小型甕	(13.2)	[4.6]	—	ACEHIK	25	普通	にぶい・橙	カマド№3	
6	土師器	小型甕	(14.2)	[6.2]	—	ACEHI	35	普通	明赤褐	カマド№3, 4.6, 16.18 口縁部スス付着	5-8
7	土師器	小型甕	(15.8)	[8.5]	—	AHIK	10	普通	橙	カマド№2, SJ2一括 胴部外面スス付着	
8	石製品	砥石	長さ[9.8]	幅3.5	厚さ2.3	重さ138.1	石材: 凝灰岩			カマド№13	6-7

イ. 溝跡

第1号溝跡 (第17図)

調査区西端部に近い、C-1・2、D-2グリッドに位置する。調査区を南東から北西に向かって縦断する大きな溝跡である。規模は長さ5.33m、上幅3.38m、底面幅2.46m、深さ0.61～0.71mである。断面形は幅の広い底面をもつ逆台形で、壁面の立ち上がりは急角度である。底面の中央やや西壁寄りには、溝の掘り直しに伴う幅の狭い溝跡が掘り込まれていた。底面は地形に従い、北に向かって緩やかに傾斜する。溝の走行方向はN-25°-Wを指す。

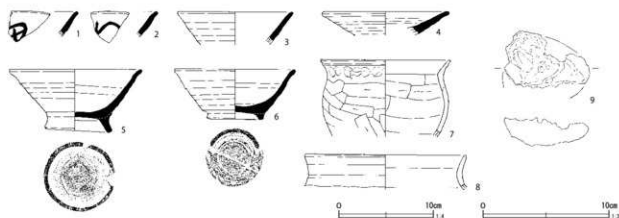
埋土には砂層と粘土層の互層が幾重にも認められ、流水の痕跡を良く留めていた。土層断面の観

察では、複数回におよぶ掘り直しが確認されている。とりわけレンズ状に自然堆積した土層を掘り込んだ菜研形の溝跡の痕跡は明瞭である。

遺物は埋土中から土師器環、須恵器高台付環、不明鉄製品が出土した (第17図)。1は平底で扁平な器形の北武蔵型環である。時期は9世紀前半に位置づけられる。2は須恵器高台付環である。軟質の焼き上がりで、10世紀前半葉に位置づけられる。3は端部に小孔を穿つ棒状品である。

第1号溝跡の性格は、居住域の西限を画する区画溝としての機能と、流水の痕跡から想定される用排水路的な機能を併せもつものであろう。

出土遺物から、集落の形成開始期から長期間にわたって機能していたものと考えられる。



第16図 第4号住居跡出土遺物

第6表 第4号住居跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	環	—	[2.7]	—	ACEHI	破片	普通	にぶい褐	SJ2 カマド 外面黒書「田」か 酸化焙焼成	6-1
2	須恵器	環	—	[2.7]	—	ACEI	破片	良好	黄灰	SJ2一括 外面黒書	6-2
3	須恵器	環	(12.0)	[3.4]	—	ABCH	10	普通	明赤褐	一括 酸化焙焼成 赤焼け	
4	須恵器	皿	(13.0)	[2.5]	—	ACEHM	20	普通	にぶい褐	SJ2 No.23 酸化焙焼成	
5	須恵器	高台付環	13.9	6.6	7.1	AEHI	80	良好	灰黄褐	SJ2 No.24 底部外面回転糸切り	6-3
6	須恵器	高台付環	12.7	5.2	(6.0)	AEH	80	良好	灰黄褐	SJ2 No.14,27,掘り方 SJ3 カマドNo.22,23,24	6-4
7	土師器	小型甕	(13.6)	[8.1]	—	AEHIK	25	普通	にぶい褐	SJ2 No.20 台付糺か	
8	土師器	甕	(16.8)	[3.7]	—	CEHIK	20	普通	にぶい赤褐	コの字状口縁	
9	鉄滓	輪形銅治滓	長さ4.5	幅7.0	厚さ2.2	重さ75.5				カマドNo.1 裏面は半球状で中央部が突出する	6-9

ウ. 土壌

土壌は合計7基検出された。分布状況は調査区西端の第1号溝跡周辺および調査区東端の住居跡群周辺にみられる。遺物の出土がなく、時期不詳である。ここでは中・近世の土壌と考えておく。

第1号土壌 (第18図)

第1号溝跡西側のC-1・2グリッドに位置する。平面形は不整形で、南側は調査区域外に延びている。規模は長軸長2.16m、短軸長0.78m、深さ0.17mである。長軸方位はN-10°-Wを指す。

第2号土壌 (第18図)

調査区東端のH・I-2グリッドに位置する。平面形は比較的形の整った長方形で、断面箱形に掘り込まれる。規模は長軸長1.86m、短軸長0.87m、深さ0.44mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。埋土はロームブロックを多く含む黒褐色

土によって埋め戻されていた。

第3号土壌 (第18図)

H-2グリッドに位置する。平面形は長方形で、掘り込みは浅い。規模は長軸長1.33m、短軸長0.85m、深さ0.12mである。長軸方位はN-90°-Eを指す。遺物は出土していない。

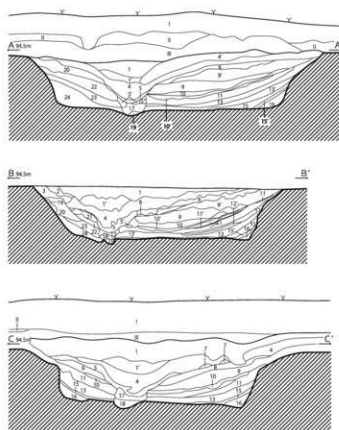
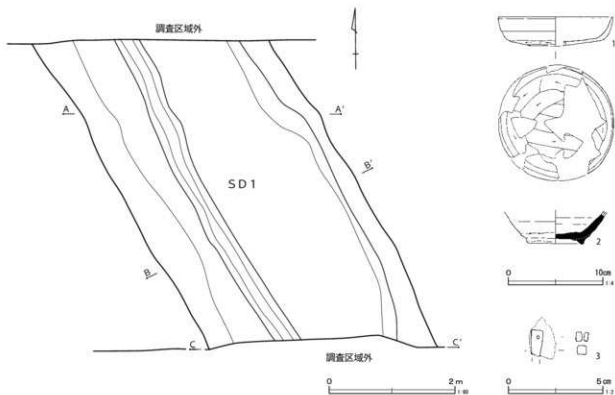
第4号土壌 (第18図)

G-1グリッドに位置する。第5号土壌と重複し、一部壊されている。平面形は長方形で、規模は長軸長1.74m、短軸長1.18m、深さ0.32mである。長軸方位はN-17°-Eを指す。

遺物は、酸化焙焼成で軟質の焼き上がりの須恵器環(第19図1)が出土した。

第5号土壌 (第18図)

G-1グリッドに位置する。第4号土壌と重複し、第4号土壌の一部を壊す。平面形はやや歪ん



- I 耕作土 浅層A軽石粒子を多量に含む
- II 暗褐色土 浅層A軽石粒子を少量含む
- III 暗褐色土 赤移層

- SD1
- 1 暗褐色土 砂層と互層 灰色粘土粒子を多量に含む
 - 1' 暗褐色土 砂層と互層
 - 2 黒褐色土 灰色粘土ブロックを少量含む
 - 3 黒褐色土 灰色粘土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 4 灰褐色土 灰色粘土を多量に含む 砂層と互層
 - 5 灰褐色土 灰色ブロック多量 炭化物を少量含む
 - 5' 灰褐色土 粘土層 鉄分を多量に含む
 - 5'' 灰褐色土 粘土・鉄分を多量に含む
 - 6 暗褐色土 灰色粘土ブロックを多量に含む
 - 7 暗褐色土 砂層 灰色粘土を少量含む
 - 8 灰褐色土 粘土層
 - 9 黒褐色土 砂層と粘土層(黒灰色)の互層
 - 9' 黒褐色土 粘土層
 - 10 灰褐色土 粘土質土と砂質土の互層
 - 10' 灰白色土 粘土層
 - 11 暗褐色土 粘土と砂の互層(黒褐色土) 最下層に灰色粘土が堆積
 - 11' 暗褐色土 粘土層(やや明るい)
 - 12 暗褐色土 砂層 11層に近似 下層に粘土が堆積
 - 12' 灰褐色土 11層に近似
 - 13 暗黄褐色土 砂とローム粒子の互層 最下層に灰色粘土が堆積
 - 13' 灰褐色土 粘土層 最下層に灰色粘土が堆積
 - 15 暗黄褐色土 黒色土と黄褐色土の互層
 - 16 黒色土 ローム粒子を少量含む 最下層直上に粘土層が堆積
 - 16' 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む
 - 17 灰褐色土 灰色粘土多量、ローム粒子を少量含む
 - 18 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 19 黒褐色土 粘土質 ローム粒子を多量に含む
 - 20 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子、炭化物を少量含む
 - 21 暗褐色土 砂質土 ローム粒子を少量含む
 - 22 暗黄褐色土 砂・ローム粒子の互層
 - 23 暗黄褐色土 砂とローム粒子の互層
 - 24 暗黄褐色土 黒色土と黄褐色土の互層



第17図 第1号溝跡・出土遺物

第7表 第1号溝跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	12.1	3.0	—	ACEHIK	70	普通	にぶい橙	北武蔵型環 平底扁平	6-5
2	須恵器	高台付環	—	[3.6]	(6.0)	ACEHUJ	40	普通	灰	一括 底部外面回転糸切り	
3	鉄製品	棒状品	長さ[1.4]	幅0.6	厚さ0.45	重さ1.8				端部に小孔を穿つ わずかに幅を減じる	6-8

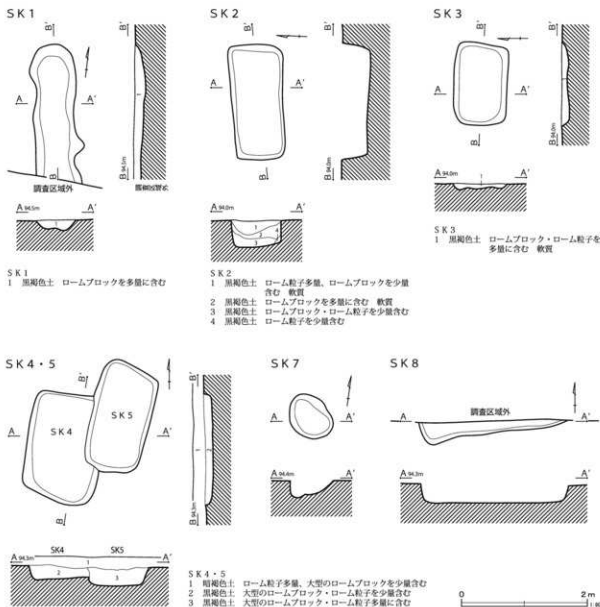
だ長方形で、規模は長軸長1.76m、短軸長0.93m、深さ0.20mである。長軸方位はN-11°-Eを指す。遺物は椀形鋳治滓が出土した。

第19図2は小型の椀形鋳治滓である。外形は円形を呈する。表面は平滑で周縁に鉄滓粒の付着がみられ、中央部は浅くくぼむ。裏面はやはり平滑

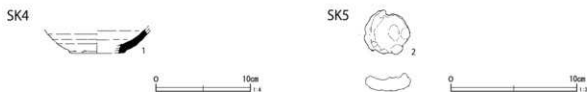
で半球状を呈し、土砂の付着がみられる。

第7号土塙(第18図)

第1号溝跡の東脇、D-2グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、底面は凹凸がみられる。規模は長径0.79m、短径0.66m、深さ0.27mである。遺物は出土していない。



第18図 第1～5・7・8号土塙



第19図 土壌出土遺物

第8表 土壌出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国取
1	須恵器	環	—	[2.9]	(6.0)	ACEH	30	普通	にぶい濁	SK4一括 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	6.9
2	鉄滓	輪形鋼滓	長さ3.0	幅3.5	厚さ1.0	重さ20.7				SK5一括 表面黒鉄滓粒 裏面土砂付着	

第8号土壌 (第18図)

F・G-1グリッドに位置する。大半が調査区域外にかかるため平面形は不明であるが、方形系と推定される。規模は東西長2.37m、深さ0.30mである。長軸方位はN-89°-Eを指す。

遺物は出土していない。

E. ビット

調査区内からビットが42基検出された。第1号溝跡の東側から第2号住居跡までの間に分布していた(第6図)。直線的に配列されたものもみられるが、調査区の制約もあり明確に掘立柱建物跡や柵列として捉えられるものはなかった。

時期のわかる遺物は出土していないが、埋土の状況から古代から中・近世にかけて埋没したもの

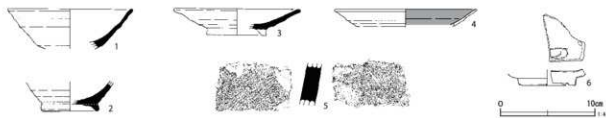
と考えられる。

オ. グリッド出土遺物 (第20図)

試掘時および調査区内から須恵器環・高台付環・高台付皿・甕、灰釉陶器碗などの平安時代の遺物(1~5)と中世の青磁碗(6)が出土した。

1の環は酸化焙焼によるいわゆる赤焼け須恵器である。2・3は須恵器の高台付環、高台付皿である。4は東濃産の灰釉陶器碗である。内面を漬掛けにより薄く施釉する。5の甕は外面に平行叩き目、内面にナデを施す。

6は見込に劃花文を刻んだ青磁劃花文碗の底部の破片である。素地は灰白色で緻密、釉は灰緑色を呈する。龍泉窯系の製品と考えられるもので、13世紀前半の所産である。



第20図 グリッド出土遺物

第9表 グリッド出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国取
1	須恵器	環	(13.0)	[4.2]	—	ABCHIM	30	普通	にぶい赤濁	G1G表採 酸化焙焼成 赤焼け	5.7
2	須恵器	高台付環	—	[3.5]	(6.2)	AEI	30	良好	黄灰	試掘 底部外面回転糸切り	
3	須恵器	高台付皿	(13.0)	[2.2]	—	ACHI	20	普通	灰黄濁	試掘 底部外面回転糸切り 高台剥離	
4	灰釉陶器	碗	(15.0)	[1.9]	—	IK	10	良好	灰白	表採 東濃産 漬掛け 施釉薄い	
5	須恵器	甕	—	[4.5]	—	DHI	破片	良好	灰	G1G表採 外面平行叩き目 内面ナデ	6.6
6	磁器	青磁碗	—	[1.7]	(6.0)	IK	25	良好	灰白	G1G表採 見込劃花文 龍泉窯系 13世紀前半	

V 十二天遺跡第4・5次調査

1. 調査の概要

十二天遺跡の発掘調査は、向遺跡と同じく金屋地区を対象とした圃場整備に伴い、昭和54・55年にかけて実施（A地点）されたのが最初である。古墳時代前期の土壌1基、平安時代の竪穴住居跡群18箇所、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、中世の柱穴群、土壌群、井戸跡1基、溝跡4条、近世の溝跡3条等が検出され（鈴木他1981）、とりわけ目を引くのは狭い調査区の中に住居跡の集中箇所が幾つも検出されたことである。それぞれの遺構の重複が激しく、遺構の確認は困難を極めたが、大半の住居跡集中箇所に数棟から10数棟の重複が認められ、住居跡総数は実に69軒にのぼった。

その後、平成8・9年には道路拡幅のためにB地点が、同じく平成8年には防火水槽建設のためにC地点が調査された（埼玉県教育委員会1998）。B地点では縄文時代前期の土壌4基、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、土壌2基、溝跡2条等が検出され、C地点では中世の遺構が中心であった（第5図）。周辺では東側の低地帯に所在する円良岡遺跡で古代水田層と中世の水田遺構が検出されているほか、北東側の本庄台地に立地する東臨沼遺跡で平安時代の竪穴住居跡2軒、道路状遺構の可能性を残す溝状遺構等が検出され、十二天遺跡とほぼ同時期の集落跡と考えられている（第4図）。

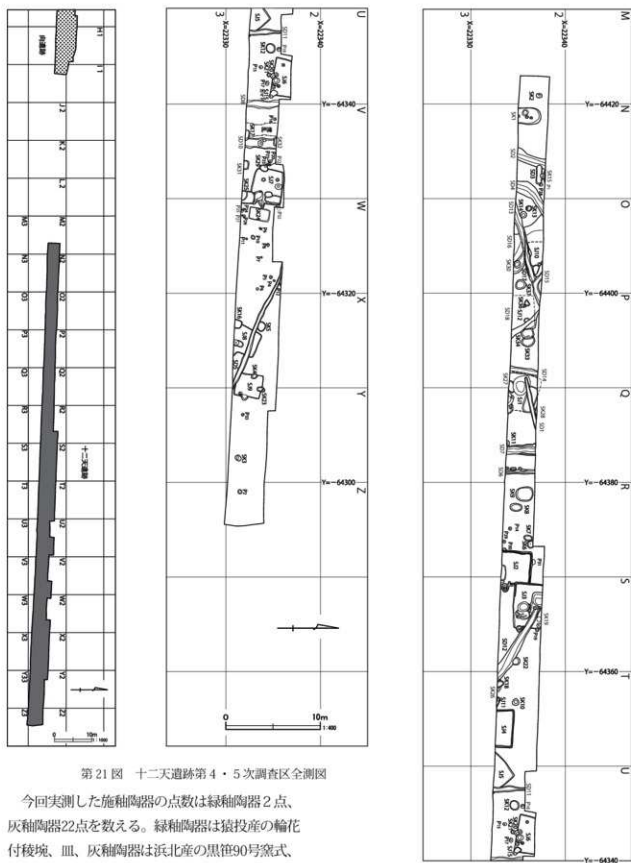
今回の第4・5次調査地点は、向遺跡第2次調査区の市道を挟んで東側に隣接し、ほぼ東西に延びる長さ約128m、幅約5mの調査区で、調査面積は730㎡である。調査区の東半分はA地点の北側に隣接した部分で、わずかな未調査部分を残して隣り合う。検出された遺構は古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、土壌1基、平安時代の竪穴住居跡12軒、溝跡7条、土壌7基、中・近世の溝跡10条、土壌28基、ピット31基である。以下、平安時代を

中心に概要を説明する。

平安時代の竪穴住居跡は調査区全体に分布し、大きく5群に分かれる。分布状況はA地点のみみられたような重複の激しいものではなく、数軒のまとまりが10～15mの距離を置いて群生している。一辺5m前後の住居跡や3m以下の住居跡が検出され、住居の規模に多様性がみられた。カマドは大半が東壁に設けられ、特に南東隅に片寄ったものが多い。地域的な特性として、カマドの補強材に片岩を使用するものが目立つ。

住居の時期は大きく3期に分けられる。Ⅰ期：9世紀後半を中心とする時期。コの字状口縁の武蔵甕が主体で、平底の土師器環が定量伴う。（S J 4・7・10・12）Ⅱ期：10世紀前半を中心とする時期。コの字裏の口縁の形が崩れ始め、器壁も厚みを増す。羽釜の出現する段階である。酸化焙焼成が多く、焼きの甘い須恵器環、皿、高台付環が増加する。（S J 1・2・8・11）Ⅲ期：10世紀中頃を中心とする時期。伝統的な土師器環はほとんど姿を消し、須恵器系諸とは異なる木器・漆器を模倣した高台付環が増加する。煮沸具は羽釜を主体にロクロ整形環や土釜が伴出する。（S J 3・9・15）集落の終焉時期はA地点を含め小皿や内黒の黒色土器がほとんど出土していないことから10世紀後葉に廃絶したものと考えられる。

次に、遺物では朱書土器が注目される。土器に記された文字は一部に三を組み合わせた特殊な字形で、則天文字に類するものであろう。酸化焙焼成の高台付環の内外面に同じ一文字を記すことを約束事とする。同一器形で、良く似た焼き上がりであることから、比較的短期間における行為の所産であろう。大溝の第18号溝跡とその周辺の遺構にまどまることから、水に関わる祭祀に伴って投棄された可能性も考えられるが、判断としない。



第21図 十二天遺跡第4・5次調査区全測図

今回実測した施釉陶器の点数は緑釉陶器2点、灰釉陶器22点を数える。緑釉陶器は猿投産の輪花付椀、皿、灰釉陶器は浜北産の黒笹90号窯式、東濃産の光ヶ丘1号窯式、大原2号窯式、虎溪山1号窯式で、一部遠江・駿河産を含む。

2. 遺構と遺物

(1) 縄文時代

ア. グリッド出土遺物 (第22図)

1は凹基無茎の石鏃で、先端部をわずかに欠損する。両側縁が緩やかなカーブを描く二等辺三角形のプロポーシオンである。腹面に主要剥離面をもち、表裏からの細かな剥離によって成形されている。長さ1.8cm、幅1.35cm、厚さ2.7mm、重さ0.6gである。石材は黒曜石である。



第22図 グリッド出土遺物

ため全容は不明であるが、一辺4m前後の方形の住居であろう。主軸方位はN-80°-Wを指す。

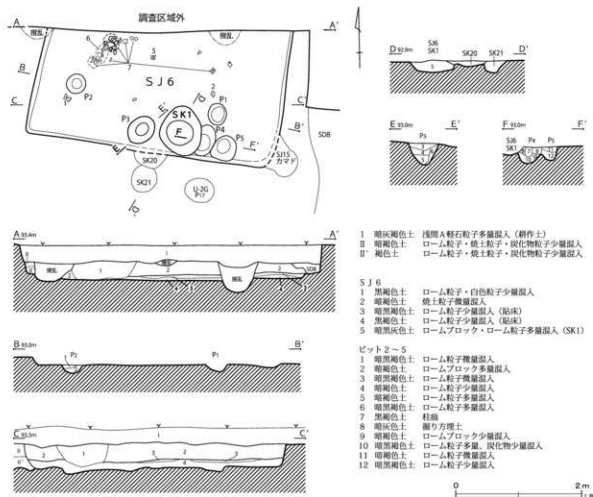
床面は概ね平坦で、貼床が施されていた。炉跡は認められなかったが、南壁際を中心に第1号土塊、ピット1~5が検出された。ピットはいずれも掘り込みが浅い。位置関係からピット1・2が支柱穴にあたると思われる。南壁際に並ぶピット3~5のうち、ピット4には柱痕が確認された。

(2) 古墳時代

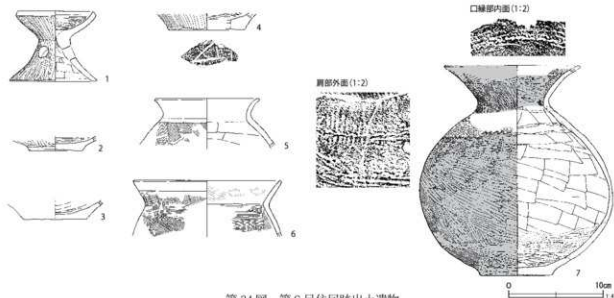
ア. 竪穴住居跡

第6号住居跡 (第23図)

調査区中央部のU-2グリッドに位置する。第15号住居跡および第20号土塊と重複し、床面の一部が壊されていた。北半分が調査区域外にかかる



第23図 第6号住居跡



第24図 第6号住居跡出土遺物

第10表 第6号住居跡出土遺物観察表(第24図)

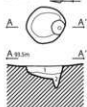
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	器台	8.0	7.4	9.2	CEHIK	95	普通	橙	No 1 赤彩痕	16-1
2	土師器	壺	—	[1.5]	(5.6)	AHI	95	普通	にぶい黄橙	No 2 内外面ヘラミガキ	
3	土師器	壺	—	[2.0]	(6.8)	AEHIK	60	普通	にぶい褐	外面面風化顕著 内面ヘラナデ	
4	土師器	壺	—	[1.8]	(8.0)	HJK	25	普通	にぶい黄橙	底部外面木炭痕	
5	土師器	裹	(10.9)	[5.4]	—	EGIK	20	普通	明赤褐	No 11	
6	土師器	裹	(15.6)	[6.0]	—	AEHI	15	普通	橙	No 5	
7	土師器	壺	(14.3)	[21.8]	7.6	EGHI	70	普通	にぶい褐色	No 4,6,8,9,10,13 外面・口縁部内面赤彩	

遺物は、ピット2周辺の床面上からまとまって出土した(第24図)。1はほぼ完形の小型器台である。2~4は壺の底部破片で、4は外面に木炭痕を残す。5・6は単口縁の裹で、胴部外面にハケメを施す。7は赤彩を施す中型の壺である。口縁部が大きく外反する単口縁のもので、端部を欠損する。口縁部内面と肩部外面にRR反摺り横位

回転の縄文+結節回転文を施文する。縄文帯を除いた部位には赤彩が施される。

住居の時期は、定形化した小型器台と南関東系の弥生土器の伝統的な装飾が残る壺が伴出していることから、小型丸底壺出現以前の五箇式期前葉に位置づけられる。

SK13



SK13

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量混入
2 暗黄褐色土 ローム粒子多量混入



第25図 第13号土壌・出土遺物

第11表 第13号土壌出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	器台	—	[5.2]	—	ACHI	40	普通	明赤褐	円孔四方透し	

イ. 土壌

第13号土壌 (第25図)

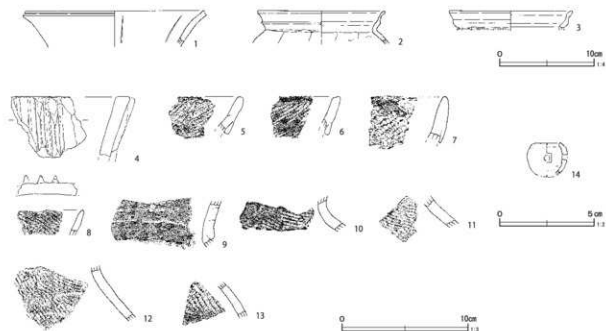
調査区西端部のO-2グリッドに位置する。平面円形で、径0.62×0.58m、深さ0.35mである。底面は平坦で、南壁際にピットをもつ。

遺物は小型器台の接合部の破片が出土した。

ウ. グリッド出土遺物 (第26図)

1は単口縁の壺の口縁部である。口唇部に面取りを施し、内面に線刻状のヘラ押しえが等間隔

にみられる。2・3はS字状口縁台付壺の口縁部の破片である。2は胴部外面にヘラケズリを施す。3は胴部外面にS字襷特有のクシ状のハケメが施される。4は口縁部外面に3条一単位の棒状浮文を貼付した有段口縁壺の破片である。器肉が厚く、口唇部を面取りする。棒状浮文は断面三角形で頂部に刻目を施す特徴的なものである。おそらく駿河の大塚式の系譜をひくものである。5～7は複合口縁壺の口縁部破片である。いずれも



第26図 グリッド出土遺物

第12表 グリッド出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(19.0)	[3.8]	—	ABHK	25	良好	にぶい赤褐色	SJ3C 口縁部内面放射状の線刻か	25-1
2	土師器	台付壺	(13.3)	[3.5]	—	ABEHK	20	普通	にぶい褐色	S2G S字状口縁台付壺 胴部外面ナデ	25-1
3	土師器	台付壺	(13.0)	[2.1]	—	AHK	20	普通	にぶい橙	SJ3CS2G S字状口縁台付壺	25-1
4	土師器	壺	—	[5.1]	—	AHK	5	普通	褐色	SJ7b 口縁部棒状浮文貼付 大塚式系か	25-1
5	土師器	壺	—	[2.9]	—	EHK	破片	普通	にぶい褐色	SD13 複合口縁 外面縄文施文	25-1
6	土師器	壺	—	[3.0]	—	ACHK	破片	良好	にぶい赤褐色	O2G 複合口縁 外面縄文施文	25-1
7	土師器	壺	—	[3.6]	—	EHK	破片	普通	にぶい黄褐色	O2G 複合口縁 外面縄文施文	25-1
8	土師器	甕	—	[2.0]	—	CHI	破片	普通	にぶい黄褐色	SJ8 外面縄文施文	25-1
9	土師器	甕	—	[3.6]	—	AH	破片	普通	橙	SD12 輪積痕を残す	25-1
10	土師器	壺	—	[2.8]	—	AH	破片	普通	橙	SD12 外面縄文施文	25-1
11	土師器	壺	—	[2.5]	—	AH	破片	普通	橙	SD12 外面縄文施文	25-1
12	土師器	壺	—	[4.4]	—	AH	破片	普通	橙	SD12 外面縄文施文	25-1
13	土師器	壺	—	[3.0]	—	AH	破片	普通	にぶい黄褐色	SJ3 外面縄文施文	25-1
14	ミニチュア	有孔土器	(1.4)	[1.7]	—	AHK	40	普通	にぶい褐色	SJ7 No.9 一對の径約3mmの小孔を体部に穿つ	25-1

外面にRL単節横位回転の縄文を施文する。8は口縁部外面にR無節横位回転の縄文を施文する甕の口縁部である。9は口縁部外面に輪積装飾をもつ吉ヶ谷式系の甕である。頸部は明瞭なくの字状を呈する。10～13は縄文を施文する壺の胴部片である。10は頸部にRL単節横位回転の縄文を施文する。11はRL単節横位回転の縄文が2段施文されるが、上下で異なる原体を使用しており、下位のものとは0段多条の可能性ある。12は2種類のRL単節縄文が横位回転で施文され、うち1種は

0段多条とみられる。11と同一個体か。13はRL単節横位回転の縄文を施文する。14は口径1.4cm、器高2.0cmに復元される球形に近いミニチュア土器である。胴部一對の小孔が穿たれる。

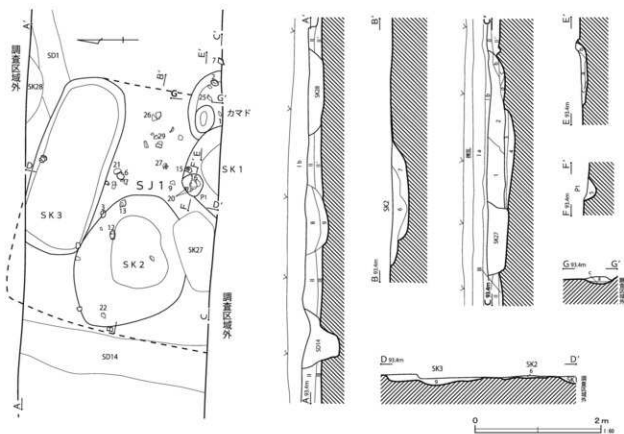
(3) 平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡12軒、溝跡7条、土壇7基を検出した。

ア. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第27図)

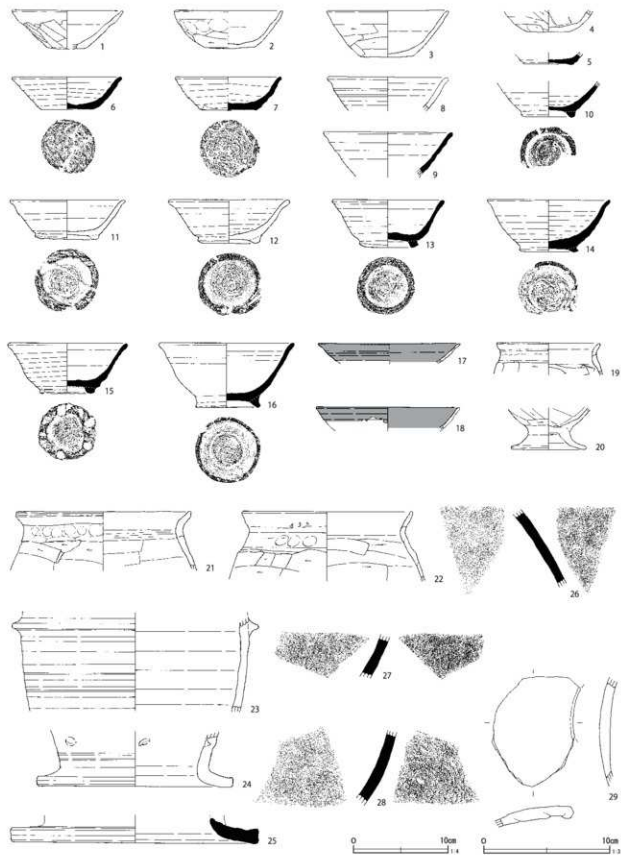
調査区西側のP・Q-2グリッドに位置する。



- I a 暗褐色土 浅間A群土粒子多量混入 (群作土)
 - I b 暗褐色土 1層より表分の沈積が多く、赤味がかる
 - II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 - III 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 - IV 暗黄褐色土 ロームブロック多量混入
- S J 1
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量混入
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
- SK 1 ~ 3
- 3 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量混入
 - 4 暗黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量混入

- 5 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量混入
 - 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入
 - 7 暗黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子微量混入
 - 8 暗黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入
 - 9 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入
- S J 1 カマド
- a 暗褐色土 焼土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物粒子微量混入
 - b 暗赤褐色土 焼土ブロック多量、焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物粒子微量混入
 - c 暗褐色土 炭化物粒子多量、焼土ブロック少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量混入
 - d 暗黄褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入

第27図 第1号住居跡



第 28 图 第 1 号住居跡出土遺物

西側には第12号住居跡が隣接し、第1・14号溝跡、第27号土塼等と重複していた。このうち第1号溝跡は住居を東西に貫通し、第14号溝跡は住居の西壁を大きく壊す。

調査区の制約もあり、住居の全容は把握しきれなかったが、東壁にカマドをもつ住居跡と推定される。平面形は方形系で、検出した規模は南北長3.21m、東西長3.93mである。掘り込みは全体に浅く、確認面がほぼ床面の状態であった。主軸方位はN-94°-Eを指す。

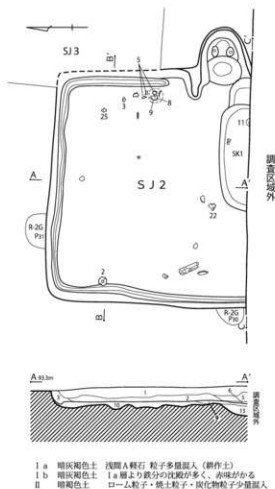
床面は概ね平坦である。壁溝や柱穴等の付属施設はみられなかったが、3基の土塼が検出された。第1号土塼はカマドの手前に掘り込まれ、黒褐色

土(第3・4層)を主体に埋め戻された床下土塼と考えられる。規模は長軸長1.43m、深さ0.26mで、円形を呈すると考えられる。第2号土塼は床面中央西寄りに位置し、長軸長2.31m、短軸長1.75m、深さ0.28mの平面楕円形の土塼である。第3号土塼は北壁沿いに掘り込まれた長軸長2.82m、短軸長1.15m、深さ0.12mの平面長方形の土塼である。この2基は土層断面の観察から住居廃絶後に掘り込まれたものであることが確認されている。この他に第1号土塼と重複するピット1を確認した。直径30cm前後、深さ16cmで、柱穴とするにはやや浅すぎる。

カマドは東壁に設けられていた。平面楕円形の

第13表 第1号住居跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	(11.6)	4.1	(4.1)	ACI	30	普通	褐	No.24 体部外面光沢のあるヘラナデ	
2	土師器	環	11.4	4.0	5.4	ABCEHI	60	普通	にぶい赤褐	カマドNo.1 体部外面指頭圧痕	16-3
3	土師器	環	12.8	4.9	5.6	ACHI	40	普通	にぶい褐	No.5 底部外面ヘラケズリ	16-4
4	土師器	環	—	[2.3]	(4.4)	ACEH	30	普通	にぶい赤褐	カマド 底部外面ヘラケズリ	
5	須恵器	環	—	[1.3]	(5.4)	ABCH	30	普通	橙	一括 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成 赤焼け	
6	須恵器	環	11.5	3.4	5.7	ABCEHIL	95	普通	にぶい黄褐	No.11 底部外面回転糸切り	16-5
7	須恵器	環	10.8	3.5	6.1	ABCEHI	90	普通	褐灰	No.25 底部外面回転糸切り	16-6
8	土師器	環	(12.4)	[3.6]	—	AEHI	20	普通	にぶい褐	一括 酸化焙焼成	
9	須恵器	環	(13.4)	[4.8]	—	CEGI	20	普通	にぶい黄褐	No.22 酸化焙焼成	
10	須恵器	高台付環	—	[3.8]	5.7	AEHI	50	普通	明赤褐	一括 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成 赤焼け	
11	土師器	高台付環	11.9	4.1	6.8	ABCHI	70	普通	にぶい橙	一括_Q2G 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	16-7
12	土師器	高台付環	(12.4)	4.6	6.6	ACEHI	70	普通	にぶい橙	No.8,18 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	17-1
13	須恵器	高台付環	11.6	5.0	6.3	BCEI	90	普通	褐灰	No.10,Q2G 底部外面回転糸切り	17-2
14	須恵器	高台付環	(12.8)	5.5	(6.2)	ABCH	40	普通	にぶい黄橙	カマド内 底部外面糸切り 酸化焙焼成	
15	須恵器	高台付環	(12.4)	5.3	5.8	ABCEI	70	普通	褐灰	No.23,Q2G 底部外面回転糸切り	17-3
16	須恵器	高台付環	(14.0)	6.8	6.9	ABCEHI	70	良好	灰	SK1 P1 No.1,SK1 底部外面回転糸切り	17-4
17	灰釉陶器	埴	(15.0)	[2.1]	—	IK	5	普通	灰白	一括 東濃産	25-2
18	灰釉陶器	埴	(15.0)	[2.5]	—	I	10	普通	黄灰	一括 東濃江産 漬掛け	25-2
19	土師器	小型甕	(10.6)	[3.4]	—	ACI	25	普通	灰褐	一括 SJ1 SR3 口縁部内外面スス付着	
20	土師器	台付甕	—	[4.5]	8.0	ACEHI	60	普通	明赤褐	SK1 P1 No.1,2 器面焼きハゼ	17-5
21	土師器	甕	(18.4)	[6.2]	—	ACE	20	普通	明赤褐	No.29	
22	土師器	甕	(18.0)	[7.3]	—	ABHI	10	普通	にぶい橙	SD1 No.1 コの字状口縁	
23	土師器	羽釜	—	[9.6]	—	ACEHI	10	普通	にぶい橙	SK27 ロクロ整形	
24	土師器	甕	—	[5.9]	(20.4)	AEHI	破片	普通	にぶい黄橙	カマド一括 ロクロ整形 内面下位に刺突痕	
25	須恵器	甕	—	[2.6]	(26.0)	ACIK	25	良好	黄灰	カマドNo.3,カマド内_Q2G 羽釜形甕	
26	須恵器	甕	—	[8.4]	—	EJ	破片	良好	灰	No.16 自然釉付着 外面平行叩き目 内面ナデ	
27	須恵器	甕	—	[4.7]	—	DH	破片	良好	褐灰	No.20 外面平行叩き目 内面同心円文当て具痕	
28	須恵器	甕	—	[7.9]	—	DH	破片	良好	黄灰	SJ1SK3 平行叩き目 同心円文当て具痕	
29	土製品	板状品	—	—	—	AEBHI	破片	不良	にぶい橙	No.14 内外面二次被熱 置きカマドか	26-4

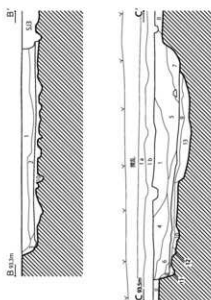


第29図 第2号住居跡（1）

燃焼部のみを残す。規模は燃焼部長0.88m、燃焼部幅0.43mで、皿状に浅く掘り込まれていた。埋土には焼土ブロック、炭化物粒子、白色粘土などが含まれていた。

遺物はカマドおよび第1号土壇周辺からまとも土出土した（第28図）。カマドからは1・2の坏や25の還元焙焼成の羽釜形襷が出土した。また第1号土壇からは15の高台付坏、ビット1からは16の高台付坏と20の台付襷の脚台部が出土している。この他に置きカマドの可能性も考えられる29の土製品がカマド左脇から出土した。

住居の時期は、供膳具に小さな底部から直線的に外傾して立ち上がる非クロコの土師器环が残り、酸化焙焼成や赤焼けの高台付坏が主体を占めるようになってきていること。煮沸具がコの字状口縁の前



- SJ2
- 1 暗褐色土 白色粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量混入
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量混入
 - 4 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物粒子微量混入
 - 6 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量混入
 - 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 - 8 暗褐色土 暗黒褐色土粒子少量混入
 - 9 暗褐色土 ロームブロック多量混入（陥没）
 - 10 暗褐色土 ロームブロック多量混入。9層より黄色味が強い（陥没）
 - 11 暗褐色土 ローム粒子微量混入
 - 12 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 - 13 暗褐色土 ローム粒子多量混入（SK1）

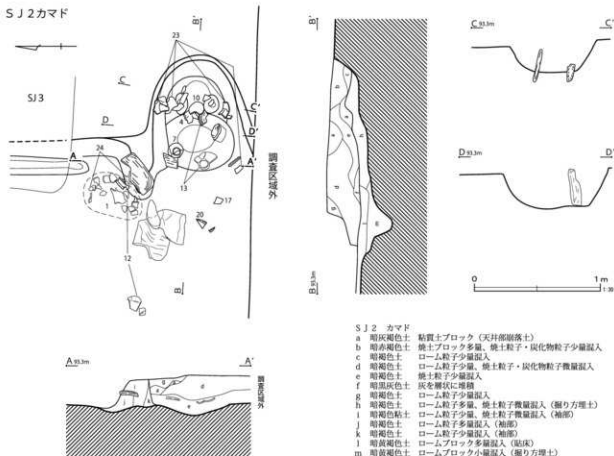
0 2m

れた襷と、いわゆる吉井型羽釜や羽釜形襷が共存していること。さらに灰釉陶器が漬掛けによる東濃産や東濃江産が出土していることなどの点から10世紀前葉を中心に位置づけておきたい。

第2号住居跡（第29・30図）

調査区中央部のR・S-2グリッドに位置する。東側に隣接する第3号住居跡と重複し、北東隅部周辺が壊されていた。東壁にカマドを設けた住居跡であるが、住居の南側が調査区域外にかけ全容については不明である。平面形は方形、もしくは横長の長方形と推定される。検出した規模は南北長3.16m、東西長3.80m、深さ0.21mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。貼床はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土によって、ほぼ全面に施



第30図 第2号住居跡（2）

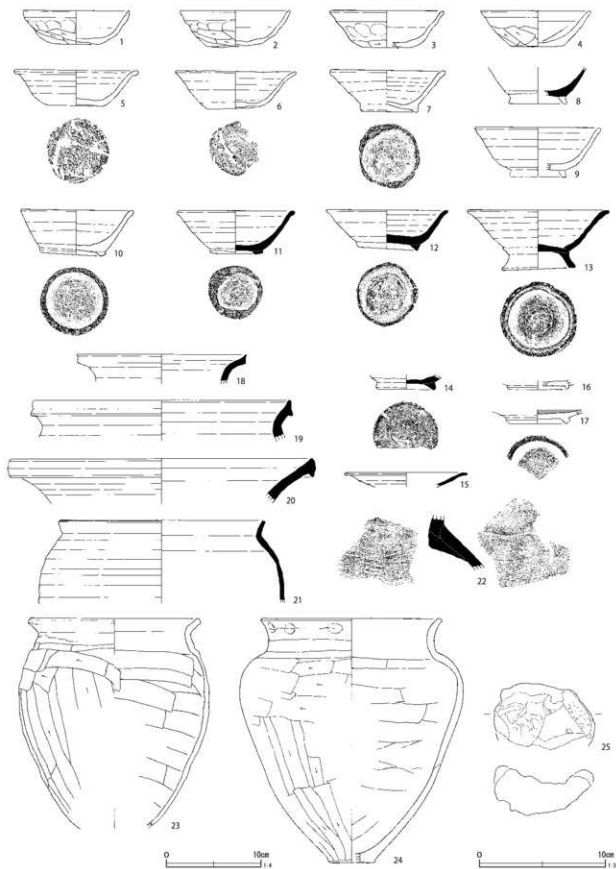
されていた（第9・10層）。壁溝は検出された床面の壁際を全周し、幅10～16cm、深さ8cmである。柱穴等は見られないが、カマド前面に床下土壌と考えられる第1号土壌が検出された。平面長楕円形で二段に掘り込む。規模は長軸長2.12m、深さ0.16mである。埋土は自然堆積を示す。

カマドは東壁に設けられていた。燃烧部は壁を切り込んで掘り込み、左右の壁面には複数の片岩を立てかけて、補強材として用いていた。底面は浅く凹み、奥壁は急角度で立ち上がる。カマド袖は暗褐色土を用いて構築され、片岩が芯材に用いられていた。壁面や底面には赤色硬化した部分がほとんどなく、頻りに使用された痕跡はみられなかった。燃烧部底面を半截し、土層断面を観察したところ、カマド掘り方の埋め戻しと同時に貼床の敷設が行われ、カマド使用面が作り出されて

いることが判明した。燃烧部の規模は長さ1.12m、幅0.48mである。

遺物はカマド周辺を中心に土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄滓が出土した（第31図）。

非ロクロの土師器環が4点出土した。1～3は上げ底気味の小さな底部から体部が内湾して立ち上がる。底部外面は延圧痕による亀裂が目立ち、体部外面下半にヘラケズリ、上半に指頭痕を残す。該明に特徴的な器形である。4は平底の底部から体部が直線的に外傾して立ち上がり、口唇部が肥厚する。底部外面と体部外面下半にヘラケズリを施す。前者に比べ、量的に少ない。ロクロ整形の環・高台付環・高台付塊（5～14）は還元焰焼成のものは少なく、大半は還元不良か酸化焰焼成のものである。貼り付け高台も断面三角形や低台形が多く、全体に粗雑になっている。13の高台



第31图 第2号住居跡出土遺物

第14表 第2号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.1	3.6	5.0	BHK	80	普通	橙	カマドNo.1,SJ2A 底部外面延圧痕による亀裂	17-6
2	土師器	坏	11.4	3.9	6.0	AEHI	95	普通	橙	No.1 底部外面延圧痕による亀裂	17-7
3	土師器	坏	(12.0)	3.9	(5.2)	AEHI	15	普通	橙	No.12 底部外面延圧痕による亀裂	
4	土師器	坏	(11.5)	3.8	5.5	AEHIK	70	普通	にぶい濁	一括,カマドNo.7 底面外面ヘラケズリ	17-8
5	土師器	坏	(12.8)	3.8	6.0	ACEH	50	普通	にぶい濁	No.15,16 底部外面回転系切り	17-9
6	土師器	坏	12.8	3.9	5.6	ABCHI	80	普通	褐灰	A 底部外面回転系切り 口縁部焼き歪み	17-10
7	土師器	高台付坏	11.9	4.4	6.1	AEHI	100	良好	にぶい黄橙	カマドNo.13 底部外面回転系切り	18-1
8	須恵器	高台付坏	—	[3.1]	(6.0)	ACEI	30	普通	にぶい濁	No.16 底部外面回転系切り 酸化焙焼成	
9	土師器	高台付坏	(13.0)	[4.5]	(6.0)	ACEHI	50	普通	にぶい濁	No.16,A 底部外面回転系切り 高台剝離	18-2
10	土師器	高台付坏	11.7	4.8	7.0	ABCEHI	90	良好	にぶい濁	カマドNo.6 底部外面回転系切り	18-3
11	須恵器	高台付坏	12.0	4.5	5.6	ABCEHI	100	普通	にぶい橙	No.11 底部外面回転系切り	18-4
12	須恵器	高台付坏	12.7	4.3	6.4	ACEI	90	普通	灰白	A カマドNo.21,28 底部外面回転系切り	18-5
13	須恵器	高台付埴	14.6	6.2	7.8	DEHI	90	普通	灰白	カマドNo.8,15 底部外面回転系切り	18-6
14	須恵器	高台付坏	—	[1.5]	(6.3)	ACEHI	60	普通	黄灰	C 底部外面回転系切り	
15	須恵器	皿	(12.4)	[1.5]	—	ABEI	10	良好	灰	D 黒色処理か	
16	灰釉陶器	皿	—	[1.0]	(6.0)	IK	5	良好	灰黄	A 浜北産(K-90) 高台縁輪を模倣か	25-2
17	灰釉陶器	皿	—	[1.5]	6.0	IK	10	良好	灰白	カマドNo.18 浜北産(K-90) ハケ塗り 系切り	25-2
18	須恵器	甕	(18.0)	[3.1]	—	I	5	良好	灰	D 口唇部上方に尖る	
19	須恵器	甕	(27.0)	[4.3]	—	A EJ	5	良好	灰	一括 広口甕	
20	須恵器	甕	(32.0)	[4.7]	—	IJ	5	良好	褐灰	カマドNo.19	
21	須恵器	甕	(23.4)	[8.7]	—	ABCEHI	20	良好	にぶい黄橙	一括,S2G ロク口甕	
22	須恵器	甕	—	[5.8]	—	BEGI	破片	良好	褐灰	No.7 外面平行叩き目 内面ナデ	
23	土師器	甕	(17.6)	[22.3]	—	AEHIK	40	普通	にぶい橙	カマドNo.2,3,11,17 胴部外面スス付着	18-7
24	土師器	甕	(18.6)	25.8	(4.8)	ABHI	15	普通	にぶい濁	A カマド,カマドNo.1, No.27 底部外面離れ砂痕 No.11 全体に気孔が目立つ 比重は重い 底面は丸くなる	18-8 26-7
25	鉄滓	椀形鍛冶滓	長さ4.9	幅7.8	厚3.0	重さ157.3					

付埴は還元焙焼成であるが、高台は足高台に近い。15の皿は口径が小さく、内外面に焼し焼成による黒色処理がみられる。16・17は灰釉陶器の皿で、黒笹90号窯式の浜北産と推定される。施釉はハケ塗りである。16は高台の形態が緑釉陶器に類似している。17は底部外面に系切り痕を残す。18～22は須恵器の甕である。21は薄手の作りである。23・24の土師器の甕は、口縁部の形態がコノ字から、くの字に近くなり、前代の非常に器内の薄い甕に比べ、全体的に土師器の器内が厚く、重量がやや重くなっている。23は口唇部が肥厚し、沈線状のヨコナデを施す。24は肩部が大きく張り、底部が突出気味の特徴的な器形である。

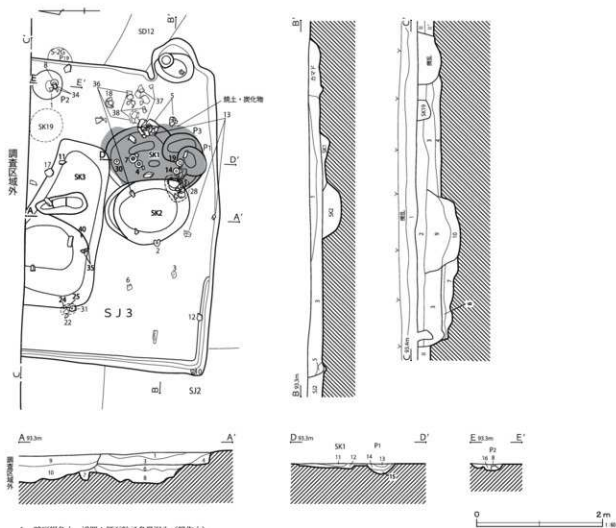
25の椀形鍛冶滓はやや大型で円形を呈する。滓の堆積も厚く、比重も高い。気孔が目立つ。

住居の時期は、第3号住居跡との重複関係や出土土師器の様相から、第1号住居跡よりもやや先行する10世紀前葉を中心とする時期に位置づけておきたい。

第3号住居跡(第32・33図)

調査区中央部のS-2グリッドに位置する。第2号住居跡、第12号溝跡、第19号土壇と重複していた。各遺構との新旧関係は、本住居跡の南西隅部が、第2号住居跡の東壁から北東隅部を壊していた。また、第12号溝跡は本住居跡に壊されていることから、溝跡の下限時期を推し量る目安となる。唯一、第19号土壇のみが本住居跡よりも新しく、住居跡の埋没後に、埋土を掘り込んで構築されていた。

住居の北側が調査区域外にかかるため全容は明



- I 暗灰褐色土 浅間A軽石粒子多量混入（副作土）
 II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 III 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入

- S J 3
 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量混入
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量混入
 3 暗褐色土 ローム粒子微量混入
 4 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 5 暗褐色土 ローム粒子多量混入
 6 暗褐色土 ロームブロック多量、暗黒褐色土少量混入（貼床）

- 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入（掘り方埋土）
 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入（SK2）
 9 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量、焼土粒子微量混入（SK3）
 10 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入（SK3）
 11 暗黒褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子微量混入（SK1）
 12 暗黒褐色土 ローム粒子微量混入（SK1）
 13 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量混入（ピット1）
 14 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量混入（ピット1）
 15 暗黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入（ピット1）
 16 暗黒褐色土 ローム粒子少量混入（ピット2）

第32図 第3号住居跡（1）

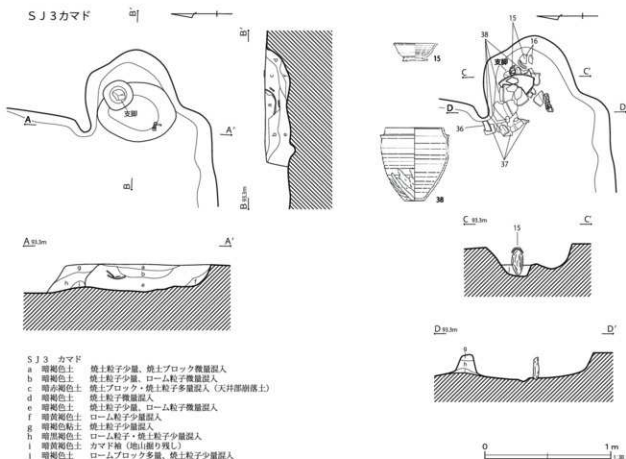
確に得ないが、平安時代としては大型の一辺約4.8mの南東隅部にカマドをもつ住居跡である。

平面形は方形と推定される。検出された規模は南北長2.99m、東西長4.78m、深さ0.22mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。貼床はカマド周辺ではあまり明確でなかったが、床面の西半分にはロームブロックを多量に含んだ暗褐色土による貼床が施されていた。壁溝は全周せず、西壁と南西隅部

のみに幅の狭い壁溝を巡らしていた。

この他に土壌3基、ピット3基が検出された。第1・2号土壌はカマド前面に位置し、重複した状態であった。第1号土壌は平面楕円形の浅い掘り込みで、焼土・炭化物を多く含む暗黒褐色土によって埋め戻されていた。第2号土壌は第1号土壌の西側に位置し、平面楕円形を呈する明確な床下土壌であった。また床面中央部には住居廃絶後に掘り込まれた第3号土壌があった。



第33図 第3号住居跡(2)

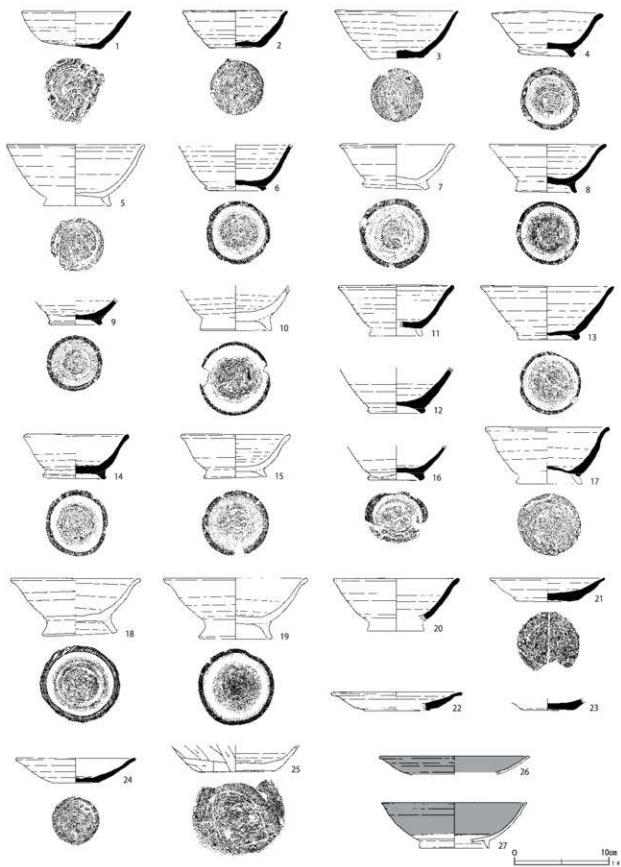
ピットは第1号土壌と重複するピット1・3、東壁北寄りのピット2がある。ピットの大きさは直径約50cmであるが、掘り込みは10cm前後と浅い。なお、ピット2の中に完形の高台付埴(8)が逆位に置かれていた。

カマドは南東隅部寄りに設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで、円形に掘り込んでいる。規模は燃焼部長0.58m、燃焼部幅0.61mである。カマド袖の残りは良くないが、地山の暗黄褐色土を掘り残し、暗褐色粘土を用いて構築していたようである。また壁面の崩落を防止するために燃焼部右壁面には片岩を立てかけ補強材としていた。片岩は長方形の広い面を内側に向け、被熱のため赤変していた。底面は浅く皿状に凹み、棒状の円礫を使用した礫支脚が左奥壁寄りに設置されていた。支脚は小ピットの中に設置され、被熱により赤変していた。カマド埋土はC層が天井部崩落土、g

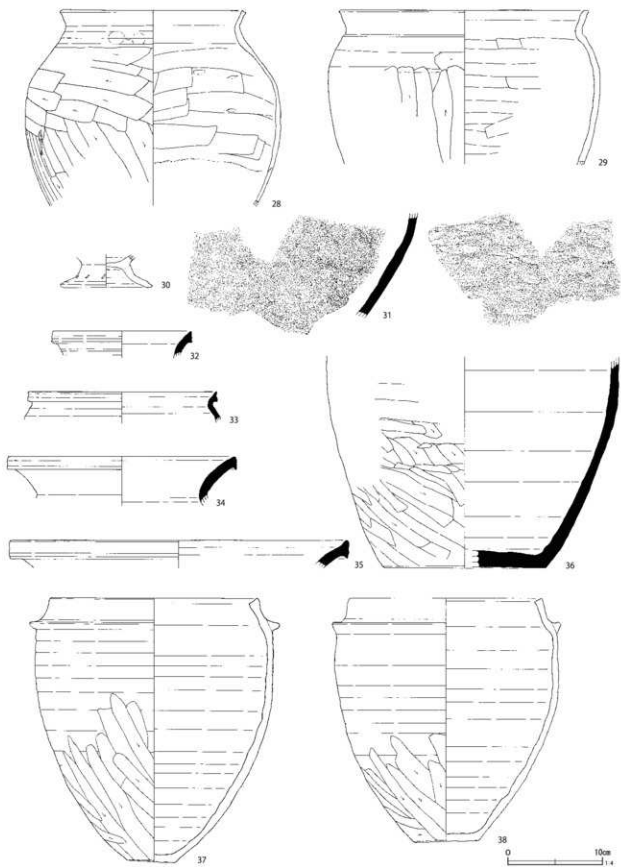
～i層がカマド袖、j層が支脚設置穴の埋め戻し土である。

遺物は、カマドおよびその手前の第1号土壌周辺にまとまっていた(第34～36図)。

カマド燃焼部から38の羽釜が横倒しの状態で出土した。おそらくカマドに掛けられたままの状態で廃棄されたのであろう。15の高台付埴は口縁を下にして支脚に被さるように置かれていた。支脚と土器の間には多量の焼土が入っており、カマド廃棄時に意図的に据え置いた可能性が高い。カマド前面には37の羽釜が壊れ、その北側には18の高台付埴が逆位の状態で出土した。第1号土壌からは4・7の高台付埴が伏せた状態で並び、南壁寄りには14の高台付埴、19の高台付埴、28の甕が並んで置かれていた。第2・3号土壌周辺にも完形に近い土器が多くみられた。西壁寄りには22・24の皿、25の壺がまとめて置かれていた。



第34图 第3号住居跡出土遺物(1)



第35图 第3号住居跡出土遺物(2)

39は住居の掘り方から出土した鉄釘であるが、出土位置は特定できない。40は第3号土壌出土の棒状品で、住居に伴うかどうかは断定できない。

住居の時期は、第2号住居跡との重複関係や出土土器の特徴から、10世紀前葉から中葉にかかる時期を想定しておきたい。



第36図 第3号住居跡出土遺物(3)

第15表 第3号住居跡出土遺物観察表(第34～36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	環	11.4	4.0	6.0	AEIK	90	普通	黄灰	№ 47.S2G 底部外面糸切り 底部歪む	19-1
2	須恵器	環	11.0	3.9	5.4	ABEI	85	普通	にぶい黄	№ 12 底部外面回転糸切り	19-2
3	須恵器	埴	(13.0)	5.1	5.6	ABCI	75	普通	にぶい黄	№ 13.C.S2G 底部外面回転糸切り	19-3
4	須恵器	高台付環	11.5	4.8	6.2	AIK	100	良好	灰	№ 24 底部外面糸切り 口縁焼歪む	19-4
5	土師器	高台付埴	(14.6)	5.7	—	ACHIK	60	普通	にぶい橙	№ 41.A2.B 底部外面糸切り 高台剥離	19-5
6	須恵器	高台付環	—	[5.0]	6.5	ABHI	40	普通	にぶい黄橙	№ 4 底部外面回転糸切り	
7	土師器	高台付環	11.6	4.7	7.1	ACEHI	100	普通	橙	№ 22 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	19-6
8	須恵器	高台付環	12.2	5.1	6.4	ACEHI	100	普通	明赤褐	P2 № 1 底部外面糸切り 酸化焙焼成 赤焼け	19-7
9	須恵器	高台付環	—	[2.8]	5.7	AHJK	60	普通	橙	SK2 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
10	土師器	高台付埴	—	[4.8]	7.6	ABCEHIK	80	普通	にぶい褐	№ 1 底部外面回転糸切り	19-8
11	須恵器	高台付環	(12.0)	[4.5]	—	CEGHI	45	普通	にぶい黄褐	№ 33 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
12	須恵器	高台付環	—	[4.9]	(6.2)	ABCEHI	30	普通	橙	№ 6 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
13	須恵器	高台付埴	14.0	5.7	6.5	ABEHI	80	普通	灰	A. № 14.15.41 底部外面回転糸切り	19-9
14	須恵器	高台付埴	10.7	4.7	6.7	EGI	100	普通	黄灰	№ 27 底部外面回転糸切り	19-10
15	土師器	高台付環	11.2	4.8	6.7	ACHI	95	普通	浅黄	カマド № 7.8 底部外面回転糸切り	20-1
16	須恵器	高台付環	—	[3.7]	(6.1)	ACDEIK	70	普通	灰黄	カマド № 8.9 底部外面植物繊維圧痕	
17	須恵器	高台付環	12.9	[5.2]	—	AEIJK	85	普通	灰白	№ 18 底部外面回転糸切り 高台剥離	20-2
18	土師器	高台付埴	13.4	6.0	7.9	AEHIK	60	普通	黒褐	№ 37 底部外面回転糸切り 黒色処理か	20-3
19	土師器	高台付埴	(15.0)	6.4	7.7	ACHIK	70	普通	明黄褐	№ 28 底部外面糸切り 口縁部補修痕	20-4
20	須恵器	高台付環	13.2	[4.6]	—	AEHI	50	普通	にぶい黄橙	T2G.U2G.B. № 19 体内外面黒色処理か	
21	須恵器	皿	12.0	2.4	5.8	AIK	70	普通	にぶい黄橙	SK2 底部外面回転糸切り	20-5
22	須恵器	皿	(13.6)	[1.9]	(7.0)	ABEI	30	普通	にぶい黄褐	C. № 2 底部外面回転糸切り	
23	須恵器	皿	—	[1.2]	5.5	AHI	5	普通	明赤褐	底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
24	須恵器	皿	12.6	2.6	5.0	AEI	80	良好	褐灰	№ 13 底部外面回転糸切り 黒色処理か	20-6
25	土師器	埴	—	[2.8]	(8.0)	AEI	60	普通	黒褐	№ 3 底部糸切り後ヘラケズリ 黒色処理か	
26	灰釉陶器	皿	(15.7)	[3.0]	—	IK	5	良好	灰白	B 東遺産 虎渓山1号窯式 漬掛け	25-2
27	灰釉陶器	埴	(15.3)	4.8	7.4	IK	40	普通	灰黄	一括 .C.U2G 東遺産 底部内面重ね焼き痕	20-7
28	土師器	甕	(18.8)	[20.8]	—	CHI	25	普通	褐	№ 31 崩れたコの字状口縁	20-8
29	土師器	甕	(26.0)	(16.3)	—	ACEHI	10	良好	明褐	B. № 32 ロク口甕	
30	土師器	台付甕	—	[3.5]	9.7	ABEHIK	90	普通	橙	№ 20 脚台部外面連続刺突痕	
31	須恵器	甕	—	[11.1]	—	BEI	破片	普通	灰	№ 3-SK9 № 5-S-2G 一括 外面ロク口整形 内面無文当て具痕	
32	須恵器	甕	(14.8)	[2.9]	—	ACEHIK	15	普通	にぶい黄褐	酸化焙焼成	
33	須恵器	鉢	(20.0)	[3.3]	—	ACEHI	5	良好	灰	C.U2G	
34	須恵器	甕	(24.2)	[5.2]	—	AHI	20	普通	にぶい黄橙	№ 48 酸化焙焼成	
35	須恵器	甕	(35.8)	[2.9]	—	ABIK	5	良好	灰褐	№ 9	
36	須恵器	甕	—	[22.4]	17.2	CEHI	30	普通	灰黄褐	A. № 11.39.44 カマド № 1.T2G.S2G	20-9
37	土師器	羽釜	21.8	27.9	5.2	ACEHIK	95	普通	にぶい黄橙	B.床直 .S2G. № 41.45.46. カマド № 1.4.5.38 ロク口整形 外面下半ヘラケズリ 吉耳型	21-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版		
38	土師器	羽釜	20.4	25.8	6.8	ADEHK	90	普通	灰黄	A № 39,40 カマド № 2,3,5,10 ロクロ整形 外面 下半ヘラケズリ 吉井型	21-2		
39	鉄製品	釘	長さ 5.0 重さ 27.1									断面形状	26-6
40	鉄製品	棒状品	長さ 4.3	幅 0.5 ~ 0.3	厚さ 0.5 ~ 0.3	重さ 3.5	№ 10 両端部欠損 断面形状					26-6	

第4号住居跡 (第37図)

調査区中央部のT-2グリッドに位置する。東側に第5号住居跡、西側に第11号住居跡が隣接する。住居の南側の大部分が調査区域外にかかり全容は不明である。

平面形は方形系と推定される。検出した規模は南北長1.95m、東西長4.02m、深さ0.1mである。主軸方位は、北壁を基準に採れば、N-85°-Wを指す。

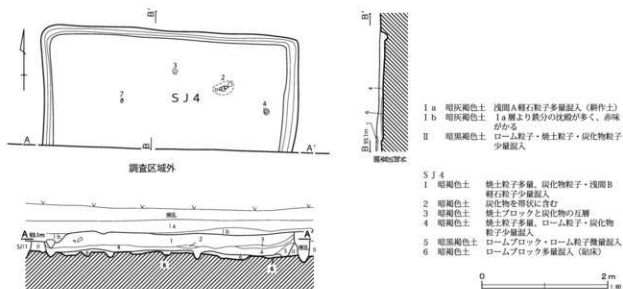
床面は概ね平坦で、ほぼ全面に薄く貼床が施されていた。検出した部分にカマド、柱穴等はなかったが、壁際に全周するように壁溝が巡る。壁溝の幅は14~23cm、深さは5cmである。

埋土は1~5層に区分される。暗褐色土を主体とし、最上層の第1層には平安時代後期以降の浅間B軽石が混入していた。第2~4層には焼土、炭化物等が多量に含まれており、人為的な埋め戻しが想定される。第6層はロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床である。

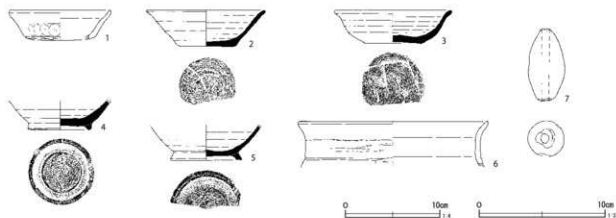
遺物は土師器環・甕、須恵器環・高台付環、土錘等が出土した(第38図)。

1は口径10.6cm、底径7.6cmに復元される平底の環である。底径が小さくなり、体部が大きく外傾し屈曲しながら立ち上がる。体部外面には指頭痕を残す。2・3は須恵器環である。2は底部から直線的に外傾して立ち上がる。3は腰に丸をもつて立ち上がり、口縁部が大きく外反する。口唇部は玉縁状に肥厚し、やや新しい様相がうかがわれる。4・5は高台付環である。焼きはやや甘い、貼り付け高台はしっかりし、ハの字に踏ん張っている。6は崩れの少ないコの字裏の口縁部で、器壁も薄く仕上げる。7は紡錘形の土錘で、比較的大型のものである。

出土遺物が少なく、住居の時期を特定することは難しいが、煮沸具に羽釜がなく、コの字裏を伴うことや、供膳具に小型化した平底の土師器環を含み、還元焼成の須恵器が主体を占めることから9世紀後半に位置づけておきたい。



第37図 第4号住居跡



第38図 第4号住居跡出土遺物

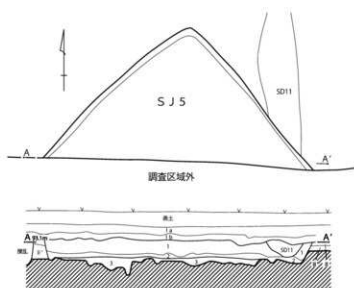
第16表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	(10.6)	[3.1]	(7.6)	ABI	5	普通	明赤褐	体部外面指刷圧痕	
2	須恵器	環	(12.4)	3.8	(6.0)	AEIK	80	普通	黄灰	№ 2,3,4 底部外面回転糸切り	21・3
3	須恵器	環	(12.2)	3.5	(6.0)	AHIK	40	良好	灰黄	T2G № 5 底部外面回転糸切り	
4	須恵器	高台付環	—	[3.2]	6.6	AEHI	60	普通	にぶい黄橙	№ 1 底部外面回転糸切り	
5	須恵器	高台付環	—	[3.8]	(7.6)	IK	20	普通	灰	底部外面回転糸切り	
6	土師器	糞	(20.0)	[4.8]	—	ACEHI	15	良好	橙	T2G コの字状口縁	
7	土製品	土踵	長さ 5.7	最大径 2.8	厚さ 2.7	孔径 0.7	重さ 37.5			№ 6 一部欠損	26・5

第5号住居跡 (第39図)

調査区中央部のT・U-2グリッドに位置し、西側に第4号住居跡が隣接する。第11号溝跡によって北東壁の一部が壊されていた。住居跡の南半分が調査区外にかかるため平面形は不明である

が、方形系と推定される。規模は北西壁長3.10m、北東壁長2.98m、確認面から床面までの深さ約20cmである。主軸方位は、北西壁を基準にするとN-46°-Eを指す。床面は概ね平坦で、貼床が施されていた。遺物は出土していない。



第39図 第5号住居跡

- I a 暗灰褐色土 浅層A粒石粒子多量混入 (顕作土)
 I b 暗灰褐色土 I a層より鉄分の沈殿が多く、赤味がかる
 II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 II' 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入

- SJS
 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入
 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子微量混入
 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子・焼土粒子炭化物粒子微量混入 (貼床)

0 2m

第7号住居跡 (第40・41図)

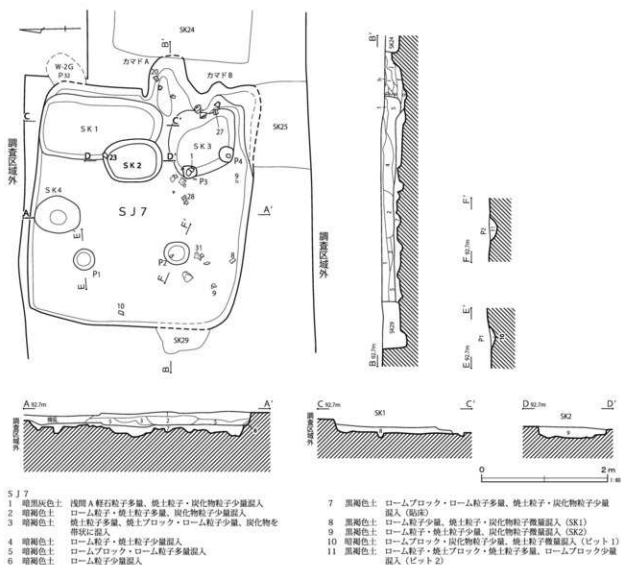
調査区中央部東寄りのV・W-2グリッドに位置する。第24・25・29号土壌、ビット32にそれぞれ壊されていた。

東壁に新旧2基のカマドを併設した住居跡で、カマドの付け替えに伴い、住居の拡張が行われていた。平面形は東西方向にわずかに長い長方形で、規模は長軸長3.72m、短軸長3.41m、深さ0.18mである。主軸方位はN-98°-Eを指す。

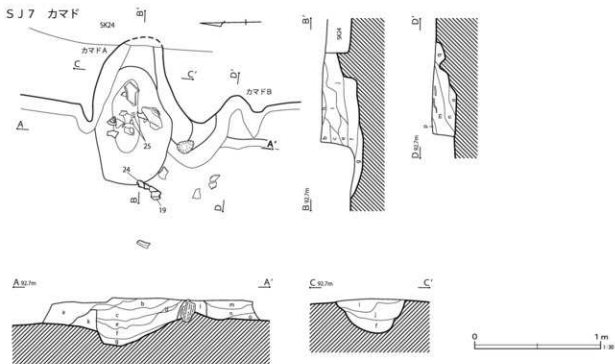
床面は概ね平坦で、貼床が全面に施されていた。床面の掘り方は底面に凹凸が認められ、南半分が

深く、北側が浅く掘り込まれていた。おそらくカマドの付け替えに伴い、住居全体の約3分の1を北側に拡張した可能性が高い。ビット1〜3は配置状況から柱穴と考えられる。直径30cm前後で、深さは様でない。この他に4基の土壌が検出された。第1・2号土壌は土層断面の観察から、住居がある程度埋まった段階に掘り込まれた土壌であることが確認された。これに対し、第3・4号土壌は貼床が上についていることから床下土壌と考えられる。

カマドは東壁に2基設けられていた。土層断面



第40図 第7号住居跡(1)



SJ7 カマドA

- a 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物粒子少量混入
- b 暗灰褐色粘土 焼土粒子・炭化物粒子微量混入
- c 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子多量、ローム粒子少量混入
- d 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量混入
- e 暗赤褐色土 焼土粒子多量、灰色粘土ブロック少量混入（天井部崩落土）
- f 暗灰褐色土 暗灰褐色灰多量、ローム粒子・焼土粒子少量混入
- g 暗赤褐色土 上面赤色硬化
- h 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物粒子微量混入
- i 暗赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子多量混入（天井部崩落土）
- j 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量混入
- k 暗褐色土 ロームブロック少量、灰褐色粘土粒子微量混入（カマド袖）

SJ7 カマドB

- l 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量混入（カマド袖）
- m 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量混入（天井部崩落土）
- n 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物粒子少量混入
- o 暗褐色土 ローム粒子少量混入
- p 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入
- q 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子微量混入

第41図 第7号住居跡（2）

の観察等から、向かって左側のカマドAの方が古く、右側のカマドBの方が新しい。

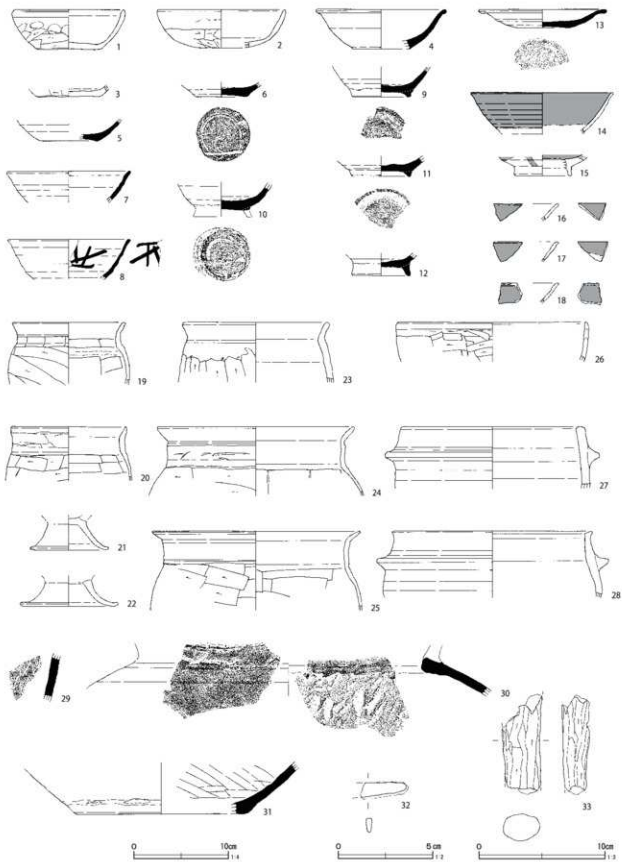
カマドAは東壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、煙道部が短く立ち上がる。煙道部の先端は、第24号土壌によって壊されていた。残存する規模は全長1.12m、燃焼部長0.94m、燃焼部幅0.58mである。燃焼部の底面は皿状に浅く凹み、煙道部は燃焼部との境に段を設け、緩やかに立ち上がる。カマド埋土はe・i層が天井部崩落土、f層が灰層、g層が火床面に相当し、基本的に新しいカマドの構築に伴い埋め戻されていた。なお、k層がカマドの袖部に相当し、地山の掘り残しを基礎としていた。

カマドBは、カマドAのすぐ右脇の北東隅部寄りに設けられていた。カマドAに比較すると小

規模で、貧弱である。燃焼部は煙道部との境に段が設けられていた。規模は全長0.58m、燃焼部幅0.33mである。カマド埋土は1層がカマド袖、m層が天井部崩落土に相当する。カマド袖は左袖に円礫を埋め込み芯にしていた。

遺物は、土師器環・小型甕・台付甕・甕・鉢・羽釜、須恵器環・高台付環・皿・甕、灰袖陶器碗、鉄製品、土製品等がある（第42図）。カマドAからはコノ字甕（24・25）、台付甕と考えられる小型甕（19・20）が出土し、カマドBからは羽釜（27）が出土した。第3号土壌に重なるピット3の上面から土師器環（1）、南西隅部の壁際から8の墨書をもつ環、9の高台付環、ピット2の南脇から31の平底の須恵器甕が出土した。

住居の時期は、9世紀後半に位置づけられる。



第42图 第7号住居跡出土遺物

第17表 第7号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.6)	4.2	(7.0)	ACEHJK	30	普通	橙	№7.5K25 体部外面指頭王痕	
2	土師器	坏	(13.4)	4.0	—	AHI	10	普通	にぶい褐	ベルト 体部外面ヘラケズリ	
3	土師器	坏	—	(11.2)	(6.7)	AHI	65	普通	橙	C 底部外面ヘラケズリ	
4	須恵器	坏	(13.5)	4.1	(6.2)	AHIK	20	普通	橙	酸化焙焼成	
5	須恵器	坏	—	[2.3]	(6.0)	AEHI	20	普通	明赤褐	ベルト 底部外面回転系切り 酸化焙焼成 赤焼け	
6	須恵器	坏	—	[1.6]	5.7	ABE	60	普通	灰	拡張部 底部外面回転系切り	
7	須恵器	坏	(13.0)	[3.3]	—	ABCIK	15	普通	灰白	拡張部	
8	須恵器	坏	(13.0)	[4.3]	—	ABEHIK	25	普通	灰白	№18 体部内面墨書「我」か(逆位)	21-4
9	須恵器	高台付坏	—	[3.2]	(6.3)	ABCEH	25	普通	灰黄	№19 底部外面回転系切り	
10	須恵器	高台付坏	—	[2.9]	—	ACEI	85	普通	灰	№20 底部外面回転系切り	
11	須恵器	高台付坏	—	[2.2]	(6.3)	AEHI	30	普通	黄灰	拡張部 底部外面回転系切り	
12	須恵器	高台付坏	—	[2.4]	(6.2)	ACHI	70	普通	明赤褐	B 底部外面回転系切り 酸化焙焼成 赤焼け	
13	須恵器	皿	(13.0)	1.9	(6.0)	EK	25	普通	灰	拡張部 拡張部上層 底部外面回転系切り	
14	灰釉陶器	塊	(15.0)	[4.4]	—	IK	10	普通	灰白	SJ7SK2 東濃産 光ヶ丘1号窯式 ハケ塗り	25-2
15	灰釉陶器	塊	—	[2.2]	(6.0)	IK	20	普通	灰白	拡張部 東濃産 光ヶ丘1号窯式 ハケ塗りか	25-2
16	灰釉陶器	塊	—	[1.8]	—	IK	破片	良好	灰黄	一括 東濃産 ハケ塗り	25-2
17	灰釉陶器	塊	—	[2.1]	—	IK	破片	良好	灰白	ベルト 東濃産 ハケ塗り	25-2
18	灰釉陶器	塊	—	[2.1]	—	IK	破片	良好	灰白	SK25 東濃産 ハケ塗り	25-2
19	土師器	小型甕	(11.8)	[6.6]	—	ACI	25	普通	にぶい褐	SJ7SK3 №2.5K3 台付甕か	
20	土師器	小型甕	(12.0)	[5.7]	—	AHIK	25	普通	にぶい橙	カマド№7 台付甕か	
21	土師器	台付甕	—	3.3	(8.3)	AHIK	70	普通	にぶい黄橙	拡張部	
22	土師器	台付甕	—	[2.7]	10.4	CHI	70	普通	褐	C	
23	土師器	甕	(15.0)	[6.4]	—	ABHI	25	普通	にぶい黄褐	№1 胴部外面縦位ヘラケズリ	
24	土師器	甕	(20.7)	[7.4]	—	AEHIK	20	普通	明赤褐	SJ7SK3 №2 コの字状口縁	
25	土師器	甕	(22.0)	[8.4]	—	ABEHIK	15	良好	にぶい橙	カマドA №9 コの字状口縁	
26	土師器	鉢	(20.0)	[4.2]	—	AHI	10	普通	橙	一括 体部外ヘラケズリ	
27	土師器	羽釜	(19.3)	[6.6]	—	ABEHI	10	普通	明赤褐	カマド№2 ロクロ整形	
28	土師器	羽釜	(21.0)	[7.0]	—	ABHI	10	普通	にぶい黄橙	№11 ロクロ整形	
29	須恵器	甕	—	[5.0]	—	EIK	破片	良好	灰	トレ1 外面欄書き波状文	
30	須恵器	甕	—	[4.1]	—	BEI	5	良好	灰	拡張部 外面ナデ 内面当て具痕	
31	須恵器	甕	—	[5.5]	(18.0)	BI	25	普通	灰黄褐	№16	
32	鉄製品	刀子	長さ[2.4]	幅0.7	厚さ0.3	重さ1.2				B 菜尻付逆 菜尻を丸くおさめる	26-6
33	土製品	棒状品	—	[7.9]	—	ABCEHI	70	普通	にぶい赤褐	SJ7SK3 三足鍋の脚部か	26-4

第8号住居跡(第43図)

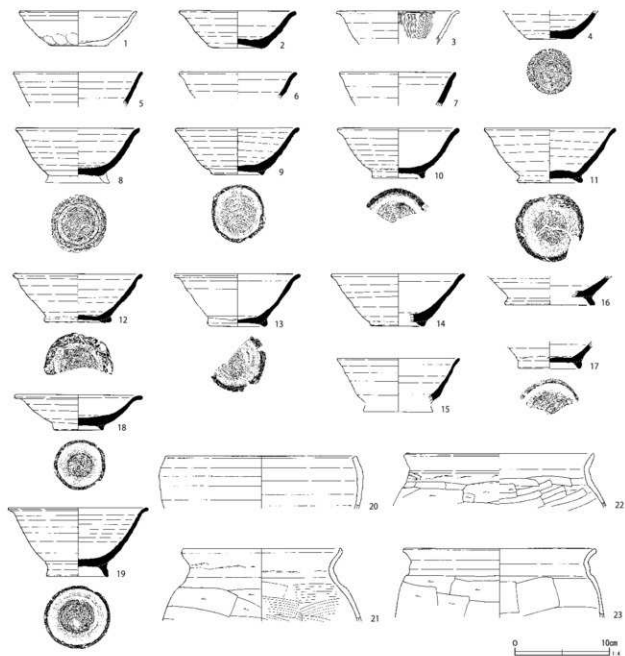
調査区東端のX-2グリッドに位置し、東側に第9号住居跡が隣接する。第5号溝跡が東西に貫通し、第16号土壌が西壁の一部を壊していた。

東壁にカマドをもつ横長方形の住居跡と考えられる。検出した規模は南北長3.15m、東西長2.65m、深さ0.23mである。主軸方位はN-113°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、ほぼ全面に貼床(第4層)が施されていた。またカマド前面には硬く踏み締

められた硬化面(第3層)を検出した。壁溝、柱穴等の施設はみられなかったが、床下土壌と考えられる第1号土壌がカマド手前から検出された。第1号土壌の規模は長軸長1.06m、短軸長0.64m、深さ0.23mである。このようにカマドの前面に床下土壌をもつ事例が、第1・2・3・7号住居跡などでも認められている。

カマドは、東壁のほぼ中央に設けられていると推定される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は斜めに立ち上がる。規模は燃焼部長0.55m、



第44図 第8号住居跡出土遺物

第18表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	環	(12.4)	[3.7]	6.3	CEGHI	35	普通	赤褐	№1 底部外面ヘラケズリ	21-5	
2	須恵器	環	(12.2)	3.9	(5.6)	AHIK	50	普通	灰黄褐	№10 底部外面回転糸切り 炭化物付着		
3	土師器	環	(12.7)	[3.6]	—	AEHIK	15	良好	橙	ロケ口整形 内面ヘラミガキ 酸化焙焼成		
4	須恵器	環	—	[3.0]	4.8	ABHI	50	普通	灰	№25 底部外面回転糸切り		
5	須恵器	環	(13.6)	[3.7]	—	ACEHIK	20	普通	灰白	№20		
6	須恵器	環	(12.2)	[2.9]	—	AHI	20	不良	にぶい橙	カマド 酸化焙焼成		
7	須恵器	環	(12.2)	[3.6]	—	AHIK	15	普通	にぶい黄褐	酸化焙焼成		
8	須恵器	高台付環	(13.0)	[5.0]	—	ABHI	45	普通	にぶい黄橙	SJBSK1 №2 底部外面回転糸切り 高台剥離		21-6
9	須恵器	高台付環	13.0	4.8	5.6	ACEHI	95	普通	にぶい黄橙	SJBSK1 №1 底部回転糸切り 口縁焼き歪み		21-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
10	須恵器	高台付坏	(12.6)	[5.3]	(5.6)	ACEHUK	25	普通	にぶい黄橙	カマド 底部外面回転系切り 酸化焰焼成	
11	須恵器	高台付坏	13.7	5.7	7.0	ABEIK	95	不良	にぶい黄橙	No.4 底部外面回転系切り	22-1
12	須恵器	高台付坏	(13.5)	5.0	7.2	ACHIK	45	普通	灰	No.23 底部外面回転系切り	22-2
13	須恵器	高台付坏	(13.1)	5.5	(5.6)	ACEHIK	25	普通	褐灰	一括 X2G,T2G 底部外面回転系切り	
14	須恵器	高台付坏	14.0	5.5	5.8	ABHIK	60	普通	灰黄	No.7 底部外面回転系切り	22-3
15	須恵器	高台付坏	(12.8)	[4.8]	—	CEIK	65	普通	黄灰	No.9	
16	須恵器	高台付埴	—	[3.1]	(9.4)	BEIK	20	普通	灰	No.5 底部外面回転系切りか	
17	須恵器	高台付坏	—	[2.9]	(6.7)	EIK	25	普通	灰黄褐	No.27 底部外面回転系切り	
18	須恵器	高台付皿	(13.2)	3.8	5.2	AEHIK	50	普通	黄灰	No.3,カマド 底部外面回転系切り	22-4
19	須恵器	高台付埴	(14.6)	7.2	6.6	ABEI	60	良好	黒	No.13 底部外面回転系切り 黒色処理か	22-5
20	土師器	鉢	(20.2)	5.7	—	ABEHIK	5	良好	橙	No.16 ロクロ整形 鉄鉢模倣か	
21	土師器	甕	(16.6)	[7.7]	—	CEHIK	20	普通	にぶい橙	No.8 コの字状口縁	
22	土師器	甕	(19.8)	[5.7]	—	ACHI	25	普通	明赤褐	No.8 No.21 コの字状口縁	
23	土師器	甕	(20.1)	[7.3]	—	AEGHI	10	普通	にぶい褐	No.18 コの字状口縁	

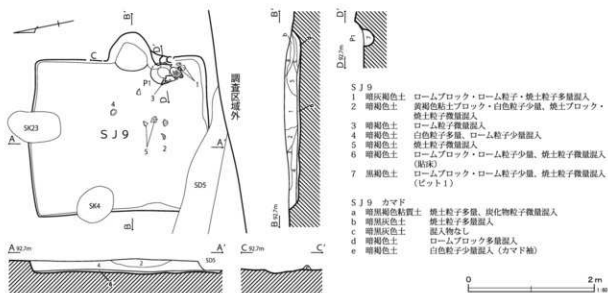
遺物は、カマド右脇から中央部にかけて、須恵器高台付坏、土師器甕などが出土した（第46図）。また、ピット1の周辺には円礫が意図的に置かれていた。1～3は酸化焰焼成の高台付坏である。軟質に焼き上がり、器壁が厚い。4の甕は器壁が厚く、羽釜ないし土釜の底部の可能性もある。5は平底の甕で、胴部はロクロ整形である。

出土遺物が少なく、住居の時期を決めるには材料不足であるが、煮沸具がコの字甕からロクロ甕や羽釜に代わり、酸化焰焼成の高台付坏が供膳具の主体であることから、10世紀中葉を中心とする時期に位置づけられる。

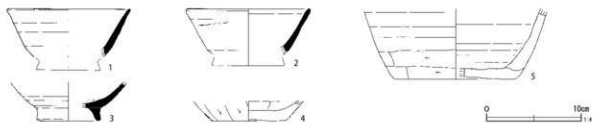
第10号住居跡（第47図）

調査区西側のO-2グリッドに位置する。第13・15・16～18号溝跡と重複する。第13・15号溝跡が埋没した後に構築され、住居廃絶後、第16～18号溝跡によってカマド先端部などが壊されている。住居の北半分が、調査区域外にかかるため平面形は明確でないが、南東隅部にカマドをもつ小型の住居跡である。平面形は南北に長い長方形と推定される。規模は東西長2.56m、深さ0.37mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド左脇にピット1が検出された。埋土中に浅間B軽石の混入が認められ



第45図 第9号住居跡



第46図 第9号住居跡出土遺物

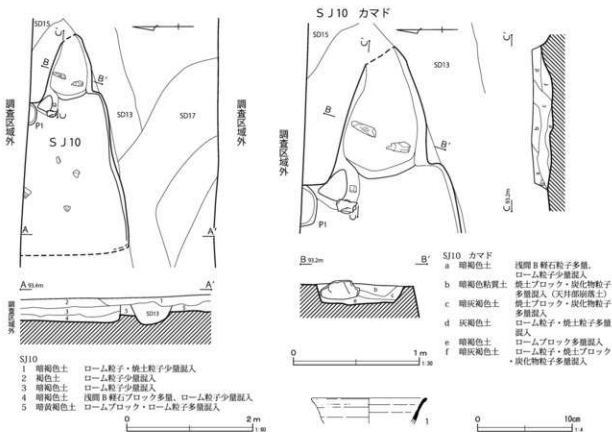
第19表 第9号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付坏	12.0	[5.3]	—	ABCHI	35	普通	にぶい黄褐色	№6 器内外面風化 酸化焙焼成	
2	須恵器	高台付坏	13.0	[4.8]	—	ABCI	15	普通	にぶい黄褐色	№11 酸化焙焼成	
3	須恵器	高台付坏	—	[4.1]	(6.8)	AEHI	20	普通	にぶい黄褐色	№3 酸化焙焼成	
4	土師器	甕	—	[2.1]	(8.0)	ABHIK	70	普通	にぶい黄褐色	№1,5,8 カマド 底部外面ヘラケズリ	
5	土師器	甕	—	[7.4]	(12.8)	ABHI	30	普通	にぶい黄褐色	№8,9,5,8 カマド ロクロ整形	

たが、これは第16号溝跡の埋土を分層することができなかったことに起因する。カマドは東壁の南東隅部に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は浅く凹む。燃焼部の底面には、袖や壁面を補強するために用いられた片岩が

残されていた。規模は燃焼部長0.94m、燃焼部幅0.59mである。遺物は少なく、須恵器坏の口縁部破片が出土したのみである(第47図)。

住居の時期は、須恵器坏が還元焙焼成であることから9世紀後半に位置づけられておきたい。



第47図 第10号住居跡・出土遺物

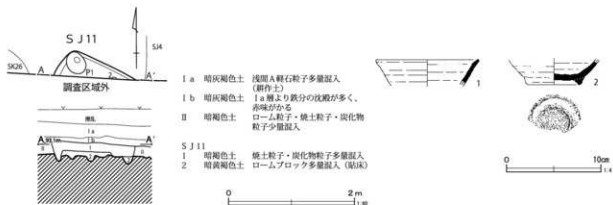
第20表 第10号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.0)	[2.7]	—	AEIK	5	普通	灰	一括	

第11号住居跡(第48図)

調査区中央部のT-2グリッドに位置し、第4号住居跡の西側に近接する。住居の大半が調査区域外にかかり、北西隅部付近のみを検出した。平面形態は方形系と推定される。調査区壁面の土層

観察によれば、床面には貼床が施されていた。北西隅部には、径36×27cm、深さ25cmのピット1が認められた。遺物は、須恵器坏・高台付坏が出土した(第48図)。2は酸化焙焼成で、軟質の焼き上がりである。10世紀前半に位置づけられる。



第48図 第11号住居跡・出土遺物

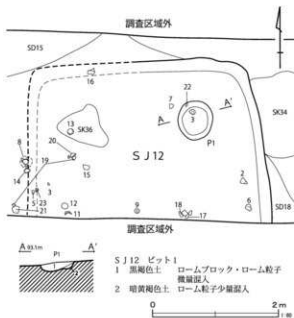
第21表 第11号住居跡出土遺物観察表(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(11.0)	[2.3]	—	AIK	3	普通	にぶい黄橙	酸化焙焼成	
2	須恵器	高台付坏	—	[2.8]	(6.0)	ABHIK	30	普通	褐灰	No.1 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	

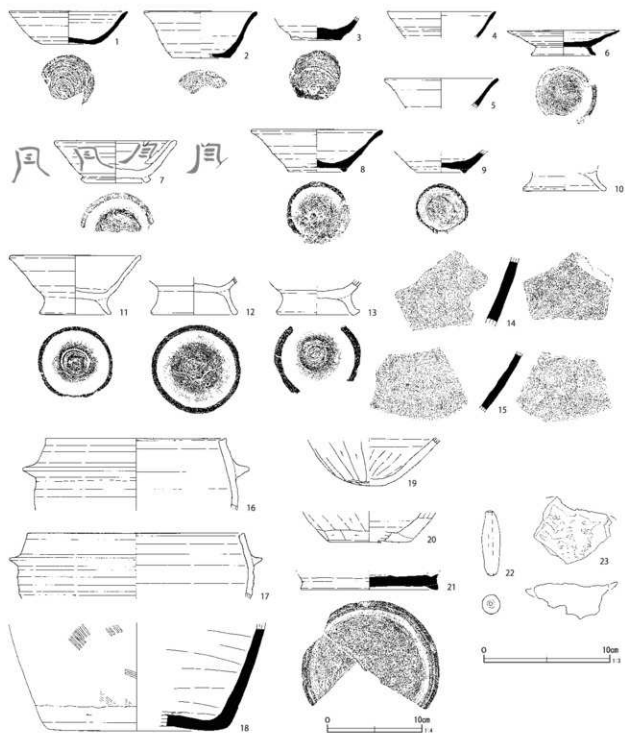
第12号住居跡(第49図)

調査区西側のP-2グリッドに位置する。土層断面の観察によると第34号土壌を壊し、第18号溝跡および第36号土壌によって床面の西半分が大きく削平を受けていた。そのため住居跡の平面形は明確にし得ないが、一辺3.8m前後の方形と推定しておく。住居の深さは18cmと浅く、北東隅部に寄った床面には直径60cmのピット1が認められた。遺物は、須恵器坏・高台付皿・甕、土師器高台付坏・高台付碗・羽釜・甕、土錘、椀形鍛冶滓などが出土した(第50図)。

第18号溝跡の遺物との混在が多く、本住居跡に直接伴う遺物を明確にすることは難しいが、1・2の坏、6の高台付皿、8の高台付坏等から9世紀後半に位置づけられておきたい。



第49図 第12号住居跡



第50図 第12号住居跡出土遺物

第15号住居跡 (第51図)

U-2グリッドに位置する。第6号住居跡を壊すが、全体に掘り込みが浅いため、カマドのみを検出した。おそらく東壁なし北壁にカマドをもつ住居跡であろう。カマドは平面逆台角形の燃焼部の掘り方のみを残す。規模は燃焼部長0.69m、

幅0.49mである。カマドの主軸方位はN-47°-Wを指す。遺物は須恵器環・高台付環、土師器高台付環が出土した。

住居跡の時期は、遺物が少なく明確にし得ないが、2の足高台から10世紀中葉に位置づけたい。

第22表 第12号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	3.5	(5.6)	EHI	15	普通	にぶい黄褐色	床直・P2G 底部外面回転糸切り	
2	須恵器	坏	(11.9)	4.9	(6.0)	BCHI	20	普通	灰褐色	P2G 一括・P2G No 34 底部外面糸切り	
3	須恵器	坏	—	[2.5]	5.2	ACIK	70	普通	にぶい黄褐色	P1G No 13 底部外面回転糸切り	
4	須恵器	坏	(11.4)	[2.9]	—	EIK	10	良好	灰	一括	
5	須恵器	坏	(12.0)	[3.2]	—	CIK	5	普通	黒	No 4 黒色処理か	
6	須恵器	高台付皿	(12.0)	2.6	(6.6)	EI	45	普通	灰	P2G, No 31 底部外面回転糸切り	22-6
7	土師器	高台付坏	(12.8)	4.4	(7.4)	ACHI	30	普通	にぶい黄褐色	O2G, P2G, P1G No 10 体部内外面朱書	22-7
8	須恵器	高台付坏	(13.7)	4.4	6.4	AEHI	40	普通	暗灰黄	No 1 底部外面回転糸切り 口縁部焼き歪み	22-8
9	須恵器	高台付坏	—	[2.3]	5.0	AEJK	80	普通	にぶい黄褐色	P2G No 20 底部外面ナデ	
10	土師器	高台付坏	—	[2.2]	(9.2)	ABHIK	30	普通	にぶい黄褐色	坏部剝離痕明顯	
11	土師器	高台付坏	(13.7)	6.2	7.6	ACIK	45	普通	浅黄	P2G No 10.4 次 P2G 底部外面回転糸切り	23-1
12	土師器	高台付埴	—	[4.0]	9.3	ACHI	70	良好	橙	P2G No 9 底部外面糸切り 足高台	23-2
13	土師器	高台付埴	—	[3.7]	8.8	ACEHIK	70	普通	にぶい黄褐色	P2G No 11 底部外面口クロナデ 足高台	
14	須恵器	甕	—	[7.3]	—	EJK	破片	普通	灰	No 2 外面ナデ 内面無文当て具痕	
15	須恵器	甕	—	[6.5]	—	EHIK	破片	良好	灰	No 1 外面降灰 内面無文当て具痕	
16	土師器	羽釜	(19.1)	[7.6]	—	ACIK	20	普通	にぶい黄褐色	P1G No 8 ロクロ整形	
17	土師器	羽釜	(23.0)	[7.0]	—	AI	15	普通	にぶい橙	P2G No 26 ロクロ整形	
18	須恵器	甕	—	[11.3]	(20.0)	AEHIK	20	良好	灰	P2G No 25 胴部外面弱い平行甲き目	
19	土師器	甕	—	[5.2]	2.7	AHI	40	普通	にぶい橙	No 2, O2G, P2G No 2 底部丸底	
20	土師器	羽釜	—	3.2	(8.7)	ACEHIK	25	普通	橙	No 2, P2G, O2G 体部外面ヘラケズリ	
21	須恵器	甕	—	[1.6]	14.6	ABEIK	60	普通	灰白	P2G No 1 底部外面ヘラナデ	
22	土製品	土鍾	長さ5.1 最大径1.5 厚さ1.5 孔径0.3 重さ9.6						P1G No 12 胎土精選		26-5
23	鉄滓	細砂礫状	長さ4.6 幅6.0 厚さ3.7 重さ69.9						P2G No 5 表面に鐵造剝片が付着 比重重い 光沢のある滓		26-7

イ. 溝跡

平安時代の溝跡は7条検出された。分布状況は調査区西側の第4・13・15～18号溝跡、および調査区中央部の第12号溝跡に大きく分かれる。中・近世の溝跡が、南北を指向しているのに対し、該期のは走行方向が一定していない。

第4号溝跡(第59図)

調査区西端に位置し、第18号溝跡の埋土を掘り込んでいた。緩やかに屈曲しながら、北東から南に向きを変える。時期は埋土中に浅間B軽石を含むことから平安時代中期以降であろう。

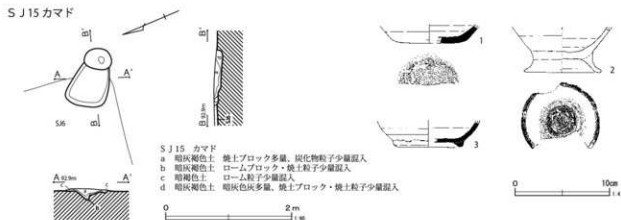
第12号溝跡(第52図)

調査区中央部に位置し、北西から南東に向かって走行する。第3号住居跡に壊され、第22号土壌を壊していた。断面逆台形で、底面は南東に向かって緩やかに傾斜する。なお、南側に隣接するA地点のS D 7と同一の溝跡である。

第13・15～18号溝跡(第52・53図)

調査区の西側に位置する。重複が激しいため各溝跡の平面形や前後関係については明確にし得ない。調査区壁面の土層観察によると、最初に埋没谷などの自然地形を利用して南北方向の溝跡が掘削されたと考えられる。そして、その凹地を利用して第13号溝跡が北東から南西に向かって掘削された。次いで第15号溝跡が、第13号溝跡から北へ分岐するように掘削されものと考えられる。第13・15号溝跡の埋没後は、周辺に第10・12号住居跡などが構築され、居住域化が進行した。

住居跡の廃絶した10世紀中葉には、上幅約9.2m、深さ0.6mの第18号溝跡が掘削された。次いで第17号溝跡が第13号溝跡の一部を共有するように掘削された。さらに、第17号溝跡の埋没が進行する中で、南北方向に伸びる第16号溝跡が最後に掘削されたものと推定される。



第51図 第15号住居跡・出土遺物

第23表 第15号住居跡出土遺物観察表(第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	環	—	2.0	(6.4)	ABHI	30	普通	にぶい黄橙	カマド 底部外面回転系切り	
2	土師器	高台付埴	—	[4.6]	8.0	AHI	10	普通	にぶい黄	SJ6,一括 U2G 底部外面ナデ 足高高台	23-3
3	須恵器	高台付埴	—	[2.8]	(7.3)	AEIK	20	不良	にぶい黄橙	カマド 底部外面回転系切り	

ウ. 溝跡出土遺物(第54図)

第12号溝跡からは1の高台付皿、2の口唇部に沈線状のヨコナデを施すコの字状口縁裏、3の須恵器甕が出土した。第13号溝跡からは4の酸化焰焼成の高台付環が出土している。次節で述べるように第14号溝跡は、第1号住居跡を壊す近世以降の溝跡であることから、5・6の高台付環は、第1号住居跡からの流れ込みであろう。第18号溝跡からは7のロクロ土師器の環、10の朱書をもつ高台付環、8の高台付皿、9・11の高台付環、12の羽釜、13の須恵器甕、14の短頸化した台付甕が出土した。

エ. 土壌

平安時代の土壌は、調査区西側を中心に7基検出された(第55図)。

第1号土壌は、調査区西端に位置する平面長楕円形の土壌である。南側が調査区域外にかかるため、規模は不明である。調査中、底面に炭化物が広がっていることから土器焼成坑の可能性も考えたが、性格については明確にし得なかった。

第9号土壌は、第1号住居跡と第2号住居跡の間の空閑地に位置する。平面隅丸方形で、長軸長

1.78m、短軸長1.53m、深さ0.27mを測る。須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。このうち須恵器甕の破片は第2号住居跡と接合関係にあった。

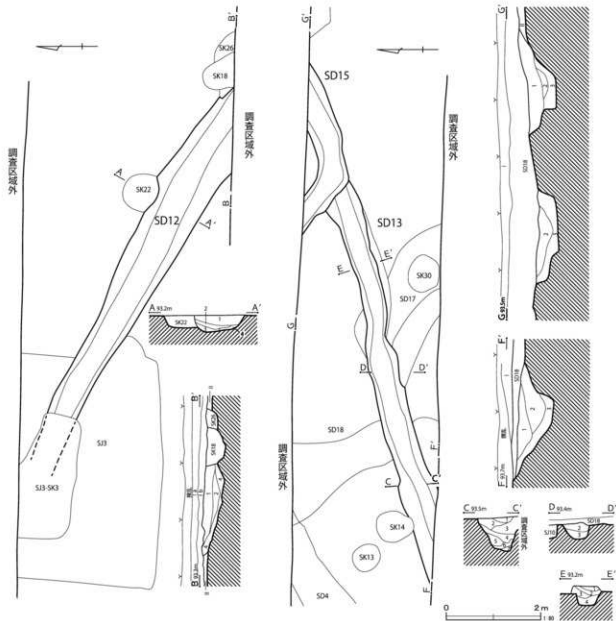
第22号土壌は、第3号住居跡の東側に位置する。第12号溝跡と重複し、一部壊されていた。直径約80cmの円形の土壌で、深さは30cm程である。埋土の上面から土師器耳皿が単独で出土した。

第33・34号土壌は、第12号住居跡の東側に隣接する。第33号土壌が、第34号土壌を壊していた。第33号土壌は平面楕円形で、長軸長1.45m、短軸長1.13m、深さ0.11mである。第34号土壌は直径約1.35mの円形の土壌である。

第36・37号土壌は、調査区西側を南北に流れる第18号溝跡と重複する土壌である。調査の不慎で第18号溝跡と第12号住居跡との先後関係は不明である。第36号土壌は、平面不整形を呈し、埋土の上面からはほぼ完形の須恵器高台付環が出土した。第37号土壌は、直径約1mの略円形の土壌である。遺物はないが、埋土の状況や遺構の重複関係から平安時代の所産と判断した。

オ. 土壌出土遺物(第56図)

1～6は第1号土壌から出土した土師器高台付



- I a 暗灰褐色土 浅層A軽石粒子多量混入（耕作土）
 I b 暗灰褐色土 I a層より鉄分の沈殿が多く、赤味がかかる
 II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入

SD12 (A-A'・B-B')

- I a 暗灰褐色土 浅層A軽石粒子多量混入（耕作土）
 I b 暗灰褐色土 I a層より鉄分の沈殿が多く、赤味がかかる
 II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・シルト粒子微量混入
 2 暗黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子・シルト粒子微量混入
 3 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子・シルト粒子微量混入
 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入

SD13 (C-C')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入
 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量混入
 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量混入
 5 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入
 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子極多量混入
 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入

SD13 (D-D'・E-E')

- 1 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子極多量混入
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入
 3 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量混入
 4 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量混入

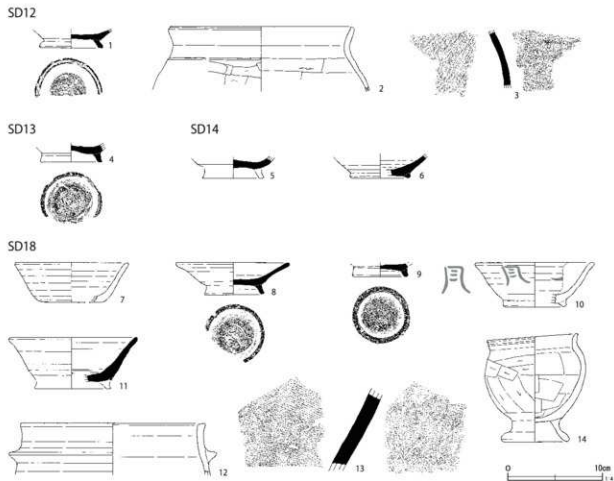
SD13 (F-F')

- 1 暗黒灰色土 ローム粒子少量、ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子微量混入
 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量混入
 3 暗褐色土 混入物なし

SD15 (G-G')

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子少量混入
 2 暗黒褐色土 ローム粒子少量混入
 3 暗黒褐色土 ロームブロック多量混入

第52図 第12・13・15号清跡



第54図 溝跡出土遺物

第24表 溝跡出土遺物観察表(第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付皿	—	[2.0]	6.7	EG1	60	普通	灰	SD12 底部外面回転系切り	
2	土師器	甕	(19.2)	[6.8]	—	AHIK	20	普通	明赤褐	SD12	
3	須恵器	甕	—	[6.2]	—	AEIK	5	良好	黄灰	SD12U2G 外面平行引き 内面ナデ	
4	須恵器	高台付坏	—	[2.1]	6.5	ACEHI	70	普通	明赤褐	SD13 底部外面ナデ 酸化焙焼成	
5	須恵器	高台付坏	(4.6)	[1.3]	—	CEGIK	20	普通	灰黄	SD14 底部外面回転系切り 高台割離	
6	須恵器	高台付坏	—	[2.5]	(6.4)	EHI	10	普通	灰	SD14 底部外面回転系切り	
7	土師器	坏	(11.9)	4.2	(7.2)	ACHI3	30	普通	浅黄	SD18.SJ13 №4 底部回転系切り 酸化焙焼成	
8	須恵器	高台付皿	11.8	3.4	6.4	ABCEHI	80	普通	明赤褐	SD18.O2G №20 底部系切り 酸化焙 赤焼け	23-5
9	須恵器	高台付坏	—	[1.4]	5.6	ABHI	95	普通	にぶい褐	SD18.SJ13 №3 底部回転系切り 酸化焙焼成	
10	土師器	高台付坏	(12.6)	[4.6]	(6.8)	AHIK	30	普通	灰黄	SD18.SJ13 №6 体部内外面朱書	23-4
11	須恵器	高台付坏	(13.3)	[4.7]	—	AEHI	25	普通	褐灰	SD18.O2G №10 底部外面回転系切り	
12	土師器	羽釜	(19.5)	[5.5]	—	AHIK	15	普通	褐灰	SD18.SJ13 №5 ロク口整形 須恵質	
13	須恵器	甕	—	[8.8]	—	HI	破片	普通	暗灰黄	SD18.O2G №15 外面平行引き目 内面ハケメ	
14	土師器	台付甕	9.5	11.0	6.7	AEHI	70	普通	にぶい褐	SD18.P2G.O2G №19.O2G 外面スス付着	23-6

ズリを施す。7～12は第9号土壌から出土した須恵器高台付坏、灰釉陶器碗、緑釉陶器輪花付椀である。高台付坏は酸化焙焼成で軟質のものが多

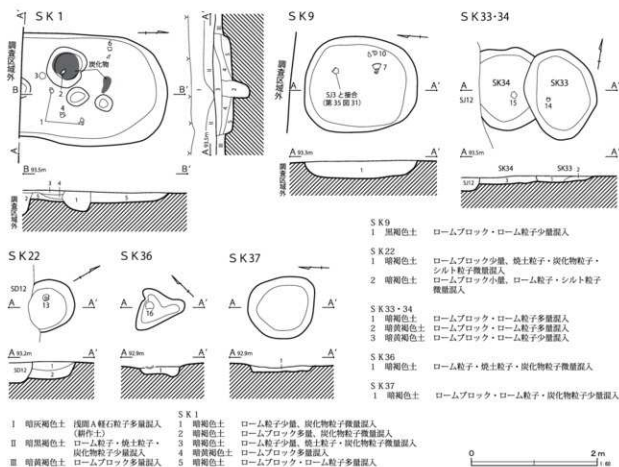
い。9は赤焼け須恵器である。11は東濃産と考えられる製品で、釉は漬掛けで施釉される。12は緑釉陶器の破片で、猿投産と考えられる。13は第22

号土壌から出土した土師器の耳皿で、小さく突出する底部が特徴的である。胎土は精選され、夾雑物を含まない。類例に乏しく、時期的な位置づけが難しい。14は第33号土壌から出土した須恵器高台付環である。酸化焙焼成で、高台はやや長く、ハの字に開く。15は第34号土壌から出土した須恵器の大甕の胴部破片である。外面調整は平行叩き目、内面調整は無文当て具痕を残す。16は第36号土壌から出土した須恵器の高台付環である。内外面とも焼し焼成による黒色処理が施されている。高台の貼り付けは粗雑である。

カ. グリッド出土遺物 (第57・58図)

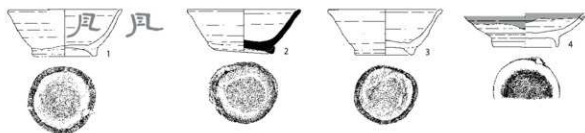
1は酸化焙焼成の須恵器環で、口唇部内側が沈線状に浅くくぼむ。2はロクロ整形の土師器環で、やや深身を呈する。3・4は非ロクロの土師器環である。4は平底の底部で、外面に延圧痕による

細かなヒビ割れがある。5は底部外面に回転糸切り離し痕を残す土師器環である。6・7は須恵器環としたが、7は高台付環であろう。8は赤焼け須恵器の高台付環である。9はロクロ整形の土師器高台付環で、内外面に黒色処理(焼し焼成)を施す。10はロクロ整形の足高台境である。時期は10世紀後葉以降に位置づけられる。11・12は灰釉陶器の皿を模倣した須恵器高台付皿で、9世紀後半以降に出現する器種である。11は内外面に黒色処理を施す。13・14は灰釉陶器の碗である。13は東濃の製品で、釉は漬掛けにより施軸する。14は体部外面にヘラケズリを施し、内面に重ね焼き痕がみられる。施軸はハケ塗りである。東濃産で光ヶ丘1号窯式に比定される。時期は9世紀末葉に位置づけられる。15は灰釉陶器の長頸瓶で、胎土の特徴から静岡産と考えられる。16はロ



第55図 第1・9・22・33・34・36・37号土壌

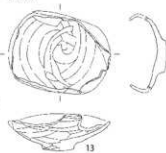
SK1



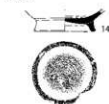
SK9



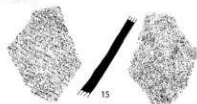
SK22



SK33



SK34



SK36

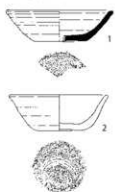


第56図 土壇出土遺物

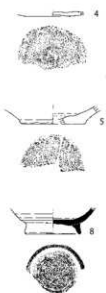
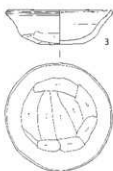
第25表 土壇出土遺物観察表(第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高台付坏	(11.9)	5.9	7.0	ACEHIK	50	普通	にぶい黄橙	SK1 No.2,5 体部内面朱書	23-7
2	須恵器	高台付坏	(12.0)	4.7	6.2	BCGHIK	60	普通	灰	SK1 No.3,一括 底部外面回転系切り	24-1
3	土師器	高台付坏	(12.0)	4.8	6.4	CEHIK	75	普通	にぶい黄橙	SK1 No.1 底部外面回転系切り	24-2
4	灰釉陶器	埴	[3.6]	6.8	IK	30	良好	灰白	SK1 No.4 東濃産 大原2号窯式 漬掛け	25-2	
5	須恵器	高台付坏	(11.4)	[4.4]	—	ABCEHI	20	普通	にぶい赤褐	SK1 底部回転系切り 酸化焙焼成 赤焼け	
6	須恵器	甗	—	[4.9]	(13.8)	AEHI	10	普通	灰黄褐	SK1 No.7,M2G 体部下端ヘラケズリ	
7	須恵器	高台付坏	12.9	5.5	7.2	AEHI	95	普通	灰	SK9 No.3 底部外面回転系切り	24-3
8	須恵器	高台付坏	(11.8)	4.9	(6.4)	AEHIK	20	普通	にぶい黄橙	SK9 底部外面回転系切り 酸化焙焼成	
9	須恵器	高台付坏	—	[3.2]	(6.0)	BHI	5	普通	にぶい褐	SK9 底部回転系切り 酸化焙焼成 赤焼け	
10	須恵器	高台付坏	—	[2.5]	(6.0)	ABEHI	40	普通	にぶい黄褐	SK9 No.1 底部外面回転系切り 酸化焙焼成	
11	灰釉陶器	埴	(15.0)	[2.1]	—	IK	10	普通	灰白	SK9,O2G 東濃産 漬掛け	25-3
12	緑釉陶器	輪花付碗	—	[1.7]	—	I	5	良好	灰	SK9 攝投産 輪:暗オリーブ	24-4
13	土師器	耳皿	(10.6)	[3.8]	3.3	ACHI	70	普通	橙	SK22 No.1 体部外面ヘラケズリ 内面ナデ	24-6
14	須恵器	高台付坏	—	[2.4]	6.3	BCHI	85	普通	橙	SK33 No.1 底部回転系切り 酸化焙 赤焼け	
15	須恵器	甗	—	[8.5]	—	BEIK	5	普通	灰	SK34 No.1 平子叩き目 無文当て貝痕	
16	須恵器	高台付坏	12.6	5.0	5.4	AHI	90	普通	黒褐	SK36 No.1 底部外面回転系切り 黒色処理か	24-5

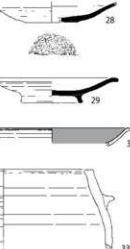
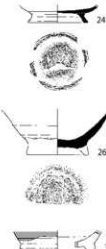
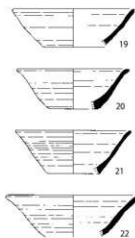
M-2グリッド



O-2グリッド



P-2グリッド



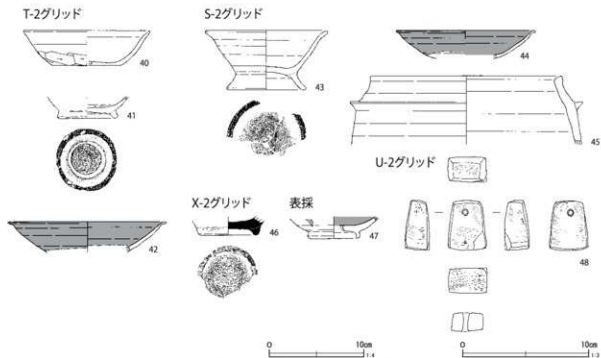
Q-2グリッド



R-2グリッド



第57図 グリッド出土遺物(1)



第58図 グリッド出土遺物(2)

クロク整形の土師器甕で、ロクロ目が細かく、外面に爪痕がみられる。17は羽釜で、ロクロ整形を施す。18は口径20.7cmに復元される土師器の鉢である。19～23は須恵器環で、酸化焙焼成で軟質に焼き上がったものが多い。21はロクロ目が顕著である。24～26は須恵器高台付環である。25・27は内外面に黒色処理を施す。28は無台の須恵器皿、29は高台付皿である。30は緑釉陶器皿の小片で、猿投産であろう。31は灰釉陶器の瓶の底部破片である。東濃産であろう。32は灰釉陶器甕で、施釉は漬掛けである。東濃産の虎渓山1号窯式に比定され、10世紀後半に位置づけられる。33は口縁部が内湾する羽釜である。

34は神秤の重りと考えられる安山岩製の石製品(権錘)で、円孔を正面から上面に向けて斜めに穿孔する。35・36は紡錘状の土錘である。37は鉄塊系遺物で、鍛冶滓が付着する。

38は非ロクロの土師器環で、器形は3に類似している。39は灰釉陶器甕である。東濃産で釉を漬掛けし、虎渓山1号窯式に比定される。40は須恵器の環を模倣した土師器環である。41は

土師器高台付環で、見込みのロクロ目が細かい。42は灰釉陶器の甕で、施釉はハケ塗りである。東濃産の光ヶ丘1号窯式と考えられる。43は足高台甕である。口縁部の外反が弱く、木器や漆器を模倣したものであろう。10世紀末葉から11世紀初頭頃に位置づけられる。44は灰釉陶器甕で、釉は漬掛けされる。東濃産の大原2号窯式と考えられ、10世紀前葉に位置づけられる。45はロクロ整形の羽釜で、口縁部が内屈する。46は酸化焙焼成の須恵器高台付環である。47は灰釉陶器の甕で、三日月高台をもち、釉は漬掛けされる。東濃産で虎渓山1号窯式と考えられる。48は凝灰岩製の権錘である。扁平な四角柱形で、穿孔は正面からなされる。

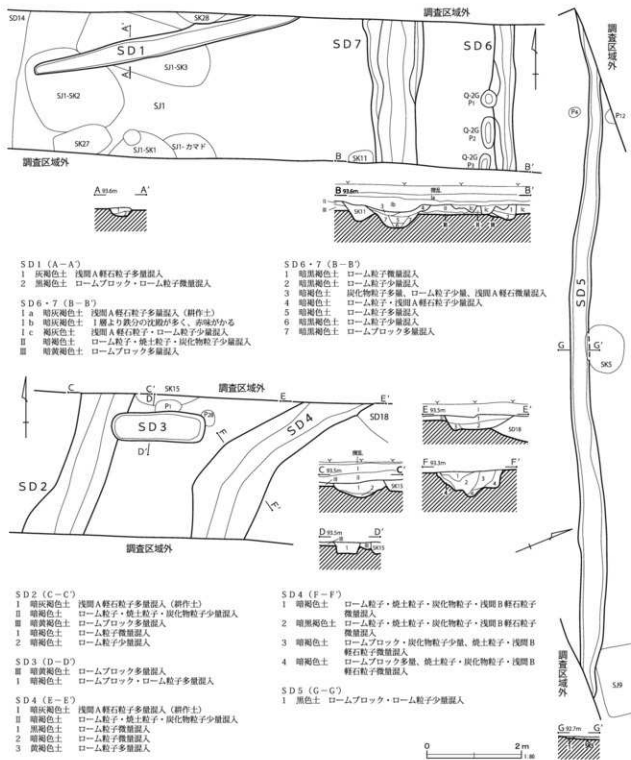
(4) 中・近世

ア. 溝跡

中・近世の溝跡は10条検出された。調査区内を縦断するように南北に延びる溝跡が多く、7条を数える(第2・6・7・8・10・11・14号溝跡)。このうち第6・7号溝跡は概ね平行して走り、溝の心々距離は2.3mである。また、第8号溝跡は

第26表 グリッド出土遺物観察表(第57・58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	環	(11.4)	3.3	(5.4)	ACHI	20	普通	明赤褐	M2G 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
2	土師器	環	(10.2)	3.7	5.0	EHI	50	普通	にぶい黄橙	M2G,M2G №3 底部糸切り 内外面黒斑	24-7
3	土師器	環	11.1	4.6	—	AEHIK	100	普通	橙	O2G №4 口縁部外面無調整	24-8
4	土師器	環	—	[0.5]	—	AHI	60	普通	橙	O2G 底部外面細かい亀裂 内面スズ付着	
5	土師器	環	—	[2.0]	(6.8)	ABH	45	普通	にぶい橙	O2G 底部外面回転糸切り	
6	須恵器	環	(15.9)	[3.5]	(3.7)	ACEHIK	20	普通	にぶい褐	SK14 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
7	須恵器	環	(13.0)	[4.5]	—	BHI	10	普通	にぶい黄褐	O2G 酸化焙焼成	
8	須恵器	高台付環	—	[2.8]	(6.0)	CHIK	60	普通	橙	O2G 底部回転糸切り 酸化焙焼 赤焼け	
9	土師器	高台付環	(11.5)	[5.2]	(6.6)	ABHIK	20	普通	褐灰	O2G 底部外面回転糸切り 黒色処理か	
10	土師器	高台付塊	—	[4.2]	(12.0)	AEHIK	20	普通	灰黄	O2G 足高台	
11	須恵器	高台付皿	—	[1.9]	(6.1)	AIK	40	普通	灰	O2G №3 底部外面糸切り 黒色処理か	
12	須恵器	高台付皿	—	[2.3]	(6.8)	ABEHI	60	普通	にぶい黄褐	O2G SJ10 №1 底部外面回転糸切り	
13	灰釉陶器	塊	—	[1.5]	—	I	破片	良好	灰白	O2G 東濃産 漬掛け	25-3
14	灰釉陶器	塊	—	[2.5]	(6.8)	IK	5	良好	灰白	O2G 東濃産 光ヶ丘1号窯式 ハケ塗り	25-3
15	灰釉陶器	長頸瓶	—	[5.6]	—	IK	20	良好	褐灰	O2G・P2G 静岡産	25-3
16	土師器	甕	(20.6)	[7.0]	—	CHU	10	普通	にぶい橙	O2G ロクロ整形 胴部外面爪状圧痕	
17	土師器	羽釜	(21.6)	[5.3]	—	AEHIJK	10	普通	灰黄	O2G・P2G ロクロ整形	
18	土師器	鉢	(20.7)	[6.1]	—	ACHIK	10	普通	橙	O2G 体部外面ヘラケズリ	
19	須恵器	環	(12.8)	[3.9]	(6.2)	AHI	10	普通	にぶい褐	P2G 酸化焙焼成 赤焼け	
20	須恵器	環	(11.8)	[4.2]	(5.1)	ABHI	10	普通	灰	P2G 底部外面回転糸切り	
21	須恵器	環	(12.2)	4.5	(5.6)	CEIK	25	普通	灰	P2G ロクロ目録者	
22	須恵器	環	(14.0)	[4.4]	—	AHIK	10	普通	橙	P2G 酸化焙焼成 赤焼け	
23	須恵器	環	—	[1.2]	5.4	IK	60	良好	灰白	P2G 底部外面回転糸切り	
24	須恵器	高台付環	—	[1.9]	6.3	EGJ	90	普通	灰	P2G 底部外面回転糸切り後ナデ	
25	須恵器	高台付環	—	[3.4]	(6.1)	AIK	35	普通	にぶい黄	P2G 底部外面回転糸切り 黒色処理か	
26	須恵器	高台付環	—	[4.6]	—	ABHIK	45	普通	にぶい黄橙	P2G 底部高台貼付後ナデ 酸化焙焼成	
27	須恵器	高台付環	—	[2.2]	6.9	AEIK	60	普通	灰黄褐	P2G 底部外面回転糸切り 黒色処理か	
28	須恵器	皿	—	[2.2]	(5.6)	BEHI	20	普通	灰黄	P2G 底部外面回転糸切り	
29	須恵器	高台付皿	13.8	2.6	(6.6)	AHI	30	普通	浅黄	P2G 底部外面回転糸切り	
30	緑釉陶器	皿	—	[1.4]	—	IK	破片	良好	灰	P2G 猿投産	24-4
31	灰釉陶器	瓶	—	[2.1]	4.0	IK	5	良好	灰黄	P2G 東濃産 小型	25-3
32	灰釉陶器	塊	(16.8)	[1.9]	—	IK	5	良好	灰黄	P2G 東濃産 虎渓山1号窯式 漬掛け	25-3
33	土師器	羽釜	(19.0)	[8.6]	—	AHI	10	普通	灰白	P2G ロクロ整形 須恵質	
34	石製品	権鎌	長さ4.1	幅2.6	厚さ2.3	重さ33.8g	石材:安山岩			P2G 四角柱形 穿孔跡め上から 被熱痕	26-2
35	土製品	土鉢	長さ2.1	最大径1.0	厚さ1.0	孔径0.5	重さ1.7			P2G 折損	26-5
36	土製品	土鉢	長さ4.3	最大径1.3	厚さ1.2	孔径0.4	重さ6.1			P2G 外側からの押圧により孔変形	26-5
37	鉄洋	鉄地所遺物	長さ2.4	幅3.8	厚さ2.2	重さ34.5				P2G 鋸状跡が付着	26-7
38	土師器	環	(11.4)	[3.3]	—	ACHI	15	普通	橙	Q2G 底部外面ヘラケズリ	
39	灰釉陶器	塊	(12.0)	[3.1]	—	IK	5	良好	灰白	R2G 東濃産 虎渓山1号窯式 漬掛け	25-3
40	土師器	環	(13.3)	3.7	(7.2)	ACEHI	20	普通	明赤褐	T2G 体部外面ヘラケズリ	
41	土師器	高台付環	—	[2.3]	6.4	AEHIK	80	普通	にぶい黄橙	T2G 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
42	灰釉陶器	塊	(16.8)	[3.2]	—	IK	10	良好	灰	T2G 東濃産 光ヶ丘1号窯式 ハケ塗り	25-3
43	土師器	高台付環	(12.8)	6.2	(8.0)	AHI	35	普通	にぶい褐	S2G 底部外面回転糸切り後ナデ 酸化焙焼成	
44	灰釉陶器	塊	(14.6)	[3.0]	—	IK	5	良好	灰白	S2G 東濃産 大原2号窯式 漬掛け	25-3
45	土師器	羽釜	(20.2)	[7.3]	—	CEHIK	20	普通	にぶい橙	S2G ロクロ整形	
46	須恵器	高台付環	—	[2.0]	(6.4)	AEHIK	70	普通	褐灰	X2G 底部外面回転糸切り 酸化焙焼成	
47	灰釉陶器	塊	—	[2.3]	(5.1)	IK	15	良好	灰黄	表採 東濃産 虎渓山1号窯式 漬掛け	25-3
48	石製品	権鎌	長さ3.9	幅2.9	厚さ1.5	重さ38.8	石材:凝灰岩			U2G 扁平な四角柱 穿孔正面	26-3



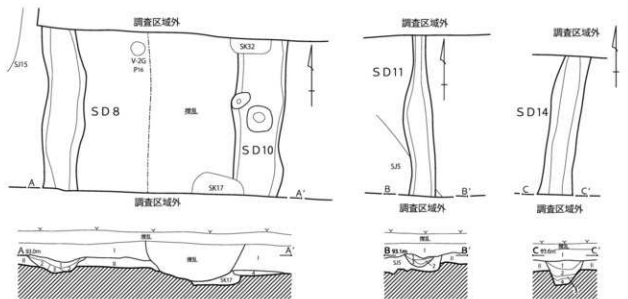
第59図 第1～7号溝跡

南側に隣接する旧児玉町調査区内 (A地点) で検出されたSD2と同一の溝跡と推定される。この溝跡は、A地点の中でクランク状に屈曲して南に続いていることが確認されている。

この他に土塊状の小規模な第3号溝跡や、調査

区内を斜めに走行する第1・5号溝跡がある。第5号溝跡は南側に隣接するA地点にも続いており、SD6が該当する。

遺物を出土するものがほとんどなく、時期の判明するものはないが、重複する住居跡や土塊を壊



- I 暗褐色土 浅間A軽石粒子多量混入（耕作土）
II 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入

- SD8・10
1 暗褐色土 浅間A軽石粒子多量混入
2 暗褐色土 浅間A軽石粒子多量混入
3 褐色土 ロームブロック・炭化物粒子少量混入
4 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ローム粒子少量混入

- SD11
1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量混入
2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量混入
3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量混入

- SD14
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量混入
2 暗褐色土 ローム粒子少量混入
3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入
4 暗褐色土 ロームブロック少量混入

第60図 第8・10・11・14号溝跡

すことが多く、埋土中に天明3年（1783）の浅間A軽石を混入するものが大半であることから、近世以降のものであろう。同様に、溝跡の性格についても明確にしないが、流水の痕跡のあるものがないことから、何らかの区画を目的とした溝が多いと考えられる。なお、第9号溝跡は精査の結果、現代の攪乱であることが確認されたため欠番扱いとした。

イ. 土壌

中・近世の土壌は28基検出した。調査区の全域に広く分布し、特定の集中箇所はみられなかった。平面形は円形、楕円形、方形、長方形、不整形等がある。このうち円形と楕円形が大半を占める。遺物を出土するものがほとんどなく、時期は明確にしない。ただし、埋土中に浅間A軽石を含むものも多く、近世以降の所産と考えられる。なお、第35号土壌は欠番である。

第11号土壌（第61図）

調査区西側のQ-2グリッドに位置する。第7

号溝跡の西側に接し、南半分が調査区域外にかかる。円形系の平面形と考えられるもので、規模は東西長0.51m、深さ0.43mである。埋土上層に浅間A軽石粒子を多量に含んでいた。

遺物はまったく出土しなかった。

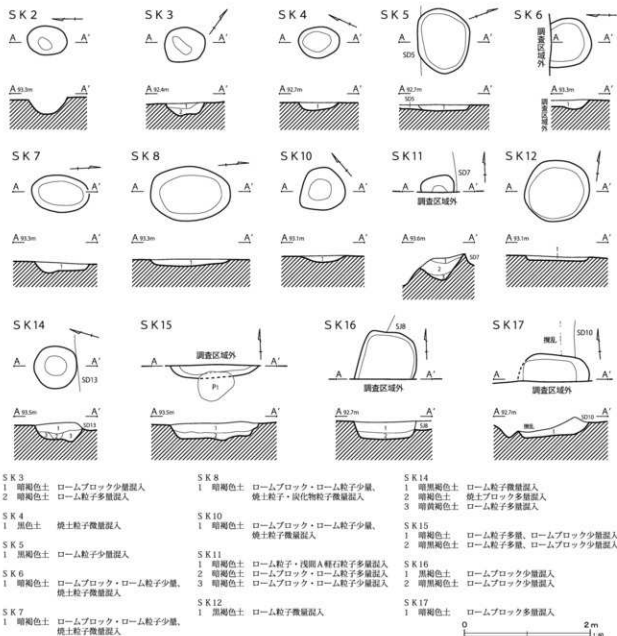
第19号土壌（第62図）

調査区中央部のS-2グリッドに位置する。第3号住居跡の埋土を掘り込んで構築されていた。平面形は円形で、直径0.52m、深さ0.25mである。内部に拳大の円礫が数個充填されていた。円礫の状況は意図的な石組遺構とはいえ、おそらく農作業などの耕作の妨げになる石をまとめて埋めたものであろう。

伴出遺物がなく、時期については不明である。

第24号土壌（第62図）

調査区中央部東寄りのW-2グリッドに位置する。第7号住居跡のカマドを一部壊す。平面長方形で、規模は長軸長2.17m、短軸長1.32m、深さ0.16mである。長軸方位はN-10°-Eを指す。



第61図 第2～8・10～12・14～17号土坑

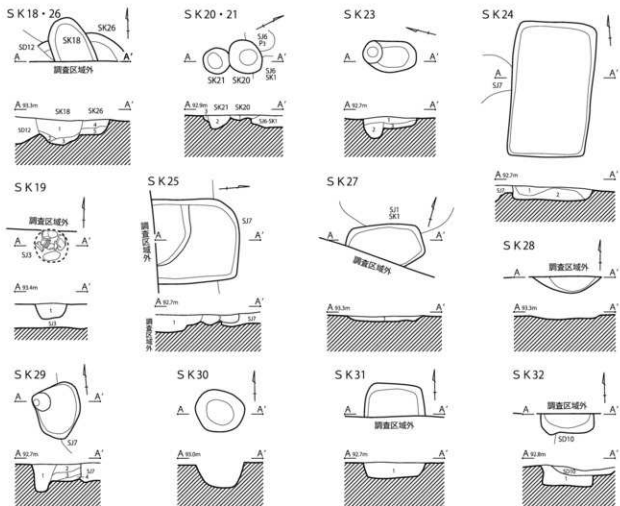
南西側には同規模、同形態と考えられる第25号土坑が軸方向を揃えて隣接する。貯蔵用の芋穴であろう。

第29号土坑 (第62図)

調査区中央部東寄りのV-2グリッドに位置する。第7号住居跡を壊して構築されていた。平面不整形で、西壁際に柱痕状のピットがある。規模は長軸長0.92m、短軸長0.78m、深さ0.44mである。長軸方位はN-21°-Eを指す。

ウ. ピット

ピットは31基検出された(第21図)。調査区全体に広く分布している。とりわけ第6号住居跡周辺、および第7号住居跡東側に集中する傾向がうかがわれた。直線的な配列状況を示すものもあるが、掘立柱建物跡や柵列として把握することはできなかった。遺物を出土するものではなく、時期を明確にしないが、埋土に浅間A軽石粒子を含むことから近世以降のものが多い。



- S K 18・26
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物粒子微量混入
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子微量混入
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子微量混入
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子微量混入
 - 5 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子・焼土粒子、白色粒子微量混入

- S K 19
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入

- S K 20・21
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量混入
 - 3 暗褐色土 ロームブロック少量混入

- S K 23
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子少量、ロームブロック微量混入

- S K 24
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量混入
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量混入

- S K 25
- 1 暗黒灰色土 ローム粒子多量、ロームブロック・焼土粒子少量混入
 - 2 暗黒灰色土 ローム粒子少量混入、ロームブロック少量混入

- S K 27
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子多量、焼土粒子少量混入

- S K 29
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量混入
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量混入
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子微量混入

- S K 31
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量混入

- S K 32
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量混入



第 62 図 第 18～21・23～32 号土坑

エ. グリッド出土遺物 (第63図)

1 は器壁の厚い作りのかわけである。口唇部は丸く収められる。近世の所産であろう。



第 63 図 グリッド出土遺物

第 27 表 グリッド出土遺物観察表 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師瓦土器	かわかけ	(9.6)	[2.2]	—	ACH	10	良好	にぶい橙	O2G ロック整形	

VI 青柳古墳群南塚原支群第1次調査

1. 調査の概要

南塚原支群第1次調査区は、大塚稲荷古墳の南西約300mに位置し、青柳分水工で分岐した児玉幹線と上里幹線によって南と北を画され、東を北流する金鑽川によって囲まれた、標高106mの台地上に立地している(第65～67図)。昭和44年に北部用水の建設工事に伴って発掘調査された南塚原6号墳の東側に隣接する地点である。調査面積は1,240㎡である。

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の古墳跡(南塚原82・84・85号墳)3基、中・近世の溝跡4条、土壇33基、ピット381基である(第68図)。以下、調査の中心となった古墳跡と中世の遺構・遺物について概要をまとめることにする。

古墳跡の概要

古墳跡は、調査区南辺中央部に南塚原82号墳、南東隅に南塚原84号墳、北西隅に南塚原85号墳の3基が検出された。いずれも墳丘部分は既に削平されており、周溝のみの確認である。埋葬施設については明確でないが、周辺の調査古墳の多くが横穴式石室をもつことから、横穴式石室の可能性が高い。なお、南塚原82号墳は調査以前にその存在が知られていたが、他の2基は今回の調査により新たに存在が確認されたものである。

南塚原82号墳は調査区にかかる墳丘の北半分を調査した。この古墳の大きな特徴は、周溝が全周せず、西側のみ規模の大きな周溝を掘削していたことである。周溝の規模は上幅約13.7m、確認面からの深さ約1.5mである。さらに、墳丘側の北西斜面には人頭大の円礫が敷設されていた。円礫と地山であるローム層の間には黒色土が充填されており、裏込の小礫などはみられず、基本的には一重であった。また、円礫の検出状況を見ると隙間なく敷きつめられた部分もあるが、大部分は墳丘斜面部から流失、落下したような状態で、基

底石(根石)や区画石列等は確認できなかった。このように葺石のような明確な基底石や区画石列等をもたず、雑然と周溝の壁面に円礫を貼り付けた状態であることから、ここでは葺石と区別する意味で「貼石」と呼ぶこととした。

墳丘の南半分が調査区域外にかかるためその内容は明確でないが、部分的に周溝を深く掘り込み、さらに葺石状の石組を構築して、南西方向を正面として古墳を臨むように築造された墳丘構造であった可能性が高い。

南塚原84号墳は墳丘径約13mの円墳で、周溝の北西側に地山を掘り残した陸橋部が認められた。周溝の掘り込みは比較的明瞭であった。周溝から須恵器甕、円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

南塚原85号墳は、近接する南塚原82号墳と周溝の一部が重複した墳丘径約19mの円墳と推定される。しかし、調査範囲が狭く墳形や規模については不明点を残す。また西側に隣接する南塚原6号墳との位置関係についてもやや不明瞭で、本墳が南塚原6号墳に関連する周溝や墳丘盛土の採掘痕などの可能性も否定はできない。

中世の概要

中世の遺構は、南塚原82号墳を挟んで両側に延びる第1・2号溝跡、その北側に展開する土壇群とピット群が検出された。

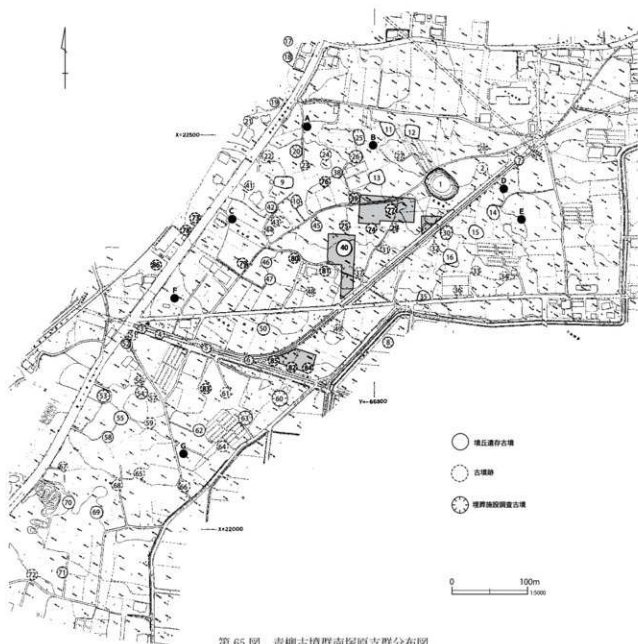
調査区南東端の第1号溝跡は、調査区南辺と軸を同じくするため、溝の南側立ち上りを検出することができなかった。また、第4号溝跡と接する部分から西は確認されていないので、おそらくここで南へ折れるものと考えられる。溝の中には人頭大の円礫が廃棄されており、その下層から15世紀末から16世紀初頭の内耳鍋の破片が出土した。

調査区南西端の第2号溝跡は、西端部で北へ直角に折れ、東は南塚原82・85号墳の周溝と接する



- | | | | | | |
|-------------|----------|------------|-----------|------------|---------|
| A 四軒在家支群 | B 元阿保支群 | C 関口支群 | D 桶竹支群 | E 白岩支群 | F 北塚原支群 |
| G 南塚原支群 | H 二ノ宮支群 | I 十二ヶ谷戸支群 | J 海老ヶ久保支群 | K 城戸野支群 | |
| a 元阿保稲荷神社古墳 | b 諏訪ノ木古墳 | c 中新里諏訪山古墳 | d 白岩鏡子塚古墳 | e 海老ヶ久保1号墳 | |
| f 城戸野20号墳 | g 大塚稲荷古墳 | | | | |

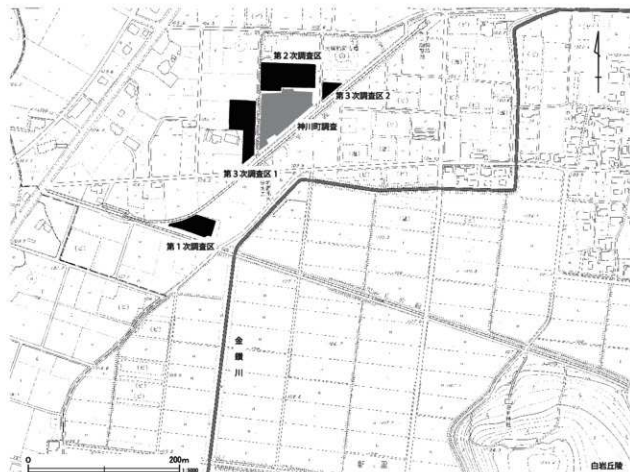
第64図 青柳古墳群分布図



第65図 青柳古墳群南塚原支群分布図

部分で、それぞれ調査区域外へと延びている。第2号溝跡では上下2層の敷石が検出された。下層敷石は、溝底面から10cmほど浮いた状態で径数cmから拳大の小礫を使用し、ほぼ溝幅で平坦に敷設されていた。この下層敷石は東半部で検出され、それ以西では確認されなかった。上層の敷石は、人頭大から、それ以上の大きな円礫が用いられていた。敷石上面を平坦に整えるように敷設されていることから、道路として機能していた可能性も考えられる。敷設幅は下層と同様、溝幅と同じで

あるが、上層敷石は東流するに従い軸を南にずらしており、下層敷石の軸との間には若干のずれが生じていた。下層と上層の間はロームブロックを混入した暗褐色土と小礫が充填されていた。また、小礫による下層敷石が検出されなかった西半部は、小礫の代わりに上層と同様の円礫が下層まで続いていた。西側の屈曲部に近い位置からは、上層の小礫に混じて五輪塔の空風輪3点と火輪1点が出土した(第80図)。出土状況から円礫と共に廃棄されたものと考えられる。



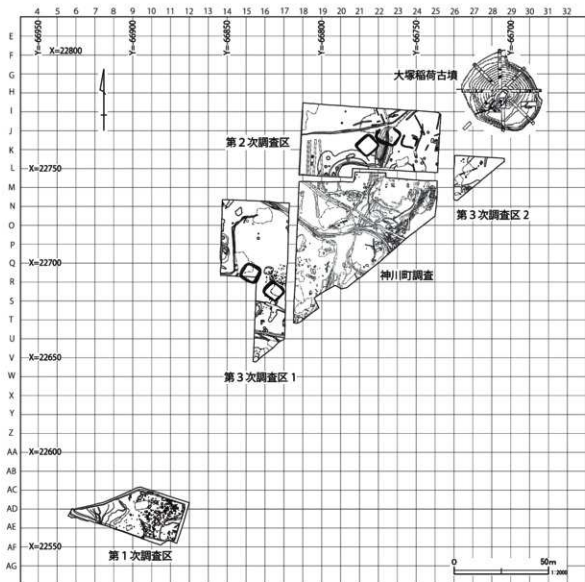
第66図 青柳古墳群南塚原支群周辺地形図

空風輪は、いずれも一石造で、首部に縦方向の1条の刻みをもつものである。梵字は石質や風化のため明瞭でないが、空風輪の刻みを入れた一面にのみ刻まれていた。空輪には東方発心門の「キヤ」、風輪には「カ」とみえる種字が残る。角閃石安山岩製の4・5は断面扁円形で、空輪は横長の宝珠形である。これに対し砂岩製の6は断面円形で、空輪が縦長の宝珠形を呈する。火輪は頂部に空風輪を受けるための柄穴が穿孔されている。底面は平坦で、屋根部はわずかに反りをもち、梵字は刻まれていない。このうち6の空風輪と7の火輪は石質が硬質の砂岩で良く似ていたことから一組になるものと思われたが、風輪の柄と火輪の柄穴の大きさが異なる。出土した五輪塔は小型化が進み、断面が扁平化していることから、五輪塔の造立が増加する室町時代末期から戦国時代の

製品と考えられる。また首部にみられる刻みも五輪塔の正面を意識した「しるし」として、製作段階に付けられたもので、製作過程の省力化に連動する流れのなかで出現したものと考えられる。

この他に土壌からは六道銭と考えられる渡来銭（永楽通寶・宣徳通寶）や灯明皿に使用されたかわらけ、小瓶等が出土しており、人骨の出土はなかったが墓塚と考えられるものも多い。また輪の羽口や鉄滓など小鍛冶関連の遺物も目につく。

このように部分的な調査ではあったが、15世紀後半から16世紀前半の遺構・遺物が比較的多くまとっており、調査区周辺に中世の屋敷跡を想定し得る傍証資料が得られた。しかし、現状では微地形や土地利用のあり方に、屋敷跡の存在を示す地割の痕跡をうかがうことは難しく、今後の周辺における調査の進展に期待したい。



第67図 青柳古墳群南塚原支群調査区位置図

2. 遺構と遺物

(1) 旧石器・縄文時代

旧石器・縄文時代の遺物は、中世のピットに混入した槍先形尖頭器、および縄文時代中期の縄文土器、石器等がある。

ア. 単独出土石器 (第69図)

1は槍先形尖頭器である。基部中央から先端側を欠し、基端部もわずかに折損する。平面形は柳葉形で、裏面が扁平で正面に稜線をもつ。石材は玉髓である。現状における最大幅2.1cm、厚さ8.5mm、重量5.0gを測る。

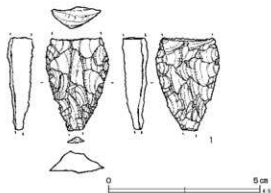
イ. グリッド出土遺物 (第70図)

調査区内から出土した縄文時代の遺物を第70図に掲載する。

1は中期中葉の阿玉台式の頸部である。隆帯に沿って単列の角押文が巡る。胎土に多量の雲母粒子および石英の小礫が含まれる。2は中期後葉の加曾利EⅠ式で、口縁部文様帯と頸部無文帯の境界部分である。3・4も同時期の胴下半部で、地文条線上に隆帯による懸垂文がみられる。5・6は加曾利EⅢ式の口縁部文様帯である。5は扁平



第 68 図 南塚原支群第 1 次調査区全測図



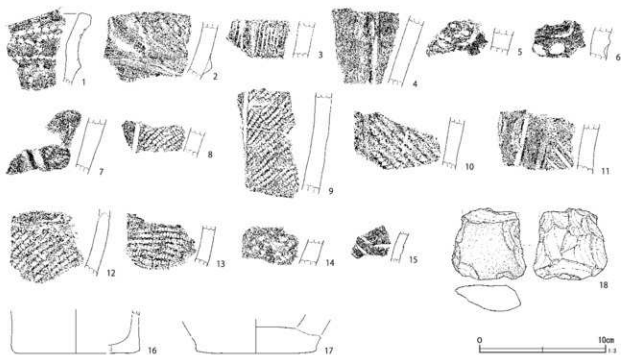
第 69 図 グリッド出土物 (1)

な隆帯による区画内部に円形竹管状工具による刺突文が充填される。6 は隆帯の交点に指頭による円形の刺突が施される。7 ～11 は同時期の胴部破片である。7 は両側に沈線のなぞりを伴う扁平

な隆帯がみられる。地文はRLR複節の縄文である。8 ～10 は磨り消し懸垂文で、地文は8・9がRL、10がLR単節の縄文である。11 は3本沈線による磨り消し懸垂文で、矢羽根状の沈線を地文とする。12 ～14 は地文のみの破片で、いずれも中期後葉に属するものとみられる。地文はいずれもRL単節縦位回転の縄文が施文される。12 は上部に輪積み痕が観察される。

15 は中期後葉の唐草文系の土器であろう。やや薄手の器壁で、無文地に矢羽根状の沈線が施文される。16・17 は底部の破片で、いずれも中期の土器と考えられる。16 は胎土に雲母粒子と多量の砂を含んでおり、唐草文土器の可能性はある。

18 は打製石斧で、刃部のみ残存する。石材は結晶片岩とみられる。



第70図 グリッド出土遺物(2)

(2) 古墳時代

ア. 古墳跡

南塚原82号墳(第71～73図)

調査区中央部のA C・A D-6～8、A E-8、A D・A E-9グリッドに位置する。西側に南塚原85号墳、東側に南塚原84号墳が隣接し、南半分は調査区域外にかかる。調査以前に墳丘は既に削平されていたが、耕地整理前の地形図に地影れ状の高まりを示す等高線が描かれていることから古墳の所在が想定されていた。調査の結果、西側のみ大規模な周溝を掘削した直径約19mの円墳であることが明確となった。

西側周溝は、隣接する南塚原85号墳と一部重複し、最大幅13.68m、確認面からの深さ1.48mの規模の大きなものである。また、周溝の墳丘側斜面部には人頭大の円礫を用いた貼石が部分的に施されていた。これに対し、墳丘東側には明確な周溝が当初から掘削されていなかったようである。ただし、墳丘の裾を巡るように中世以降に掘削された第4号溝跡の存在を勘案すれば、墳丘の大きさ

をある程度うかがうことができる。遺物は円筒埴輪と形象埴輪の破片が少量出土した。

出土遺物(第73図) 1～5は円筒埴輪の破片である。外面調整は1次調整タテハケのみである。

6～12は形象埴輪の破片である。6は盾面ないし靴の鱗部の破片であろう。外面に線刻による三角文と刺突文を残す。7は外面に環状の剥離痕と直線的な切り込みを2箇所にもつ。8～10・12は外面に幾何学的な線刻文を施した板状の破片である。器種を特定できないが、鬚などの器材の破片であろう。11は下端に突帯を巡らした板状の破片である。おそらく家形埴輪の壁体部であろう。

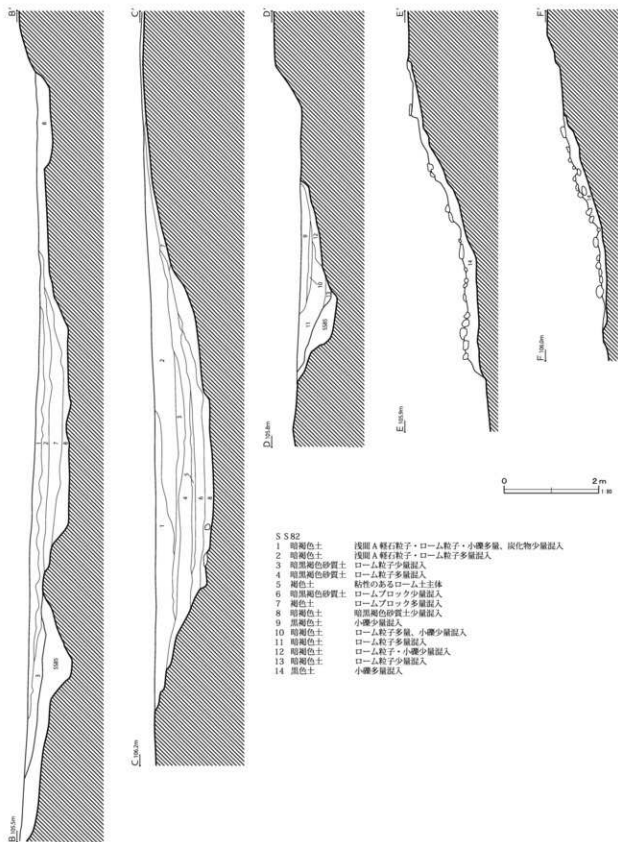
時期 周溝の墳丘側斜面部に貼石を施し、周溝を含めると約29mの大規模な古墳と想定されることや、埴輪を樹立していた可能性もあることから、6世紀後葉から末葉の築造と考えておきたい。

南塚原84号墳(第74・75図)

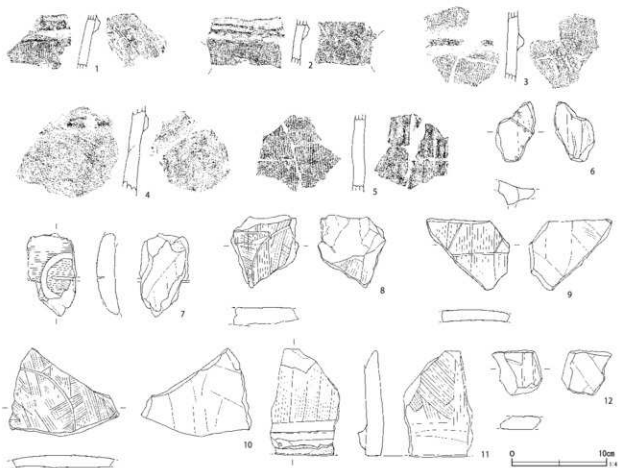
調査区南東隅のA D・A E-10・11グリッドに位置する。南側は第1号溝跡によって壊され、墳丘部分には第26～28号土壌が重複していた。



第71图 南塚原82号墳(1)



第72図 南塚原82号墳(2)



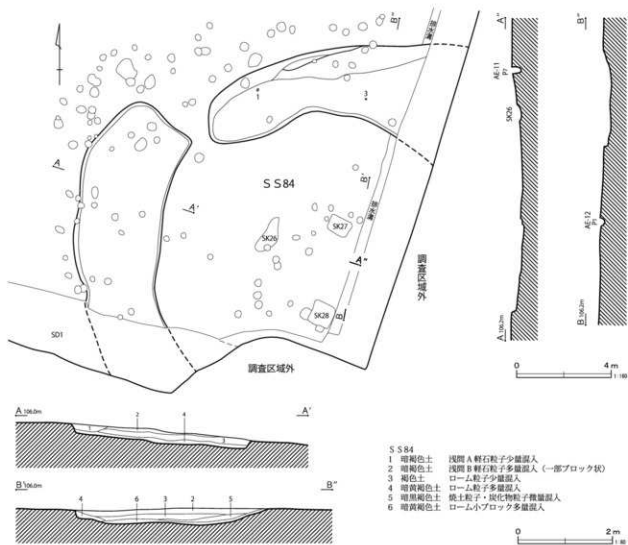
第73図 南塚原 82号墳出土遺物

第28表 南塚原 82号墳出土円筒埴輪観察表(第73図)

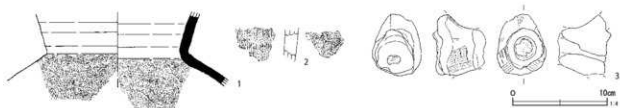
番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
1	円筒	—	—	—	ABEHLJ	普通	橙	破片	タテ 12	ナナメ 12	南塚原 突帯一部剝離	33-3
2	円筒	—	—	—	ABEHLJ	普通	橙	破片	タテ 13	ナデ	西周溝 透孔一部残存	33-3
3	円筒	—	—	—	ABEHLI	普通	明赤褐	破片	タテ 13	タテ 13~20	一括 2種類のハケ工具使用	33-3
4	円筒	—	—	—	ABEHLI	普通	明褐	破片	タテ 8	ナデ	西周溝 器面風化顕著	33-4
5	円筒	—	—	—	ABEHLJ	普通	赤褐	破片	タテ 9	ナデ	一括	33-4

第29表 南塚原 82号墳出土形象埴輪観察表(第73図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
6	靴 踵部	ABEHLK	普通	橙	ナデ	ナデ	西周溝 外面三角文および刺交文 トレンチ1 外面に環状の剝離痕および2箇所 に切り込みあり	35-2
7	不明 器財か	ACEHK	普通	明赤褐	ハケメ 11	ナデ	トレンチ1 外面線刻文 板状品	35-2
8	不明 器財か	ABCEHLK	普通	橙	ハケメ 10	ナデ	トレンチ1 外面線刻文 板状品	35-2
9	不明 器財か	ABCEHLK	普通	橙	ハケメ 8	ナデ	トレンチ1 外面線刻文 板状品	35-2
10	不明 器財か	ABEHLK	普通	にぶい橙	ハケメ 10	ナデ	南塚原 外面線刻文	35-2
11	家 壁体部	ABEHLK	普通	橙	タテハケ 7	ナナメハケ 7	西周溝 下端に突帯を添らす	35-2
12	不明 器財か	ABEHLK	普通	橙	ナデ	ナデ	西周溝 外面線刻文 板状品	35-2



第74図 南塚原84号墳



第75図 南塚原84号墳出土遺物

第30表 南塚原84号墳出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[7.9]	—	IK	20	良好	灰	№1 外面平行印き目接ナデ 内面無文当て具痕	33-5

第31表 南塚原84号墳出土円筒埴輪観察表 (第75図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
2	円筒	—	—	—	ABEHI	普通	橙	破片	タテ 8	ナナメ 8	B	

第32表 南塚原84号墳出土形象埴輪観察表(第75図)

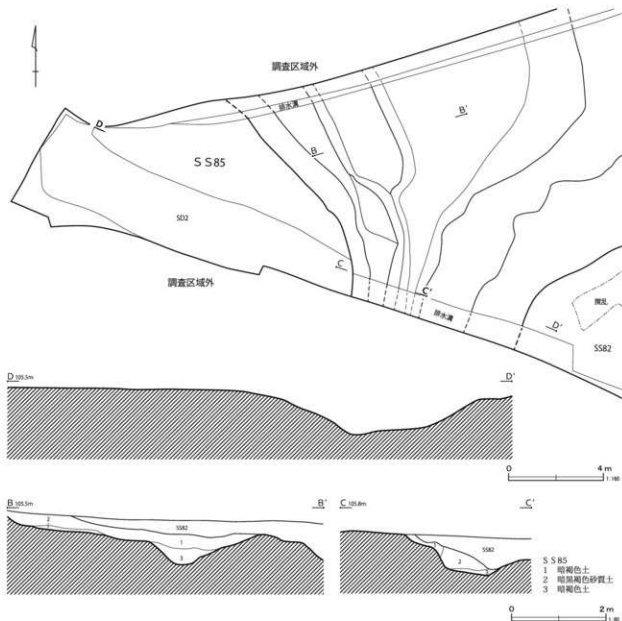
番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版	
3	馬	灰尾	ABEHKL	普通	明赤褐	ハケメ 10	ナデ	No.2 中空成形	33-6

墳丘部の東側と南側の大半が調査区域外にかかるため全容は明確でないが、北西側に陸橋部をもつ円墳と推定される。墳丘は既に削平され、埋葬施設の詳細は不明である。墳丘規模は直径約13m、周溝径約19.4mと推定される。陸橋部の開口方向はN-40°-Wを指す。

周溝の規模は北側で幅2.20~4.40m、深さ0.30

m、西側で幅3.68~3.84m、深さ0.24mである。遺物は周溝から須恵器甕、円筒埴輪、形象埴輪の破片が少量出土した。

出土遺物(第75図) 1は須恵器甕の破片である。胴部外面は平行叩き目後ナデを施し、内面は無文当て具痕が残る。口頸部は無文である。2は円筒埴輪の破片で、外面調整は1次タテハケのみ



第76図 南塚原85号墳

を施す。3は木芯中空成形の馬の尻尾である。

時期 出土物の少なさから判断して、本来埴輪をもたない古墳と想定される。ここでは7世紀前半の築造と考えておきたい。

南塚原85号墳 (第76図)

調査区南西隅のA C・A D-6・7グリッドに位置する。墳丘部分は調査区域外からL字形に延びる第2号溝跡によって大半が壊されていた。また東側には南塚原82号墳が隣接し、周溝の一部を共有していた。墳丘は既に削平され、埋葬施設等の詳細は不明である。

調査区の制約のため、その全容は明らかにし得ないが、検出した墳丘部分を元に規模を復元すると、墳丘径約19mの円墳と考えられる。周溝は、南塚原82号墳の周溝と重複し、一部壊されているため明確でないが、幅4.8m、深さ0.8mと推定される。

時期 遺物がまったく出土していないため、古墳の時期を特定することは難しいが、周溝の土層断面の観察から南塚原82号墳に先行して築造されたものと考えられる。

イ. グリッド出土遺物 (第90図)

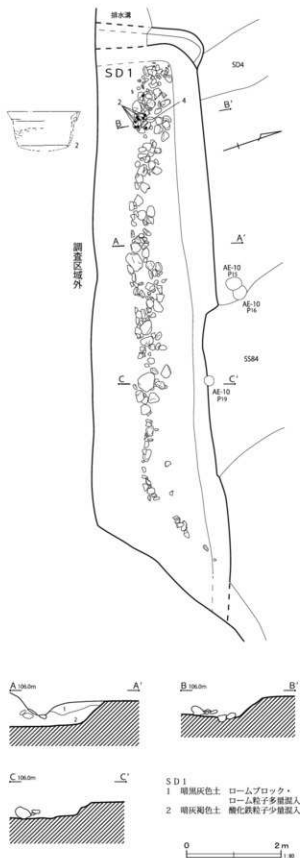
遺構外から出土した古墳時代から奈良時代の遺物を第90図1～4に掲載した。1は須恵器甕の口縁部片である。外面に沈線によって作出した突線区画の間に流麗な櫛描き波状文を施す。2は頸部に補強帯をもつ在地産の須恵器甕である。3は須恵器甕の胴部片で、外面に平行叩き目、内面に同心円文当て具痕を残す。4は第2号溝跡に混入していた奈良時代の平瓦片である。細かい斜格子の叩き目を凸面に残し、凹面は無文でナデ整形を施す。薄手の作りで、城戸野廃寺平瓦第2類(菅谷他1973)に類似する。

(3) 中・近世

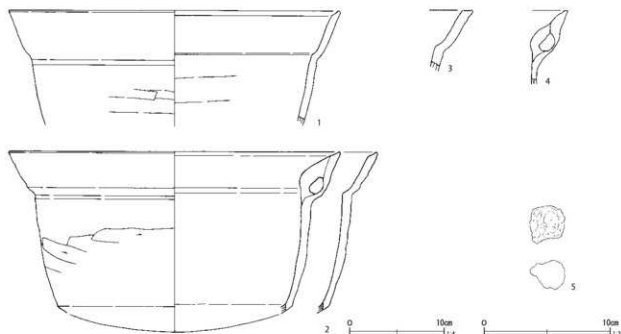
ア. 溝跡

第1号溝跡 (第77図)

調査区南側東奇りのA E-9・10グリッドに位



第77図 第1号溝跡



第78図 第1号溝跡出土遺物

第33表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	在地産土器	内耳鍋	35.0	12.2	—	AEHI	5	普通	黒褐	外面スス付着	33-8
2	在地産土器	内耳鍋	35.0	17.1	24.8	ABEHLJK	40	良好	灰黄褐	西端№2,3,5,7,8 外面スス付着	33-7
3	在地産土器	内耳鍋	—	6.5	—	ABCEHI	破片	普通	にぶい橙	SS82 器面風化顕著	
4	在地産土器	内耳鍋	—	7.9	—	ABEHU	破片	普通	にぶい黄褐	№4 外面スス付着	33-8
5	鉄滓	鉄塊系遺物	長さ2.5	幅2.7	厚さ2.2	重さ21.8				西端 球状の鉄の塊 表面錆化、木炭痕	35-3

置する。南塚原84号墳を壊し、東西方向に走行して、南塚原82号墳の手前で、ほぼ直角に曲がって南へ向きを変える。検出した溝跡の長さは12.18m、上幅2.14～2.80m、深さ0.57mである。後述する第2号溝跡とは、南塚原82号墳を挟み、対向した位置にあることから、両者は有機的な関連をもつ区画溝と想定される。おそらくは、北側に広がる土壌群と一体となったものであろう。

埋土からは大量の円礫が出土した。溝跡が埋まり始めた段階に、拳大から人頭大の円礫を廃棄したものである。また、それに混じって内耳鍋や鉄塊系遺物などが出土した。

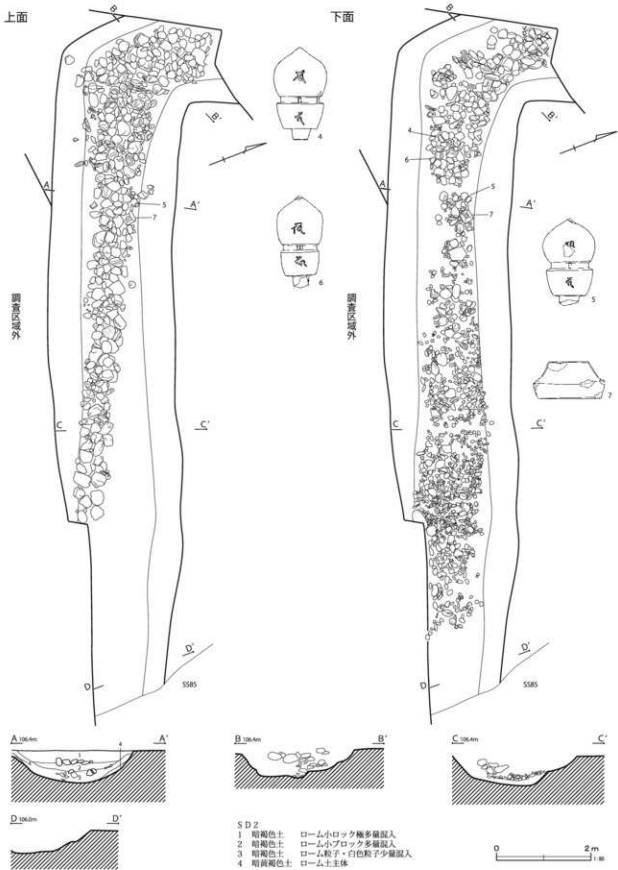
第1号溝跡出土遺物 (第78図) 1～4は深鍋形の内耳鍋である。2は底部を欠損しているが、胴部と底部の境に明瞭な稜がみられ、丸底形態と推定される。所産時期は15世紀末から16世紀初頭に

位置づけられる。5は球状の鉄の塊である。表面に木炭痕がみられ、全体に細かな凹凸をもつ。

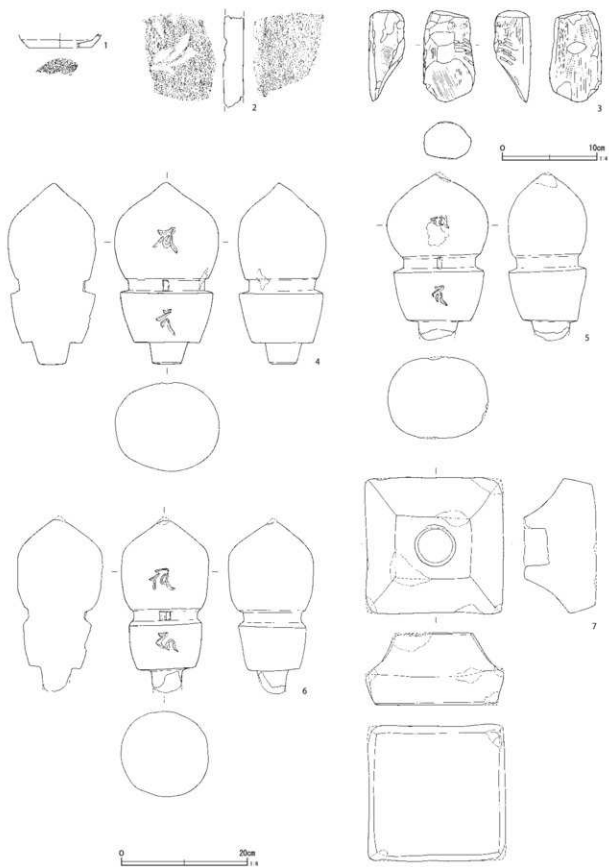
第2号溝跡 (第79図)

調査区南側西寄りのAD-5～7グリッドに位置する。溝跡は調査区西端部に北への屈曲部をもち、南塚原85号墳の墳丘部分を東西方向に横断しながら、既に埋没していた南塚原82号墳の周溝の中で墳丘部を避けるように、その手前で南へ向きを変え調査区域外に延びているものと推定される。検出された溝跡の長さは14.70m、幅2.44～2.80m、深さ0.38～1.10mである。埋土中には上下二層にわたって円礫が礫石状に敷設されていた。

第2号溝跡出土遺物 (第80図) 溝跡埋土中から五輪塔の火輪1、空風輪3が円礫と共に廃棄されていた。この他に、かわらけ、板破片、砥石などが出土した。



第79図 第2号冢跡



第80图 第2号溝跡出土遺物

第34表 第2号溝跡出土物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師質土器	かわらけ	—	[1.5]	(6.6)	ACEHK	20	普通	明赤褐	東側 底部外面回転糸切り	
2	石製品	板碑	長さ 9.7	幅 7.3	厚さ 2.1	石材:緑泥片岩				AD5G キリク 産座 白色斑点が目立つ	34-6
3	石製品	砥石	長さ 9.6	幅 5.6	厚さ 3.9	重さ 242.6 g	石材:凝灰岩			AD5G 側面工具取明瞭 焼熱により一部黒変	34-7
4	石製品	五輪塔	長さ 29.1	幅:空輪 16.6 × 14.0	風輪 14.8 × 13.5	重さ 4380				No.4 空風輪 角閃石安山岩製 完存	36-2
5	石製品	五輪塔	長さ 26.6	幅:空輪 14.3 × 12.5	風輪 14.4 × 12.4	重さ 3680				No.2 空風輪 角閃石安山岩製 基部欠損	36-3
6	石製品	五輪塔	長さ 27.5	幅:空輪 13.9 × 13.5	風輪 11.6 × 10.7	重さ 4780				No.3 空風輪 砂岩製 基部欠損	36-4
7	石製品	五輪塔	大きさ(横 22.0 × 縦 21.8)	高さ(下部 4.7/ 上部 6.8)	上面(横 12.2 × 縦 9.9)	円孔(6.5 × 6.2/ 深さ 4.1)	重さ 7510			No.1 火輪 砂岩製 一部欠損	36-5

第3号溝跡(第81図)

A D—9グリッドに位置する。第4号溝跡の北側に接する不整形な溝跡である。溝底面は概ね平坦であるが、掘り込みは浅い。規模は長さ7.48m、幅0.38~1.56m、深さ5cm程である。

第4号溝跡(第81図)

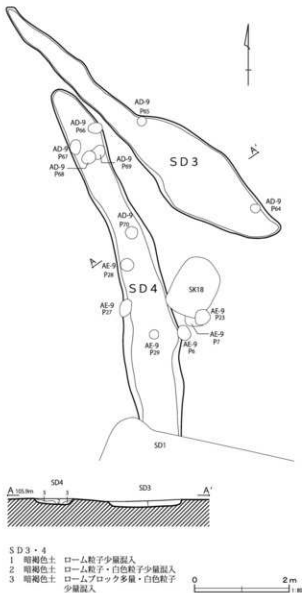
A D・A E—9グリッドに位置する。第1号溝跡、第18号土壇、ピット等と重複している。平面形は緩やかな弧を描いていた。規模は長さ5.65m、幅0.65~1.20m、深さ10cm前後である。

埋土の状態や遺構の重複関係から中・近世の溝跡としたが、前述したように南塚原82号墳の墳丘を意識した区画溝の可能性もある。

イ. 土壇

土壇は、調査区の中央部から東側を中心に33基検出された。重複関係にある土壇やピットに壊されるものが多い。土壇の平面形態は、長さ2.5~3.0mの長方形の土壇と長さ2m未満の長方形ないし方形の土壇が主体を占めている。特に、後者は壁面をほぼ垂直に掘り込む傾向がうかがわれる。こうした方形を基調とする土壇の分布は、A C—10グリッドを中心に、直径約20mの範囲にまとまっている。また遺物を伴うものは少ないが、渡来銭やかかわらけなどを出土したものがみられることから、土壇墓としての性格が考えられる。なお、かわらけの大半は、埋土上層から出土していることから、遺体を埋葬した後に供献されたものが多いと想定される。

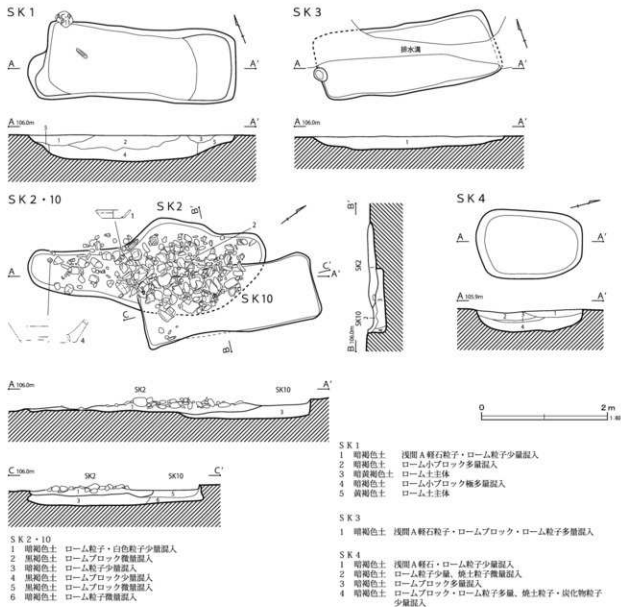
以下、遺物を出土した土壇を中心に詳述する。



第81図 第3・4号溝跡

第2・10号土壇(第82図)

A C—9グリッドに位置し、第10号土壇を第2号土壇が壊している。第2号土壇は平面不整



第82図 第1～4・10号土壌

形で、内部に拳大の円礫が一括廃棄されていた。円礫に混じって、灯明皿として使用されたかわらけ、片口鉢と考えられる鉢や摺鉢などの在地産土器、それに鞆羽口の破片が出土した。

第10号土壌は平面長方形で、規模は長軸長2.77 m、短軸長1.06 m、深さ0.20 mを測る。長軸方位はN-23°-Eを指す。

埋土中から口径7～8 cmのかわらけが2点出土した(第86図9・10)。9は内面に油煙が付着する。

第4号土壌 (第82図)

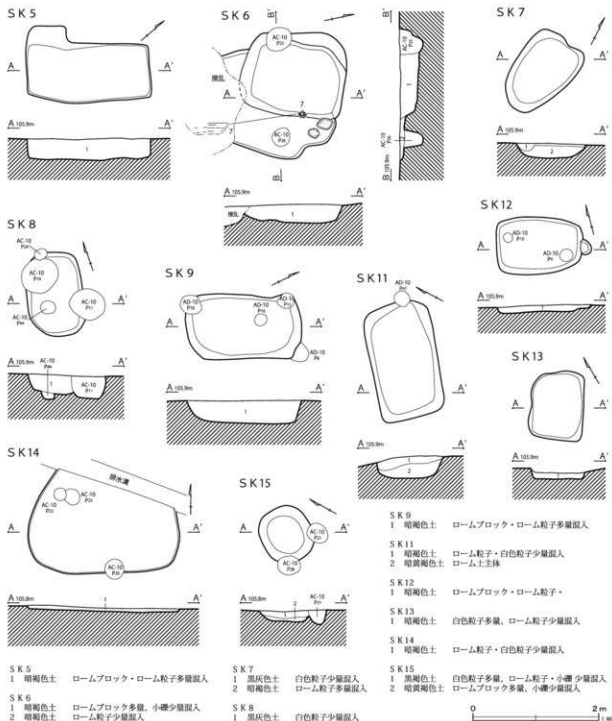
A C-9・10グリッドに位置する。平面形は隅

丸長方形で、規模は長軸長1.68 m、短軸長1.07 m、深さ0.33 mである。長軸方位はN-15°-Eを指す。埋土中からかわらけが出土した。

第6号土壌 (第83図)

A C-10グリッドに位置する。A C-10グリッドピット26を壊し、A C-10グリッドピット25に壊される。平面形は方形系で、規模は長軸長2.05 m、短軸長1.57～2.00 m、深さ0.28 mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。

埋土上層からかわらけが出土した。また詳細な記録はないが、小柄の柄の先端部が伴出している。



第83図 第5～9・11～15号土壌

薄い銅板を折り曲げ、刃側で合わせて鍛付けしたものである(第86図8)。

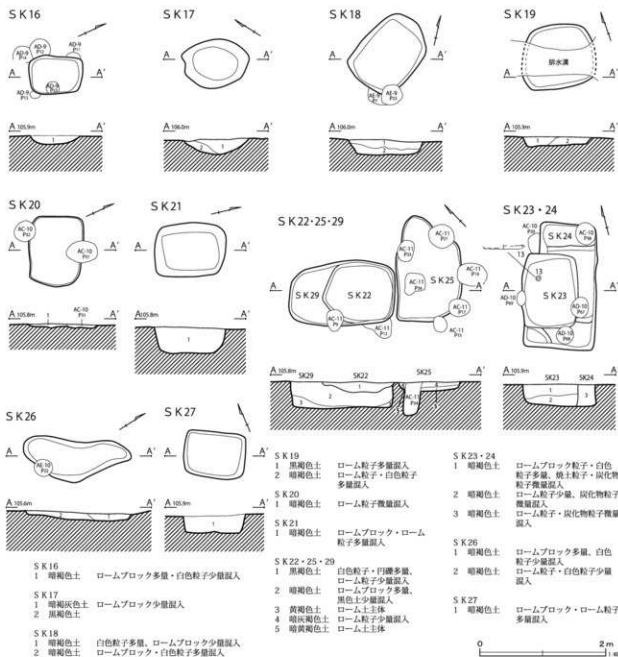
第21号土壌(第84図)

A C・A D-11グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸長1.13m、短軸長0.87m、深さ0.41mである。長軸方位はN-15°-Eを指

す。出土状況の詳細な記録はないが、永楽通寶4枚、宣徳通寶2枚が出土した。おそらく六道銭であろう(第87図)。

第23号土壌(第84図)

A C・A D-10グリッドに位置する。第24号土壌を壊し、A D-10グリッドピット67～69に壊



第84図 第16～27・29号土坑

される。平面形は長方形で、規模は長軸長1.17m、短軸長0.90m、深さ0.35mである。長軸方位はN-15°-Eを指す。遺構確認面および埋土からかわらけが3点出土した。

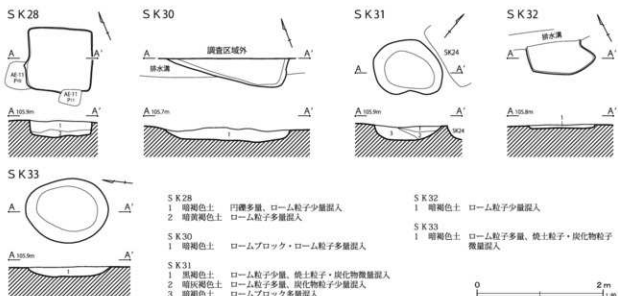
第31号土坑(第85図)

A D-10グリッドに位置する。平面形は略円形で、大きさ1.03×0.86m、深さ0.20mである。埋土から小型のかわらけが出土している。

ウ. 土坑出土遺物(第86図)

土坑から出土した遺物は、かわらけを中心とした在地土器、六道銭と考えられる渡来銭、太刀に伴う小柄(小刀)、鞆羽口などがある。

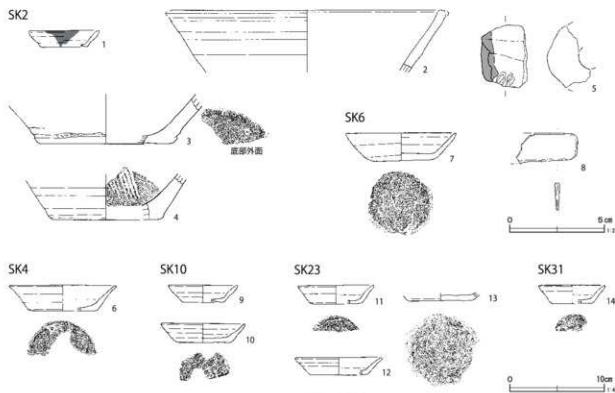
かわらけは全て底部回転糸切離しの「ロクロ製品」で、所謂「手づくね製品」はみられない。口径7～8cmの小型品と11cm台の中型品に区別される。1のかわらけには油煙が付着し、灯明皿に



第85図 第28・30～33号土坑

使用されたことが分かる。長方形の土坑（第4・6・23号土坑）から出土した中型品は、墓に供献されたものであろう。口径に対して底径の割合が大きく、口縁部が直線的に大きく開く特徴から15世紀末から16世紀前半に位置づけられる。第21号

土坑からは永楽通寶、宣徳通寶の明銭（第87図）が出土しており、15世紀後半以降に墓域化したことをうかがわせる。また第6号土坑からは小柄に付属する銅製の柄の一部が出土した。遺体とともに「守り刀」として副葬されたのであろうか。

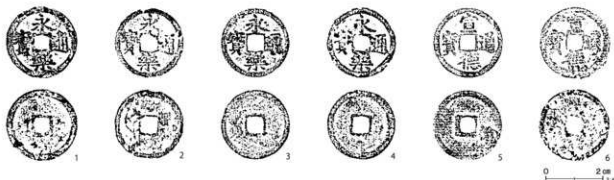


第86図 土坑出土遺物

第35表 土壌出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
1	土師質土器	かわらけ	(7.4)	1.7	(5.0)	CHK	20	普通	褐灰	SK10 No.13	内外面油煙付着 底部回転系切り	
2	在産土器	鉢	(28.6)	[6.2]	—	AEHJ	5	普通	にぶい黄褐	SK10 No.21	内面平滑	
3	在産土器	鉢	—	[5.3]	(14.4)	EGHIK	15	普通	灰	SK2	底部外面回転系切り	
4	在産土器	摺鉢	—	[4.9]	(11.8)	BCEIK	10	普通	灰	SK2 No.5	摺目7条一単位	
5	土製品	羽口	長さ[4.9] 孔径約2.5			EL	破片	普通	にぶい黄褐	SK6	一部還元 外面ナデ	34-8
6	土師質土器	かわらけ	(11.3)	[2.7]	(7.1)	ABHIK	30	普通	灰黄	SK4	ロクロ整形 底部調整不明	34-1
7	土師質土器	かわらけ	11.8	2.9	6.4	ABHU	65	普通	にぶい褐	SK6 No.1	ロクロ整形 底部回転系切り	34-2
8	銅製品	小柄	長さ[3.3] 幅1.5 厚さ0.3 重さ3.1							SK6	薄い銅板を刃側で合わせる	35-3
9	土師質土器	かわらけ	(7.2)	1.8	[4.3]	CEHI	20	普通	にぶい黄褐	SK10	内面一部油煙付着 底部回転系切り	
10	土師質土器	かわらけ	(8.8)	2.0	(5.5)	AEHIK	45	普通	にぶい橙	SK10 SK2	と接合 ロクロ整形 回転系切り	34-3
11	土師質土器	かわらけ	(8.0)	2.0	(5.4)	ACEHIK	30	普通	にぶい橙	SK23	底部外面回転系切り	
12	土師質土器	かわらけ	(9.2)	1.8	(6.0)	AHI	5	普通	橙	SK23	底部外面回転系切り	
13	土師質土器	かわらけ	—	0.8	6.8	AEHIK	80	普通	明黄褐	SK23	底部外面回転系切り	
14	土師質土器	かわらけ	(7.0)	1.9	(4.4)	AIK	5	普通	黒褐	SK31	底部外面回転系切り	

SK21



第87図 第21号土壌出土遺物

第36表 第21号土壌出土銭貨観察表 (第87図)

番号	銭貨名	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	備考	図版
		縦	横						
1	永楽通寶	25.05	25.15	1.00 ~ 1.30	2.7	真書	完形	明 初鑄年 1408年	36-1
2	永楽通寶	24.80	24.70	1.05 ~ 1.30	2.8	真書	完形	明 初鑄年 1408年	36-1
3	永楽通寶	24.70	24.49	0.90 ~ 1.30	2.4	真書	完形	明 初鑄年 1408年	36-1
4	永楽通寶	24.75	24.30	1.02 ~ 1.15	2.6	真書	完形	明 初鑄年 1408年	36-1
5	宣徳通寶	24.69	24.61	0.79 ~ 1.10	1.8	真書	完形	明 初鑄年 1433年	36-1
6	宣徳通寶	25.60	25.30	1.20 ~ 1.55	2.6	真書	完形	明 初鑄年 1433年	36-1

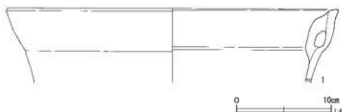
エ. ビット

調査区の中央部から東側にかけてビットを多数検出した(第88図)。総数381基を数える。概ね土壌群と分布が重なっており、古墳の墳丘に相当する部分ではやや疎らとなる。南塚原82号墳と南塚原84号墳の接近するA D-9・10グリッドに全体の約4割が集中していた。

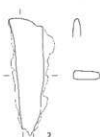
土層断面の観察では、柱痕のみられるものも多かったが、数が多く組み合わせを峻別することはできなかった。

遺物は少なく、わずかにA D-10グリッドビット13から内耳銅、A D-10グリッドビット87、A D-11グリッドビット20から不明鉄製品が出土しているにすぎない(第89図)。

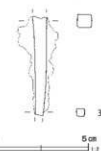
AD-10G ビット13



AD-10G ビット87



AD-11G ビット20



第89図 ビット出土遺物

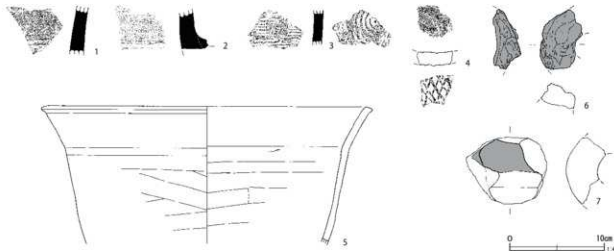
第37表 ビット出土遺物観察表 (第89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	在産土器	内耳鍋	(35.0)	[7.7]	—	ABHI	5	普通	褐灰	AD10G P13 還元焼成	
2	鉄製品	板状品	長さ[8.2]	幅1.8	厚さ0.4	重さ16.2				AD10G P87 刃部不明瞭	35-3
3	鉄製品	棒状品	長さ[5.2]	幅0.4~0.7	厚さ0.4~0.7	重さ13.0				AD11G P20 断面矩形 鉄釘か	35-3

オ. グリッド出土遺物 (第90図)

中世の遺物を第90図5~7に掲載する。5は在地産土器の内耳鍋である。体部内外面にナデを施し、外面にススが付着する。6・7は輪の羽口である。6は赤紫色に顕著に滓化した小孔徑羽口の

破片である。胎土に白色の小礫を多く含む。7は外面に帯状の還元部分がみられる羽口の破片である。出土遺構の特定はできないが、第2号土壌に廃棄された小鍛冶関連遺物であろうか。近傍に小鍛冶遺構の存在を類推させる。



第90図 グリッド出土遺物

第38表 グリッド出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[5.2]	—	EHIK	破片	良好	にぶい黄橙	SD2 東側 外面沈線区画 柳描き波状文	34-4
2	須恵器	甕	—	[4.2]	—	ABEHI	破片	良好	褐灰	SD2 西側 頸部補強帯裏 藤岡産	34-4
3	須恵器	甕	—	[3.9]	—	BEHI	破片	良好	灰白	AC9G 外面平行叩き目 内面同心円文当て具痕	
4	瓦	平瓦	厚さ1.4				破片	良好	暗青灰	SD2一括 凸面斜格子 凹面ナデ 8世紀後半	34-5
5	在産土器	内耳鍋	(35.0)	[14.5]	—	ABCEHI	5	普通	橙	SS82 トレンチ2, No.1 外面スス付着	
6	土製品	羽口	長さ[3.7]	孔径約2.5		EL	破片	普通	暗青灰	AC9G 滓化顕著 胎土に小礫を含む	34-8
7	土製品	羽口	長さ[8.6]	孔径約3.0		EIL	破片	普通	にぶい黄褐	AC9G 帯状に還元する 外面ナデ	34-8

VII 青柳古墳群南塚原支群第2次調査

1. 調査の概要

南塚原支群第2次調査は、上里幹線呑口調整池北側隣接地の調査である。大塚稲荷古墳の南西側に位置し、調査区の北側には南塚原13号墳が現存する。今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓3基、古墳時代後期の古墳跡2基(南塚原29・74号墳)、土壌1基、中・近世の溝跡14条、道路跡1条、土壌28基、ピット4基である(第91図)。調査面積は2,750㎡である。

この他に調査区の北西側から有樋尖頭器が単独で出土した。ちなみに隣接する調査区でも旧石器時代の石器が数点出土している。

第1次調査では槍先形尖頭器、第3次調査では剥片が出土した。周辺でも南塚原24号墳から尖頭器とナイフ形石器、隣接する中道遺跡第13地点からは掻・削器、中道遺跡第24地点からは剥片が出土している。児玉地域では本格的な旧石器時代の調査例はいまだ少なく、現状では表面採集や調査中に偶然発見されるような場合が多い。旧石器時代の様相を考える上では、まだまだ資料不足の感否めぬ。

方形周溝墓は、調査区の中央部の最高所を中心に3基が東西に並んだ状態で検出された。西側の第1号周溝墓は、一辺約8mの正方形の方台部で、

周溝の全周するタイプである。両側を挟まれた格好の第2号周溝墓は、第1号周溝墓と周溝を接するように占地する。長辺約9.6mの長台形の方台部で、3基の中では最大を誇る。東側に位置する第3号周溝墓は、長軸7m、短軸4.5mの長方形の方台部で、周溝は北西溝と南東隅部の2箇所が途切れている。唯一、南溝東端部から土師器壺が出土した。3基の築造順序は、遺物が少なく復元することは難しいが、第2号周溝墓の周溝を第1号周溝墓が避けていることから、第2号周溝墓が先行することは間違いない。第3号周溝墓との先後関係は明確にしないが、第2号周溝墓と主軸方向を揃えていることから、近接した時期幅の築造と考えられる。

古墳跡は、南塚原29・74号墳の北側半分が検出された(第97図)。南塚原29号墳は大きく攪乱されていたが周溝の一部が検出され、北側に大きく周溝が張り出していた可能性が強くなった。南塚原74号墳は幅広い周溝を巡らし、周溝外縁の一部が瘤状に大きく張り出す。周溝からは土師器杯・甕、円筒埴輪、形象埴輪、鉄鏃等が出土した。円筒埴輪や形象埴輪の特徴から、大塚稲荷古墳とほぼ同時期の6世紀後半の築造と推定される。

2. 遺構と遺物

(1) 旧石器時代

A. 調査区(第92図)

旧石器時代の調査は、有樋尖頭器の出土したI-19グリッドを中心に、2m×2mを基本とする調査区(テストピット)を11箇所設定し、ローム層の掘り下げを行った。

その結果、石器集中などは検出されず、遺構確認作業中に第3層上面(遺構検出面)から出土した有樋尖頭器(第92図1)以外に、遺物はまった

く出土しなかった。

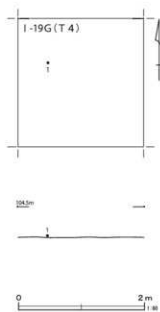
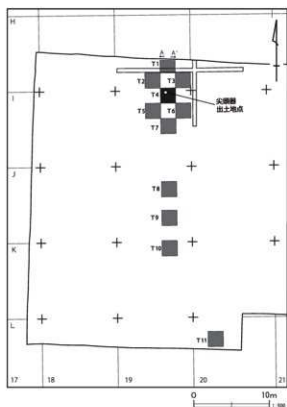
基本土層は第3層から第6層がローム層、第7層が砂礫層である。各調査区において確認面から70~80cmの深さで拳大の円礫を主体とする砂礫層が露出し、総体的に南から北、東から西に緩やかな傾斜が認められた。ローム層中には直径5cmほどの小礫が多く含まれ、火山灰起源と想定される白色粒子や赤色粒子(スコリア)の混入が観察された。



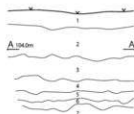
第91図 南塚原支群第2次調査区全測図

イ. 単独出土石器 (第92図)

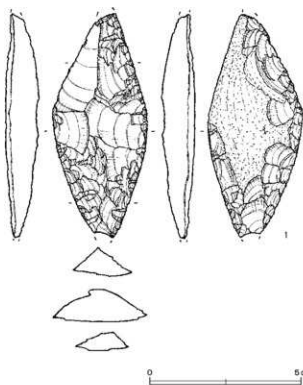
調査区北西側のI-19グリッドT4から単独で出土した。1は有樋尖頭器である。先端および基部の末端をそれぞれ欠失するが、ほぼ完形に近い。



裏面に広く節理面を残し、正面を中心に両側縁からの調整加工が施されている。現状における長さ7.3cm、幅3.1cm、厚さ1.1cm、重量18.9gを測る。石材は黒曜石である。



- | | | |
|-----------|---|-------|
| 1 表土 | 多量の浅層A 軽石 | ローム粒子 |
| 2 耕作土 | ロームブロック | |
| 3 褐色土 | ローム質 多量の白色粒子 赤色粒子 (スコリア) 砂粒子 | |
| 4 褐色土 | ローム質 少量の白色粒子 赤色粒子 (スコリア) 砂粒子 小礫 (φ1cm大) | |
| 5 褐色土 | ローム質 やや多量の小礫 (φ1cm大) 少量の白色粒子 わずかに砂っぽい感じ | |
| 6 にぶい黄褐色土 | ローム質 多量の小礫 (φ1~5cm) 少量の白色粒子 | |
| 7 砂礫層 | | |



第92図 旧石器時代調査区・出土遺物

(2) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されていないが、古墳跡の周溝埋土から打製石斧2点出土した。

ア. グリッド出土遺物 (第93図)

1は南塚原74号墳の周溝から出土した打製石斧である。刃部を節理面に沿って折損しているが、中段に緩いくびれを持つ短冊形の石斧である。基部背面に自然面を残し、腹面に主要剥離面を残す。両側縁からの打撃によりおおまかなプローションをつくりだした後に、右側縁を中心に細かな叩打が加えられている。石材は頁岩が用いられている。現状における長さ8.7cm、幅4cm、厚さ1.7cm、重量55.4gを測る。

2も南塚原74号墳の周溝から出土した打製石斧の基部破片で、折損後に再加工されている。もとは1に類似の短冊形の石斧であったとみられる。周縁からのごく荒い打撃により成形されている。石材は砂岩が用いられるが、表面に酸化鉄の付着が著しい。

(3) 古墳時代

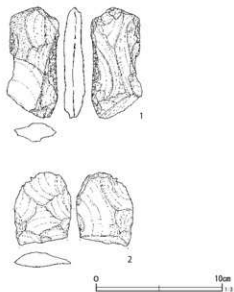
ア. 方形周溝墓

古墳時代前期の3基の方形周溝墓が、調査区中央部のJ-21~23グリッドを中心に東西に並列した状態で検出された。

第1号方形周溝墓 (第94図)

J・K-20・21グリッドに位置し、第2号方形周溝墓の南西隅部に近接する。南塚原74号墳、第5・11号溝跡と一部重複し、周溝が壊されていた。方台部は比較的形の整った方形で、長軸長8.26m、短軸長7.70mである。周溝を含めた規模は長軸長10.40m、短軸長9.68mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

周溝の全周するタイプで、周溝の規模は幅0.62~1.36m、深さ0.11~0.35mである。北西溝は幅広く、掘り込みも深い。一方、南東溝および南西溝は幅が狭く、掘り込みも浅くなっていた。北東溝は、近接する第2号方形周溝墓を意識してか東



第93図 グリッド出土遺物

隅部付近で溝幅を大幅に減じていた。明確な重複関係にはないが、築造順序を類推することができよう。

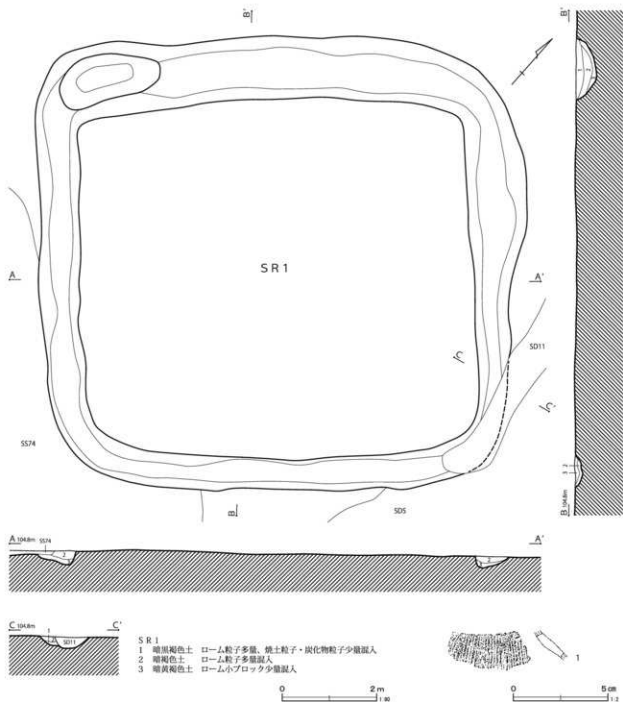
直接伴う遺物は出土していないが、重複する南塚原74号墳の周溝からS字状口縁台付鬘の胴部片 (第94図1) が出土しており、本遺構に伴う可能性が高い。

第2号方形周溝墓 (第95図)

I・J-21~23グリッドに位置する。第5・11号溝跡と重複し、大きく削平されていた。3基の方形周溝墓の中では最も規模が大きい。斜面部に立地しているため北隅部が削平されており、方台部の全容は不明であるが、やや歪んだ長台形と推定される。方台部の規模は長軸長9.64m、短軸の上辺長7.02m、下辺長8.32m、周溝を含めた規模は長軸長12.28m、短軸長10.70mに還元される。主軸方位はN-56°-Wを指す。

周溝は、北隅部付近が凹地に向かって緩やかに傾斜しているため検出できなかった。周溝の規模は幅0.62~1.64m、深さ0.1mである。周溝の掘り込みは全体に浅く、北西溝の中央部は土壌状に1段深く掘り込まれていた。

遺物はまったく出土していない。



第94図 第1号方形周溝墓・出土遺物

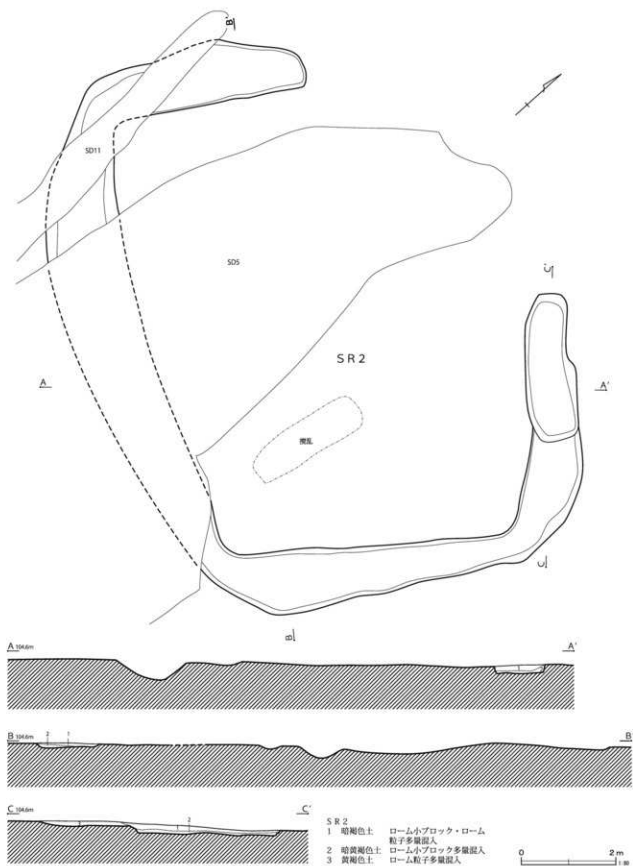
第39表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付篋	—	—	—	EHK	破片	良好	にぶい橙	SS74-2区 S字溝特有のクシ状のハケメ	

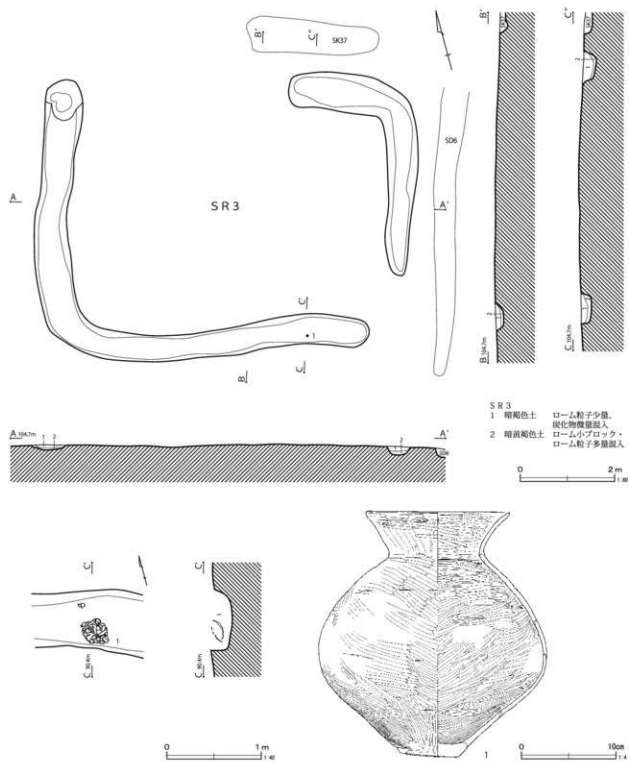
第3号方形周溝墓(第96図)

J-23・24グリッドに位置する。第2号方形周溝墓の東側に近接する小型の方形周溝墓であ

る。方台部は長方形を呈する。方台部の規模は長軸長6.70m、短軸長4.34m、周溝を含めた規模は長軸長7.85m、短軸長5.84mである。主軸方位は



第95図 第2号方形周溝墓



第96図 第3号方形周溝墓・出土遺物

第40表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(15.0)	26.1	6.3	AEGH1	75	普通	にぶい橙	No.1	43-4

N-75° -Wを指す。

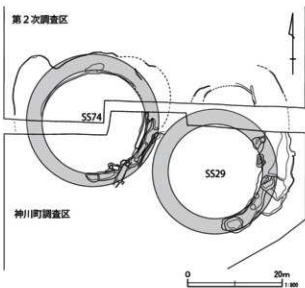
周溝の全周しないタイプである。L字形の溝を組み合わせ、北西隅および南東隅に地山を掘り残した陸橋部をもつ。周溝の規模は幅0.51~0.86m、深さ0.10~0.31mで、北・南溝は深く、東・西溝は浅く掘り込まれていた。溝底面には凹凸が認められた。

遺物は、南溝の東端部から土師器の壺(第96図1)が出土した。底面から10cmほど浮いた状態で、口縁部を周溝外側に向けて倒れていた。ほぼ完形の中型の単口縁壺である。頸部の括れが弱く、口縁部は直線的に開く。胴部は中位に最大径をもち、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。底部穿孔はない。時期的には五領式期の半ばから後半に位置づけられる。

イ. 古墳跡

調査区南側から南塚原29号墳と南塚原74号墳の2基が、東西に並列した状態で検出された。過去に神戸町教育委員会が実施した調査成果と、今回の調査成果を合成した平面図が第97図である。

それによれば、南塚原29号墳は墳丘径約20mの円墳に復元され、周溝の外側が大きく不整形に張り出した周溝を南東側から北側にかけて巡らしていることが判明した。また、南塚原74号墳は墳丘



第97図 南塚原29・74号墳

径約21.6mの円墳に復元され、南東側から北側にかけては比較的形の整った周溝を円形に巡らしているが、西側周溝は外側に大きく張り出す張出部をもつことが判明した。

南塚原29号墳(第98図)

調査区南側東寄りのL・K-22~24グリッドに位置する。第5号溝跡、第44・46~48・59・61号土壌等と重複し、それらに壊されていた。

前述したように今回の調査範囲は、南塚原29号墳の北側周溝が、大きく外側に張り出した部分に相当している。

調査の結果、弧状を呈する周溝の一部が検出された。周溝は、東側では上幅6.44mと幅広いが、北側では掘り込みが浅くなり、外側の立ち上がりが消滅していた。西側では溝幅を大きく減じていた。深さは全体に浅い。埋土は黒褐色土、暗褐色土を主体とする。こうした不整形の周溝は、墳丘盛土を確保するために周溝外縁部を不整形に土取りした痕跡の可能性が考えられる。

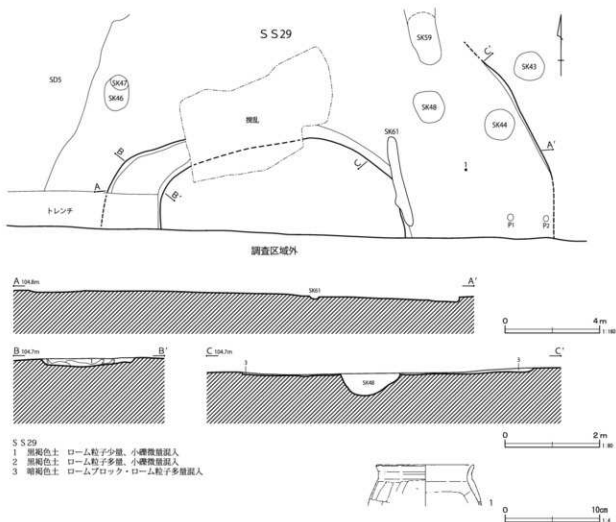
遺物は、土師器短頸壺の破片(第98図1)が東側周溝から出土した。全体の器形が分からないため所産時期を決め難い。小型壺に近い広口となる器形である。

時期 築造時期については、前回の調査でも埴輪等が出土していないことを考え合わせると、埴輪消滅後の7世紀代の築造の可能性が高い。

南塚原74号墳(第99・100図)

L・K-18~20、J-20、K-21グリッドに位置し、南塚原29号墳の西側に隣接する。第1号方形周溝墓を壊し、第5・18号溝跡、第53~55・57・58・60号土壌等によって壊されていた。

既に墳丘は削平されており、埋葬施設等は検出されなかった。規模は墳丘径約21.6m、周溝径約28.0mに復元される。周溝規模は幅4.52~5.48m、深さ0.15~0.38mである。前述したように周溝形態は、西側周溝が外側に大きく張り出した張出部をもった特異なものであった。周溝の



第98図 南塚原29号墳・出土遺物

第41表 南塚原29号墳出土遺物観察表(第98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	短頸壺	(10.3)	[4.3]	—	EHK	25	普通	橙	No.1	43-5

底面は概ね平坦に掘り込まれているが、墳丘側に長軸長4.72mの土壇状の浅い落ち込みが認められる。おそらく周溝の掘り方の一部であろう。

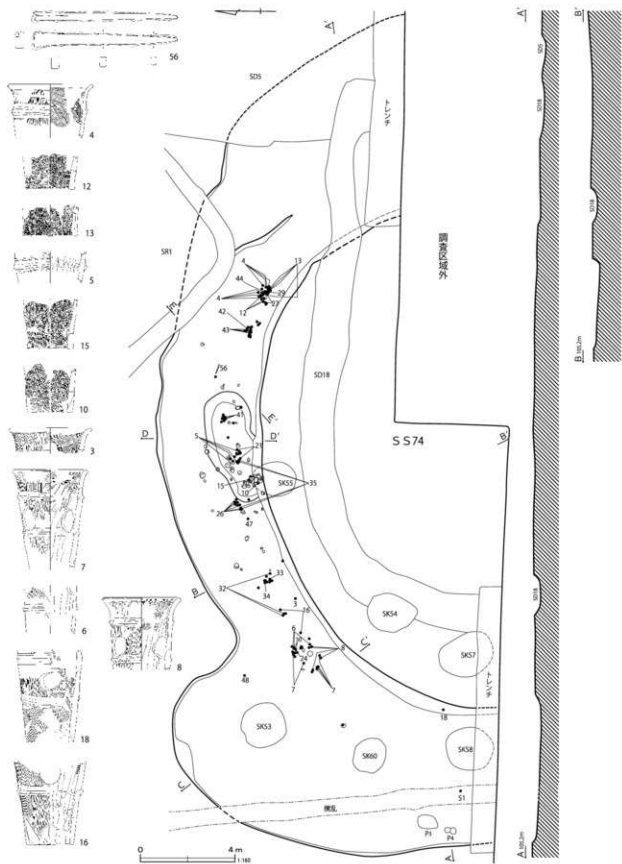
遺物は、周溝の埋土中から土師器環・甕、円筒埴輪、形象埴輪、鉄鎌・ノミ状鉄製品等が出土した。埴輪は原位置を留めるものではなく、すべて周溝の中に入れ込んだ状態であった。全体に墳丘側に片寄った位置から出土していることから、本来の樹立位置をある程度反映しているものと思われる。形象埴輪は小片が多く、樹立位置の復元は難しいが、概ね1・2区とした西側寄りの範囲から

出土した。

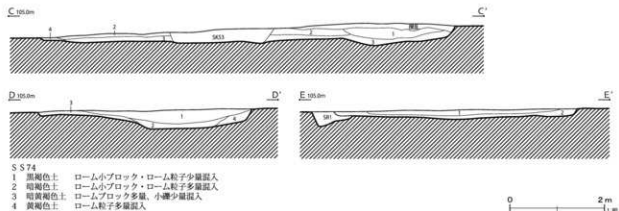
なお、一括遺物の取り上げ地区名は、周溝の土層観察用に設定した畔(ベルト)を境に、西から時計周りに1区(C-C')、2区(D-D')、3区とした。

ウ. 南塚原74号墳出土遺物(第101~104図)

土器(第101図) 1は、須恵器の坏蓋を模倣したいわゆる模倣坏である。復元口径12.3cmで、口縁部はやや外反する。6世紀中葉の所産と考えられる。2は土師器甕である。破片から図上復元したもので、接点はないが同一個体と判断される。



第99图 南塚原74号墳(1)



第100図 南塚原74号墳(2)

円筒埴輪(第101～103図) 全体の器形の分かる個体はないが、2条3段構成品が主体で、第1段の伸長化したプロポーションに還元される。底部調整、突帯、胎土・焼成・色調等の特徴によってA類からD類の4類に区分される。

A類(4～6、10～15、20～30、35、40～44)口縁部は短く外反するものが多い。突帯は断面低M字形で、透孔は円孔を段間の上寄りに穿つ。ハケメは目が細かく、条線は等間隔で浅い。底部調整は例外(10)もあるが、基本的にはない。器壁を薄く仕上げ、色調は赤褐色を基調とする。片岩粒の混入は多いが、白色針状物質の混入は少ない。

B類(3、7～9、16、31～34、36、38)口縁部は大きく外反する。突帯は断面狭台形で、透孔は円孔を段間の下寄りに穿孔する。ハケメはシャープで、条線に広狭がみられる。内面調整は右上がりに施されていることから、左利き工人の可能性が高い。底部調整は外面板押圧、内面ヘラケズリを施す。器壁は全体に厚く、色調は橙色を基調とする。胎土には小礫・赤色粒子の混入が目立つ。

C類(17～19、37、39、45)口縁部は緩やかに外反する。突帯は断面三角形と半鋭五角形のものがある。透孔は円孔を段間中央、ないし下寄りに穿孔する。ハケメは条線の幅が均一である。底部調整は外面板押圧、内面ヘラケズリを施す。全体に器壁が厚く、技巧的にも稚拙さが目立つ。色調は赤褐色から橙色の幅があり、胎土には角閃石

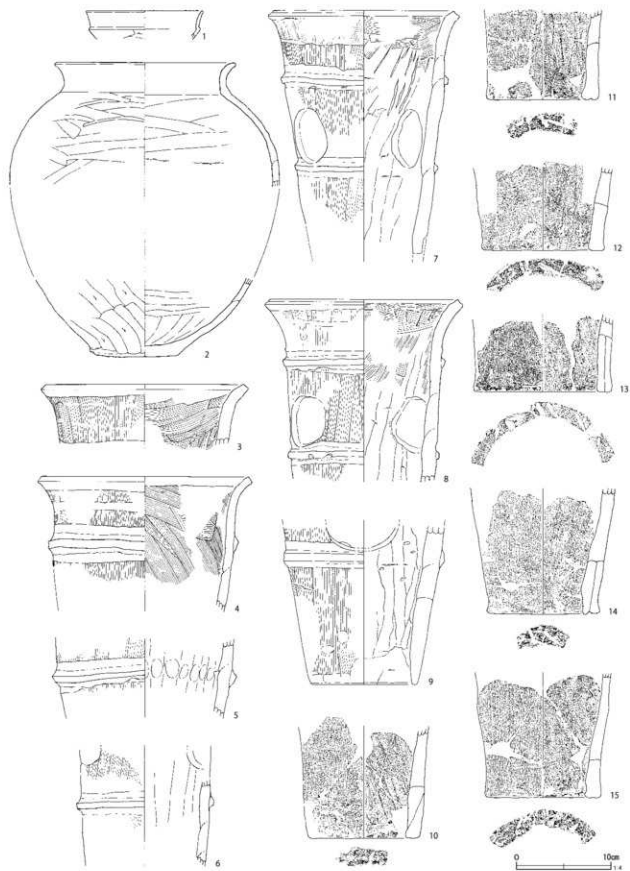
粒子の混入が目立つ。

D類(46)断面台形の突帯で、突出度が他よりも高い。透孔は段間の下寄りに穿孔されている。胎土・色調等の特徴はC類に類似する。

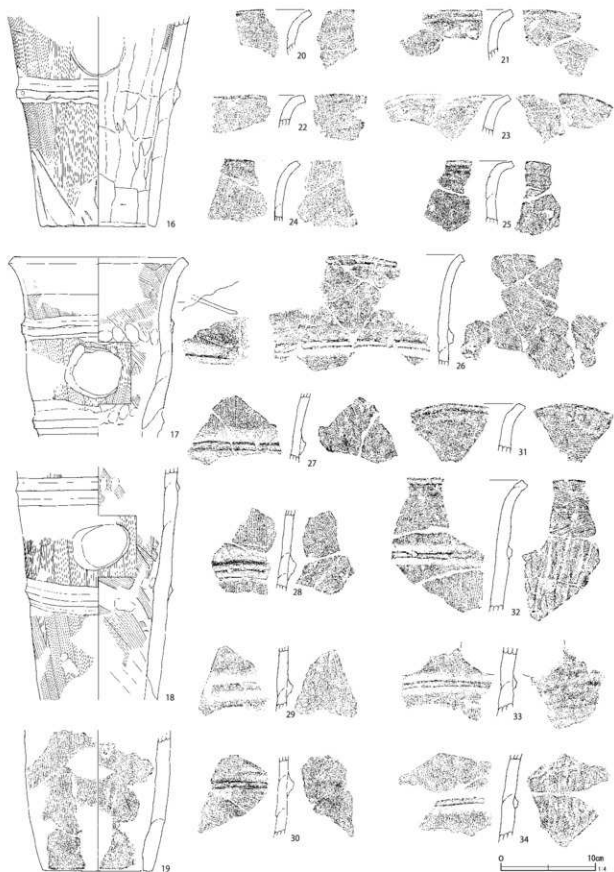
形象埴輪(第103図) 47は家の軒先部分であろう。48は鞆の鎌表現部の破片である。粘土紐の貼付により鎌を表現する。逆刺の表現は剥離のため不明である。49は不明器材としたが、板状の本体に突帯を貼り付け、その上に間隔をおいて大きめの円形粘土板を貼り付けていることから、家の障泥板の玉縁飾り、もしくは鞆の鎌表現部の縁飾りと推定される。50・51は大刀の勾金(護拳部)につけられた三輪玉である。52～54は板状の破片である。不明器材としたが、54は円形の透孔があげられていることから髷の可能性が考えられる。

鉄製品(第104図) 55はいわゆる長頸鎌である。鎌身部は片丸造角間長三角形式で、後期古墳から出土する鉄鎌としては最も一般的なものである。造りが華奢で軽量化していることから6世紀中葉から後葉に位置づけられる。56は北側周溝の溝底面から出土したノミ状鉄製品である。先端は丸く尖り、頭部は幅・厚さともに大きくなる。類例がなく、後世の混入品なのか、古墳に伴うものなのか判断に苦しむ。

時期 円筒埴輪にみられる底部調整および第一段の伸長化の特徴から、6世紀後葉を中心とする築造年代と推定される。



第101图 南塚原74号墳出土遺物(1)



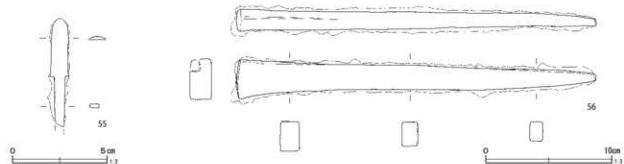
第102图 南塚原74号墳出土遺物(2)



第103図 南塚原74号墳出土遺物(3)

第42表 南塚原74号墳出土遺物観察表(第101・104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.3)	[3.0]	—	ACEHI	20	良好	橙	1区 張り部 須恵器环蓋模倣坏	43-6
2	土師器	甕	(18.0)	(31.0)	9.2	ABCEHI	20	普通	にぶい褐	1区 网上復元	
55	鉄製品	鉄鏃	長さ[5.7]	鏃身長3.1	鏃身幅1.0	厚さ0.2	重さ5.5			長頸鏃 片丸造長三角形形式 頸部を欠損する	46-3
56	鉄製品	ノミ状品	長さ[28.3]	幅3.1	厚さ1.7	重さ470.0				K20G №131	46-4



第104図 南塚原74号墳出土遺物(4)

第43表 南塚原74号墳出土円筒埴輪観察表(第101~103図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
3	円筒	22.0	[6.9]	—	ABEHJ	普通	橙	25	タテ 11	ナナメ 11	№29 内面上がりハケメ 左利き工人か	
4	円筒	[22.8]	[14.2]	—	ABCEH	良好	赤褐	45	タテ 13	ナナメ 13	№90,96,99,100,123,125~ 127,3区 最上段7.3	44-1
5	円筒	—	[8.4]	—	ACEHI	普通	赤褐	40	タテ 12	指ナデ	№54~57,62 突帯半載五角 形 器面風化	
6	円筒	—	[9.2]	—	ABEHJL	不良	明赤褐	30	タテ 12	指ナデ	№10,12,19,1区張出2区	44-2
7	円筒	[20.3]	[25.6]	—	ABEHJ	普通	橙	50	タテ 11	ヨコ・指ナデ 11	№4~7,9,21,1~2区 左利き工 人か 最上段7.5 中間段9.0	44-3
8	円筒	[21.0]	[19.3]	—	ABEHJL	普通	橙	40	タテ 11	ヨコ・ナナメ 12	№3,18~20,22,1~3区 最上段6.7 中間段9.8	44-4
9	円筒	—	[16.6]	(11.2)	ABEHJ	普通	橙	20	タテ 11	指ナデ	2区 底部外面板押圧 ヘラケズリ 最上段13.4	
10	円筒	—	[11.8]	(12.0)	ABEHI	良好	明赤褐	15	タテ 14	指ナデ	№50 基部外面板押圧痕	
11	円筒	—	[9.5]	(12.0)	ABEHI	良好	明赤褐	20	タテ 14	指ナデ	一括 基部幅6.0	
12	円筒	—	[8.8]	(13.0)	ABEHI	良好	赤	30	タテ 14	指ナデ	№93,95,112 基部幅5.0	
13	円筒	—	[8.2]	(14.7)	ABEHI	良好	明赤褐	50	タテ 14	指ナデ	№101,118~120 R接合	44-5
14	円筒	—	[13.2]	(12.0)	ABEHIL	良好	赤褐	20	タテ 14	指ナデ	SK53 基部R接合 基部幅 5.6	
15	円筒	—	[13.2]	(12.4)	ABEHI	良好	明赤褐	30	タテ 14	指ナデ	№51 基部内面掌紋圧痕	44-6
16	円筒	—	[22.1]	(12.2)	ABEHJL	普通	にふい褐	35	タテ 11	指ナデ	№24,28,2区 底部外面板押 圧 内面ヘラケズリ	
17	円筒	[19.2]	[18.2]	—	ABCEHIJ	良好	明赤褐	40	タテ 12	ナナメ 12	1区 口縁部外面ヘラ記号	44-7
18	円筒	—	[24.7]	—	ABEHJ	良好	橙	60	タテ 11	ナナメ 11	№133,1区 突帯三角形 中 間段11.0	44-8
19	円筒	—	[14.8]	(11.7)	ABEHJ	良好	明赤褐	15	タテ 12	指ナデ	1区 板押圧痕 ヘラケズリ	
20	円筒	—	—	—	ABCEHI	不良	橙	破片	タテ 13	ヨコ 13	2区 口縁部内面ヘラ記号か	45-1
21	円筒	—	—	—	ABEHI	普通	赤褐	破片	タテ 10	ヨコ 10	№52,63	45-1
22	円筒	—	—	—	ABEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 9	ヨコ 9	3区	45-1
23	円筒	—	—	—	ABEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 11	ヨコ 11	3区	45-1
24	円筒	—	—	—	ABEHI	不良	橙	破片	タテ 11	ヨコ 11	№15,2区 器面風化顕著	45-1
25	円筒	—	—	—	ABEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 13	ヨコ 13	3区 口縁部内面ヘラ記号	45-1
26	円筒	—	—	—	ABCEHIJ	良好	赤褐	破片	タテ 12	ナナメ 16	2区№43,46~49	45-1
27	円筒	—	—	—	ABCEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 18	ナナメ 18	№91,110 突帯低M字形	45-1
28	円筒	—	—	—	ABEHI	良好	赤褐	破片	タテ 11	ナナメ 11	1区 突帯半載五角形	45-1
29	円筒	—	—	—	ABEHIL	良好	明赤褐	破片	タテ 14	指ナデ	№115 突帯低M字形	45-1
30	円筒	—	—	—	ABEHI	不良	橙	破片	タテ 磨滅	指ナデ	№12,13 突帯低台形	45-1
31	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 12	ヨコ・ナナメ 11	周辺 左利き工人か	45-1

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
32	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 10	ナナメ 12	№.26,27,34 左利き工人か	45-2
33	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 12	指ナデ	№.33 器面風化	45-2
34	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 12	タテ・ナナメ 12	№.38, 周辺 突帯幅状台形	45-2
35	円筒	—	—	—	ABEHI	良好	明赤褐	破片	ナデ	指ナデ	№.43,53 透孔一部残存	45-2
36	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 11	ナナメ 11	1区 突帯幅状台形	45-2
37	円筒	—	—	—	ABEHJL	普通	橙	破片	タテ 12	ナナメ 12	1区 突帯半載五角形	45-2
38	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 11	ヨコ 11	1区, 南壁トレンチ 透孔一部残存 左利き工人か	45-2
39	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	明赤褐	破片	タテ 10	指ナデ	周辺 突帯低台形	45-2
40	円筒	—	—	—	ABCEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 12	指ナデ	3区 突帯低M字形	45-2
41	円筒	—	—	—	ABCEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 13	指ナデ	№.66,3区 透孔一部残存	45-3
42	円筒	—	—	—	ABCEHIL	良好	明赤褐	破片	タテ 14	指ナデ	№.79 突帯半載五角形	45-3
43	円筒	—	—	—	ABH	良好	明赤褐	破片	タテ 14	指ナデ	№.76,77,83,129,3区 突帯台形	45-3
44	円筒	—	—	—	ABCEHI	良好	明赤褐	破片	タテ 11	指ナデ	№.113,1区 突帯半載五角形	45-3
45	円筒	—	—	—	ABCEHIJ	普通	明赤褐	破片	タテ 11	指ナデ	1区 外面板押圧	45-3
46	円筒	—	—	—	ABCEHIJ	良好	明赤褐	破片	タテ 11	指ナデ	3区 突帯台形 透孔一部残存	45-3

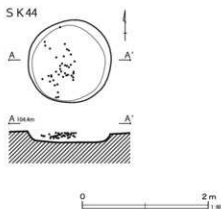
第44表 南塚原74号墳出土土象埴輪観察表(第103図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
47	家 軒先	AEHIK	普通	明赤褐	ハケメ 18	ナデ	№.41	46-1
48	器財 駒	AHIK	普通	明赤褐	ハケメ 1	ハケメ 12	№.1 粘土紐により軀身部を表現する	46-1
49	不明 器財	AEHI	普通	橙	ナデ	ナデ	2区 円板状の貼付剥離	46-1
50	大刀 三輪玉	ABEHI	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	周辺 粘土塊成形	46-1
51	大刀 三輪玉	ACEHIK	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	№.132	46-1
52	不明 器財	ABCEHI	良好	明赤褐	ナデ	ハケメ 12	2区 板状品	46-1
53	不明 器財	AHI	良好	明赤褐	ハケメ 12	ハケメ 12	板状品	46-1
54	不明 器財	ABCEHIJK	普通	明赤褐	ハケメ 10	ハケメ 10	1区 板状品 髷か	46-1

エ. 土埴

第44号土埴(第105図)

K-24グリッドに位置する。南塚原29号墳の北西側周溝の中にあり、周溝底面を掘り込んでいた。平面形は円形で、規模は径1.32m、深さ0.17mで



第105図 第44号土埴

ある。埋土中から土師器壺と考えられる細片がまとまって出土した。厚手の破片が多く、すべて胴部片であった。そのため器形を復元することができず実測図示できなかった。

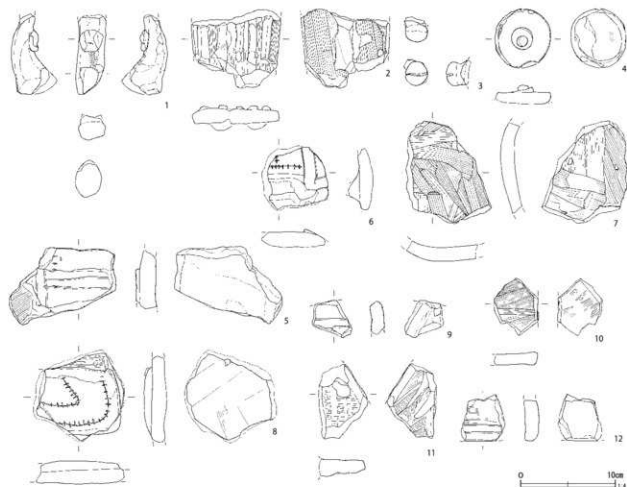
オ. グリッド出土遺物(第106図)

南塚原74号墳と重複する第5・18号溝跡から出土した土象埴輪を一括する。

1は男子の下げ美豆良である。棒状の粘土塊の先端を楕形に押しつぶし、正面には結び紐の表現がみられる。2は靱の鎌表現部である。逆台形の粘土板に5本の粘土紐を貼付して鎌を表現する。矢筒に挿入した基部の破片で、裏面には補強帯の剥離痕が2条みられる。3～8は馬の破片と考えられる。3は粘土塊成形の小型の鈴である。4は直径6.2cmの円形粘土板の中心に粘土粒を2段に

貼付したもので、面繫の辻金具と推定される。側面には一部赤彩がみられる。このような大型円板による辻金具表現は児玉地域の馬形埴輪に散見さ

れる。おそらく藤岡市本郷埴輪窯跡群で製作されたものであろう。5・6は外面に縁取り状に二重の線刻文の上に刺突文を重ねた文様をもつ破片で



第106図 グリッド出土遺物

第45表 グリッド出土形象埴輪観察表(第106図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
1	人物 美豆良	ACHIK	良好	明赤褐	ナデ		SD5K22G トレンチ 棒状下び美豆良 先端部 捺形に開く 結び紐を表現する	46-2
2	鞍 簾表現部	AEHIK	良好	明赤褐	ハケメ 12	ハケメ 12	SD18K20G 裏面に補強帯刺痕直	46-2
3	馬 鈴	ABCHI	良好	橙	ナデ		SD18 粘土塊成形	46-2
4	馬 辻金具	ABEHK	良好	橙	ナデ		SD5K23G 円形の粘土板に粘土粒を2段に貼付 側面に一部赤彩痕がみられる	46-2
5	不明 馬	ACEHIK	良好	橙	ナデ・ハケメ 12	ナデ	SD5K22G 刺突文をもつ線刻文 鞍跡か	46-2
6	不明 馬	ABCEHIK	普通	橙	ナデ		SD5J22G 刺突文をもつ線刻文 鞍跡か	46-2
7	馬 腹部	ABEHIJK	普通	橙	ハケメ 10~11	ハケメ 10~11	SD5K22G 内外面ハケメ調整	46-2
8	不明 馬	ACEHIJK	普通	橙	ナデ	ナデ	SD5K22G 刺突文をもつ二重曲線文 鞍跡か	46-2
9	不明 器財	AEHIK	良好	橙	ナデ	ナデ	SD5K22 G 板状品 外面2条線	46-2
10	不明 器財	EHIK	普通	明赤褐	ハケメ 14	ナデ	SD18K21G 板状品	46-2
11	不明 器財	AEHI	普通	明赤褐	ハケメ 12		裾丸4 板状品 側面の刺痕面にハケメ圧痕	46-2
12	不明 器財	ACHIK	良好	橙	ハケメ 12	ナデ	SD5K22G トレンチ 板状品 外面線刻あり	46-2

ある。円筒形の本体に粘土板を貼り付していることから、鞍褥の一部と考えられる。7は内外面にハケメを施した馬の腹部であろう。8は二重曲線文の上に、ヘラ先による刺突文を重ねるもので、5・6の文様表現に類似している。円筒形の本体に粘土板を貼り付けていることから鞍褥の一部と考えられる。9～12は板状の破片である。鞍や盾などの器用埴輪の一部と考えられる。

(4) 中・近世

ア. 溝跡

溝跡は14条検出された。遺物を出土するものがほとんどなく、時期決定することは難しいが、埋土中に浅間A軽石を含むものが多くみられた。

第5号溝跡 (第107図)

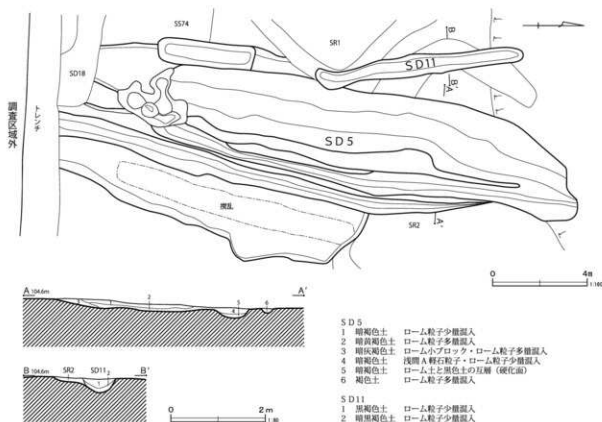
調査区中央のI・J-22、K-21・22グリッドに位置する。南塚原29号墳と南塚原74号墳の間を縫うように南北方向に延びる上幅約9mの溝跡で

ある。掘り込みは総じて浅いが、溝底面の凹凸は顕著で、繰返し掘り直されたことがうかがわれる。検出長23.6mで、北側の凹地に向かって緩やかに傾斜している。

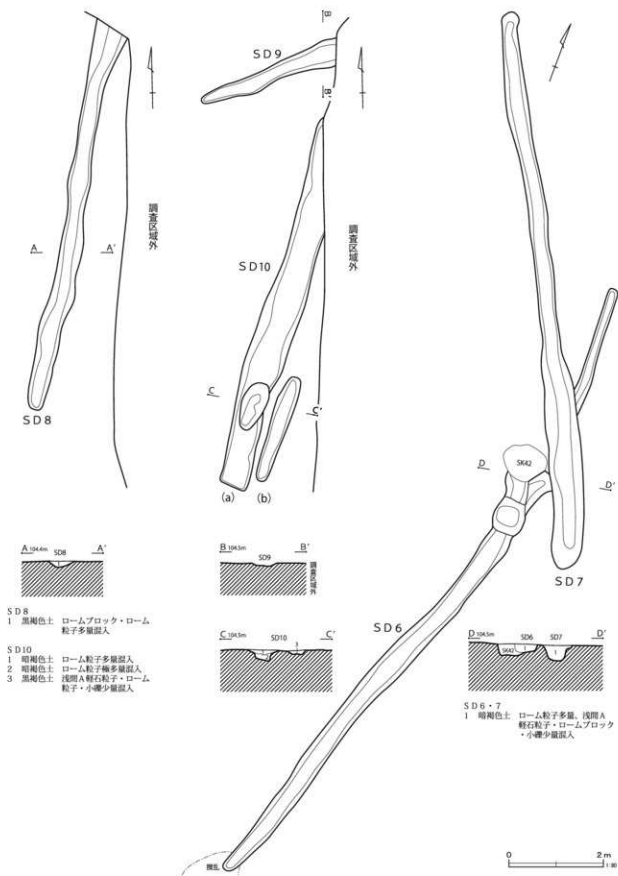
耕地整理以前の地形図に照らしてみると、大塚稲荷古墳に向かって調査区を縦断する小道が走っていたことが分かり、本溝跡がそれに該当する可能性が高い。それを裏付けるように土層断面でも硬化面(第5層)が確認された。おそらく古墳の周溝の凹地を利用した道路跡として機能した段跡があったと考えられる。

第6号溝跡 (第108図)

調査区東側のI-24、J-23・24グリッドに位置する。第7号溝跡と交差し、第42号土塚を壊していた。長さ14.86mで、緩やかに蛇行して南北方向に延びる。溝幅は0.22～0.58mと一定していない。掘り込みは全体に浅かった。



第107図 第5・11号溝跡

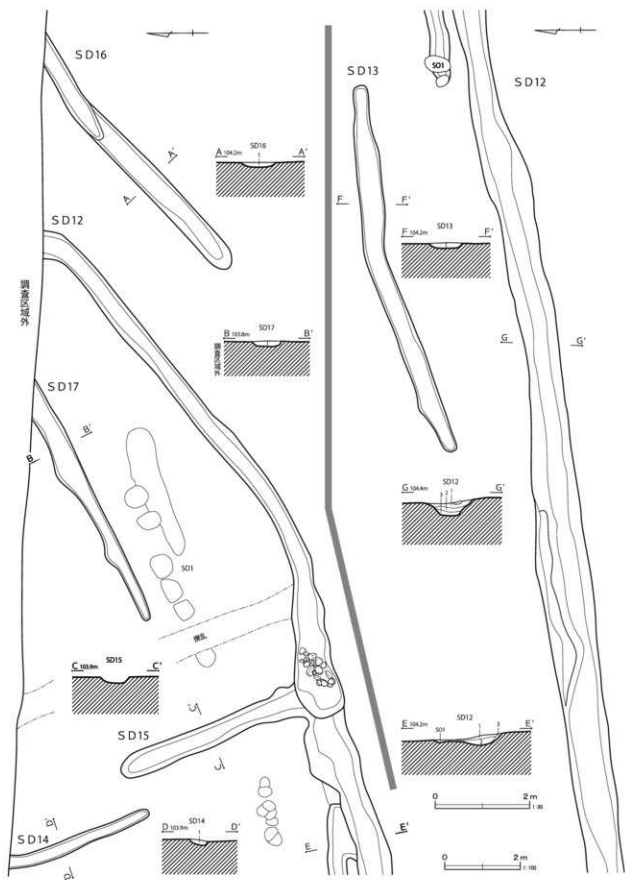


SD8
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム
粒子多量混入

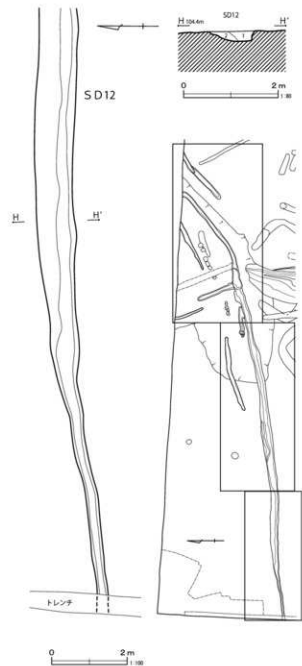
SD10
1 暗褐色土 ローム粒子多量混入
2 暗褐色土 ローム粒子極多量混入
3 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ローム
粒子・小礫少量混入

SD6・7
1 暗褐色土 ローム粒子多量、浅間A
軽石粒子・ロームブロック
・小礫少量混入

第108図 第6～10号溝跡



第109图 第12~17号沟迹(1)



SD12 (E-E'・G-G')	浅間A軽石粒子少量、ローム粒子多量混入。
1 濃い黄褐色土	大型の円礫を含む
2 暗褐色土	浅間A軽石粒子多量、ローム粒子少量混入
3 黒褐色土	浅間A軽石粒子少量、ローム粒子多量混入
SD13 (F-F')	
1 暗褐色土	ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子少量混入
SD14 (D-D')	
1 暗褐色土	浅間A軽石粒子・ロームブロック・ローム粒子多量混入
SD16 (A-A')	
1 暗黄褐色土	ローム粒子多量、浅間A軽石粒子・小礫少量混入
SD17 (B-B')	
1 黒褐色土	ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子少量混入

第110図 第12～17号溝跡(2)

第7号溝跡(第108図)

調査区東側のI-23・24、J-24グリッドに位置する。第6号溝跡と交差し、北西に向かって直線的に延びる。規模は長さ11.84m、溝幅0.38～0.78m、深さ0.16～0.27mである。

第8号溝跡(第108図)

調査区北東隅のI-25グリッドに位置する。南北に走行し、北側は調査区外に延びる。溝幅0.33～0.65m、深さ10cm前後と浅い。

第9・10号溝跡(第108図)

第10号溝跡は、J-24・25グリッドに位置する。南北方向に直線的に延び、北側は調査区外にかかる。幅0.68～0.83m、深さ0.1～0.2mである。本溝跡の南端には長さ2.35m、幅0.31～0.42mの小規模な溝が並列する。北側に位置する第9号溝跡は東西に延び、調査区域外で交差する。

第11号溝跡(第107図)

調査区中央部のI-22、J-21・22グリッドに位置する。第5号溝跡に接し、凹地に向けて南北に延びる。規模は長さ8.76m、幅0.66～1.04m、深さ0.15～0.28mである。

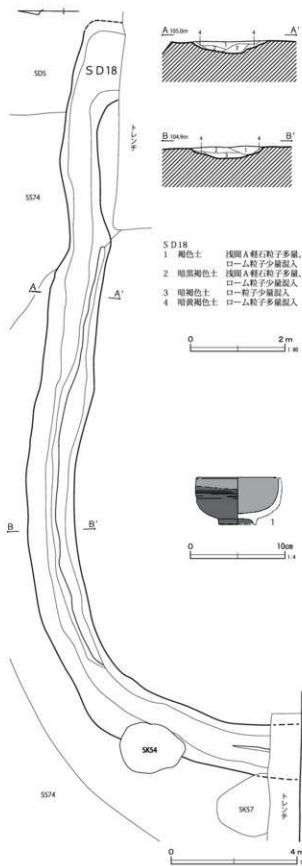
第12号溝跡(第109・110図)

調査区の西端から中央部に向かって延び、I-22グリッド付近で、大塚稲荷古墳に向かって北東に向きを変える。丁度、高位面と低位面の地形変換点に掘削されている。溝の総延長約60m、溝幅0.32～1.34m、深さ0.12～0.30mである。埋土中には浅間A軽石を含み、上層を中心に拳大の円礫が多量に廃棄されていた。

後述するように、北側に接する第1号道路跡に関連するもので、側溝的な機能を有していたものと考えられる。

第13号溝跡(第109図)

調査区北側中央のI-20・21グリッドに位置する。第12号溝跡に平行して東西方向に延びる。長さ9.90m、溝幅0.39～0.63m、深さ10cm前後と浅い。第12号溝跡との心々距離は約3.6m(2間)



第111図 第18号溝跡・出土遺物

を測り、第1号道路跡の延長線上にあたることから側溝として機能したものであろう。

第14号溝跡 (第109図)

調査区北側中央のH・I-21グリッドに位置する。北西に向けて緩やかに曲がりながら調査区域外へと延びる。凹地斜面裾に掘削されている。長さ3.92m、溝幅0.31～0.34mの小規模なもので、深さは10cm前後と浅い。

第15号溝跡 (第109図)

調査区北側中央のH・I-22グリッドに位置する。第12号溝跡に直交して北西に延び、第1号道路跡と交差する。長さ5.25m、溝幅0.51～0.86m、深さ0.1～0.2mと全体に浅い。

第16号溝跡 (第109図)

調査区北側東寄りのH-23・24、I-23グリッドに位置する。凹地に向かう斜面の肩部に沿って掘削され、北端は調査区域外にかかる。長さ7.42m、溝幅0.49～0.69mである。確認面からの深さは0.10～0.15mと浅い。

第17号溝跡 (第109図)

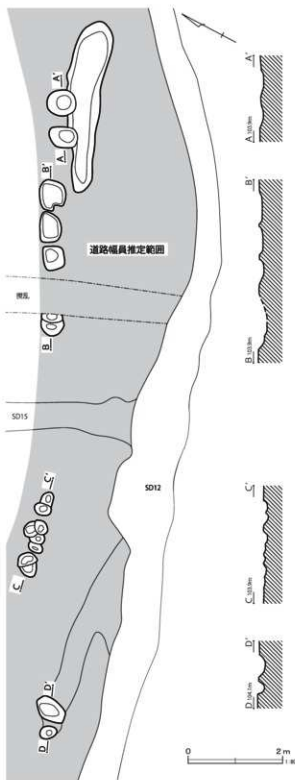
調査区北側中央のH-22・23、I-22グリッドに位置する。第2号溝跡と並行するように北東に延び、調査区域外にかかる。長さ6.58m、溝幅0.28～0.70mと一定しない。深さは全体に浅い。第12号溝跡とは心々距離で3.3～4.3m（2間から2間半に相当）の距離がある。両溝に挟まれるように第1号道路跡が延びていることから道路の側溝的な機能をもつものであろう。

第18号溝跡 (第111図)

調査区南側中央のK-19～22、L-19グリッドに位置し、南塚原74号墳、第5号溝跡などと重複する。その性格は、墳丘を取り囲むようにコの字に巡る根切り溝であろう。長さ26.46m、幅1.02～1.74m、深さ20cmほどである。埋土には浅層A軽石が含まれていた。遺物は、1の灰軸と鉄軸を掛け付けた陶器の腰銘碗が出土している。なお、神川町調査区第39号溝跡と同一の溝跡である。

第46表 第18号溝跡出土遺物観察表(第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	腰踏碗	8.9	4.9	(4.0)	IK	90	良好	灰白	K20G 灰輪鉄軸掛分陶 瀬戸、美濃系 19世紀	43-7



第112図 第1号道路跡

イ. 道路跡

第1号道路跡(第112図)

調査区北側の1-21・22グリッドに位置する。第12号溝跡の北側に沿うように輻状のピット列が断続的に検出された。ピットの掘り込みは全体に浅いものの、その上面に小石を多く含む、非常に堅く締まった硬化面が確認されたことから、道路跡と推定した。そこで、耕地整理以前の地形図と調査区の位置を対照してみたところ、かつて調査区の中央部を西から北東へ延びる道路跡が存在していたことが分かった。その道路跡は、概ね第12号溝跡の走行方向に一致する。おそらく高位面と低位面の境に道路が形成されたのであろう。

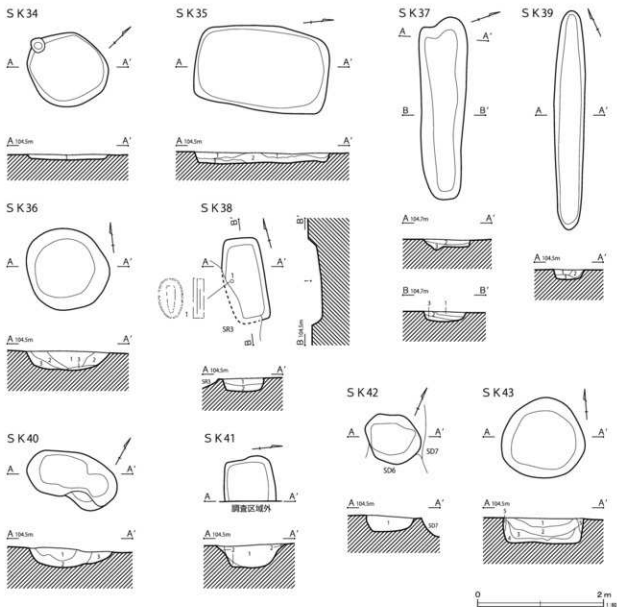
このようにピット列以外に明確な硬化面等は検出されなかったが、幅員約3mの道路跡を復元することが可能である。遺物がなく、年代については決め難いが、耕地整理前まで生活道路として機能していたものと考えられる。

ウ. 土壌

土壌は合計28基検出された。分布状況は、①調査区東側の第3号方形周溝墓周辺、②調査区西側の南塚原74号墳周辺、③調査区北東側低位面に大きく分けられる。

平面形は、円形、長方形、溝状、不整形の4つに大きく分類される。特徴的な土壌として古墳から出た石材を一括廃棄したと考えられる円形の土壌が、南塚原74号墳周辺に3基認められた(第54・55・57号土壌)。第57号土壌では底面に焼土や炭化物が散布し、被熱痕が認められた。おそらく農作業に邪魔な礫を集めて一括廃棄したものであろう。

この他に第38号土壌から銅製鏝が単独で出土している。土壌の性格については即断できないが、土壌墓の可能性も考えられる。



S K 34
1 黒褐色土 ローム粒子多量、浅間A軽石粒子・ロームブロック少量混入

S K 35
1 黒褐色土 褐色粒子多量、ローム粒子少量混入
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子輪多量、黒褐色粒子少量混入
3 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量混入

S K 36
1 暗褐色土 ローム粒子多量、浅間A軽石粒子・炭化物粒子少量混入
2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック・炭化物粒子少量混入
3 褐色土 ローム粒子多量、小礫少量混入

S K 37
1 黒褐色土 浅間A軽石粒子・ローム粒子少量混入
2 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ローム粒子少量混入
3 黄褐色土 ローム小ブロック多量混入

S K 38
1 褐色土 ローム粒子少量混入
2 黄褐色土 ロームブロック少量混入

S K 39
1 暗褐色土 ローム粒子少量、浅間A軽石粒子微量混入
2 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量混入
3 褐色土 ローム土を主体とする

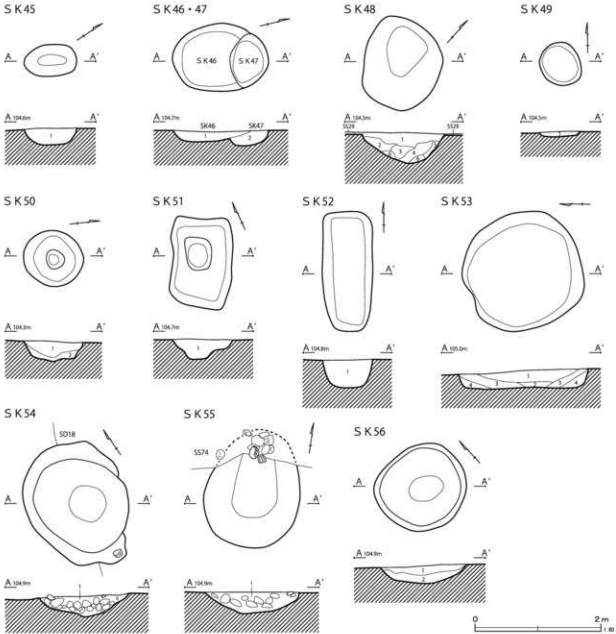
S K 40
1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、小礫微量混入
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子輪多量、小礫微量混入
3 黒褐色土 ローム粒子多量混入

S K 41
1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子少量混入
2 暗褐色土 ローム粒子少量混入

S K 42
1 K-5(黄褐色土) ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子微量混入

S K 43
1 黒褐色土 浅間A軽石粒子少量、炭化物粒子・ローム粒子微量混入
2 黒褐色土 浅間A軽石粒子多量、炭化物粒子・ローム粒子少量混入
3 黒褐色土 ローム粒子多量、浅間A軽石粒子・ロームブロック少量混入
4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子輪多量混入
5 褐色土 ローム土主体、黒褐色粒子多量混入

第113図 第34～43号土坑



SK 45
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子少量混入

SK 46・47
1 暗褐色土 ローム粒子多量、浅間A軽石粒子・炭化物粒子少量混入
2 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ローム粒子多量混入

SK 48
1 黒褐色土 浅間A軽石粒子多量、ロームブロック・ローム粒子少量混入
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子極多量、浅間A軽石粒子少量混入
3 黒褐色土 浅間A軽石粒子多量、ローム粒子少量混入
4 暗褐色土 ローム粒子多量、浅間A軽石粒子少量混入
5 暗褐色土 ローム粒子極多量混入
6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子極多量混入

SK 49
1 灰黄褐色土 浅間A軽石粒子多量、ローム粒子少量混入

SK 50
1 暗褐色土 浅間A軽石粒子多量、ロームブロック・ローム粒子少量混入
2 暗褐色土 ローム粒子極多量、浅間A軽石粒子少量混入

SK 51
1 暗褐色土 浅間A軽石粒子多量、ロームブロック・ローム粒子少量混入

SK 52
1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量、浅間A軽石粒子微量混入

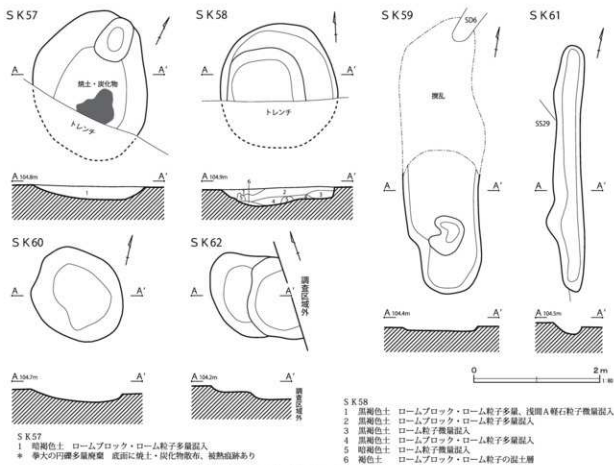
SK 53
1 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ローム粒子少量混入、華大の円礫が多量に散在
2 黒褐色土 ローム小ブロック少量混入
3 暗褐色土 ローム小ブロック極多量混入(埋め戻し土)
4 黒褐色土 ローム粒子少量混入

SK 54
1 暗褐色土 浅間A軽石粒子・ロームブロック混入、大型の円礫が多量に散在

SK 55
1 暗褐色土 ロームブロック少量、浅間A軽石粒子微量混入、華大の円礫が多量に散在

SK 56
1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、浅間A軽石粒子微量混入
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、浅間A軽石粒子微量混入

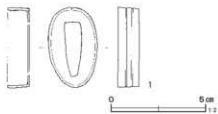
第114図 第45～56号土塙



第115図 第57～62号土壌

エ. 土壌出土遺物 (第116図)

1は第38号土壌から出土した銅製鏝である。楕円形の銅板の中央を刀身形に削り抜き、2条線を側面に刻んだ銅板を鍍付けし、棟側に合わせ目をもつ。中世以降の太刀に伴う刀装具であろう。



第116図 第38号土壌出土遺物

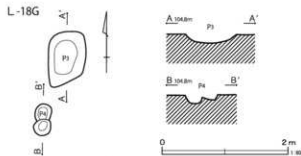
第47表 第38号土壌出土遺物観察表 (第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	銅製品	鏝	長径4.2	短径2.6	厚さ1.6	重さ14.4				太刀の刀装具 側面に2条沈線 棟側に合わせ目	46-5

オ. ビット

ビットは4基検出された。ビット1・2は南塚原29号墳の東側周溝と重複し、K-24グリッドに位置する。ビット3・4は南塚原74号墳の西側周溝と重複し、L-18グリッド (第117図) に位置する。いずれも柱痕等は確認されなかった。

遺物がまったく出土していないため、時期不詳である。



第117図 ビット

VIII 青柳古墳群南塚原支群第3次調査

1. 調査の概要

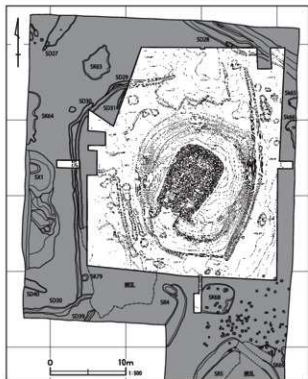
南塚原支群第3次調査は、上里幹線呑口調整池の西側に隣接する調査区1(2,300㎡)と、大塚稲荷古墳の南側約16mに隣接する調査区2(460㎡)の2地点について実施した。

調査区1で検出された遺構は、縄文時代中・後期の土壇8基、ピット1基、古墳時代前期の方形周溝墓2基、古墳時代後期の溝跡1条、土壇1基、性格不明遺構1基、平安時代の溝跡1条、土壇墓1基、中・近世の溝跡12条、土壇9基、ピット95基である(第119図)。この他に石器集中や礫群などの旧石器時代の遺構は検出されなかったが、黒曜石の剥片が出土した。

調査区2で検出された遺構は、中・近世の溝跡8条、ピット11基である(第120図)。

なお、調査区1の北側中央部には、かつて南塚原40号墳が所在し、墳丘部分については神川町教育委員会が平成8年度に調査(埼玉県教育委員会1998)を実施している(第118図)。しかし、旧表土下の遺構に関する調査が行われていなかったことから、今回、古墳築造以前にさかのぼる遺構の所在を確認するため、再調査を実施した。

今回の調査では、明確に古墳の周溝と捉えられる遺構は検出されなかった。ただ、調査区1南端の第33号溝跡からは円筒埴輪の破片がまとまって出土していることから古墳の周溝の可能性が残る。調査区1南側の第72号土壇も時期を示す遺物は出



第118図 南塚原40号墳・第3次調査区1

土していないが、埋土の状態や重複関係から古墳の周溝の可能性が大きい。同様に調査区1西端の第1号性格不明遺構も古墳の墳丘や横穴式石室を構築するのに必要なローム土や砂礫土を大がかりに採掘した土取り跡と考えられる。

第1号土壇墓は、平安時代前期後半に営まれたもので灰釉陶器を副葬した官人墓の可能性が高い。氏族が出自の再確認や系譜関係を主張するために敢えて古墳群の中に造墓したものであろう。

2. 遺構と遺物

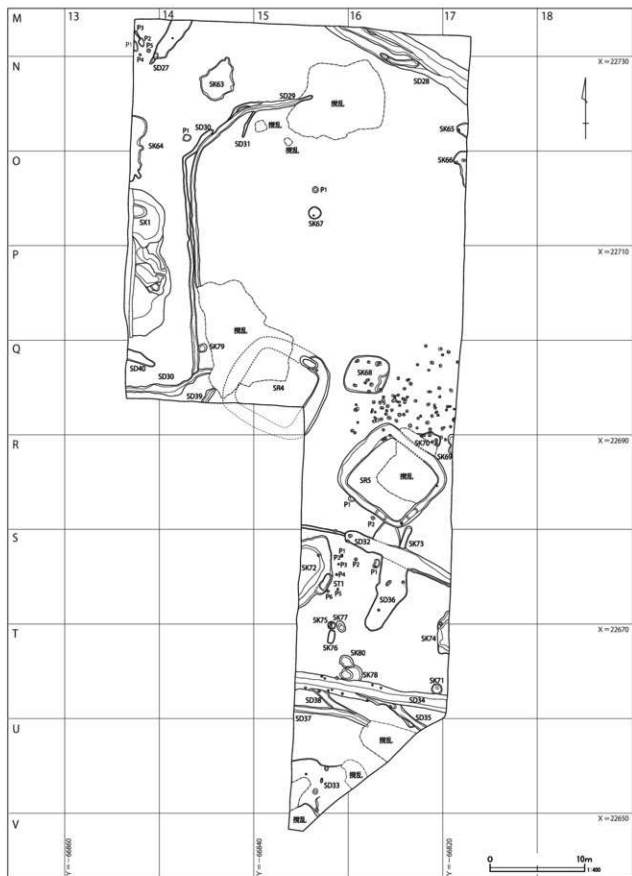
(1) 旧石器時代

A. 調査区(第121図)

旧石器時代の調査は、調査区1の東西軸(P列)と南北軸(16列)を中心に、2m×2mを基本とする調査区を設定し、ローム層の掘り下げを行った。確認面から80~100cmの深さで拳大の

円礫を主体とする礫層が顔を出してしまい、ローム層の発達はまだ顕著でない。ロームの堆積は、東西方向ではほぼ水平に堆積していたが、南北方向では北方への緩やかな傾斜が認められた。

調査の結果、Q-16グリッド北西隅から石器が単独で出土した。



第119图 南塚原支群第3次調査区1全測図

イ. 単独出土石器 (第121図)

1はQ-16グリッドの第3層中から出土した黒曜石製の剥片ないし残核である。断面台形で、背面に広く主要剥離面を残している。

(2) 縄文時代

ア. 土壌 (第122図)

縄文時代の土壌は、調査区1において8基検出された。分布状況は、調査区北側の南塚原40号墳の墳丘下に位置する第67号土壌と調査区南側に集中する第71・74～78・80号土壌に二分される。

平面形は、円形の第67・71・75号土壌、楕円形の第77号土壌、隅丸長方形の第76号土壌、不整形の第74・78・80号土壌に区分される。

このうち第67号土壌は後期、それ以外はすべて中期に位置づけられる。

イ. 土壌出土遺物

第67号土壌出土遺物 (第123図1)

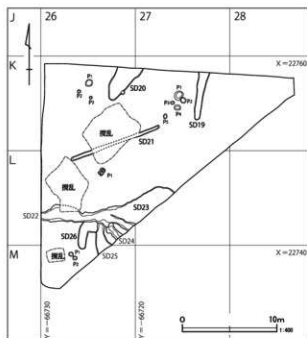
1は無文の深鉢口縁部で、後期のものと考えられる。直線的に開く単調な器形で、口唇肥厚せず口端は内削ぎ状となる。外面はヘラ状工具による撫で調整が観察され、内面は研磨が徹底される。胎土は緻密で少量の礫・砂粒が混入され、焼成は良好である。

第72号土壌出土遺物 (第123図2～4)

土器片3点が出土した。時期はいずれも中期後葉と考えられる。2は無文の口縁部で、曾利系の深鉢と考えられる。口唇肥厚しつつ内湾し、口端上面は扁平である。胎土は砂質で、外面は風化が著しい。3は加曾利EⅢ式のキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯との境界部分とみられる。磨り消し懸垂文がみられ、地文はRL単節縦位回転の縄文である。4は櫛歯状工具による縦位の条線を施文する。器形としては深鉢・浅鉢・両耳壺などが考えられる。

第74号土壌出土遺物 (第123図5～8)

土器片4点が出土した。時期はいずれも中期後葉と考えられる。5は加曾利EⅡ式で、繋ぎ弧文



第120図 南塚原支群第3次調査区2全測図

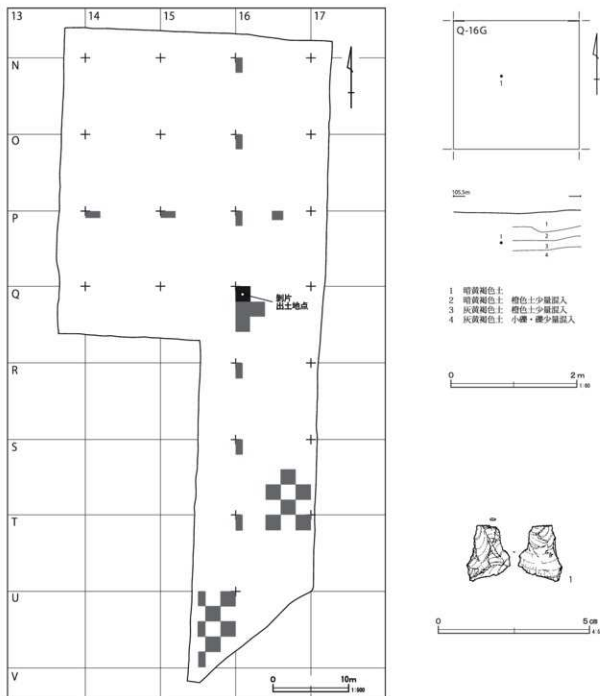
の土器である。キャリバー形の深鉢だが口唇は肥厚せず、口端は先細りつつ外屈する。口縁直下に4単位配した突起を、断面三角形の隆帯による弧線文で連続して半円形の区画を形成し、内部に縦位の集合沈線を充填する。地文はr縦位回転の燃糸文で、頸部無文帯はない。胎土は砂質である。

6は無文地に扁平な隆帯による曲線的なモチーフを描くもので、加曾利EⅢ式の可能性がある。胎土は緻密で焼成は良好である。7は2本隆帯による横位の区画で、キャリバー形深鉢の頸部無文帯と胴部文様帯との境界部分と考えられる。加曾利EⅠ式ないしⅡ式であろう。

8は沈線のなぞりを伴う扁平な隆帯により弧状の区画が描かれ、内部にRL単節の縄文が充填施文されている。下部の隆帯上には櫛歯状工具による条線が観察され、以下胴部にも同様の地文が連続するものと考えられる。加曾利EⅢ式の両耳壺で、胴上半部の文様帯の一部であろう。

第75号土壌出土遺物 (第123図9～11)

土器片3点が出土した。時期はいずれも中期後葉と考えられる。9は加曾利EⅢ式で、キャリ



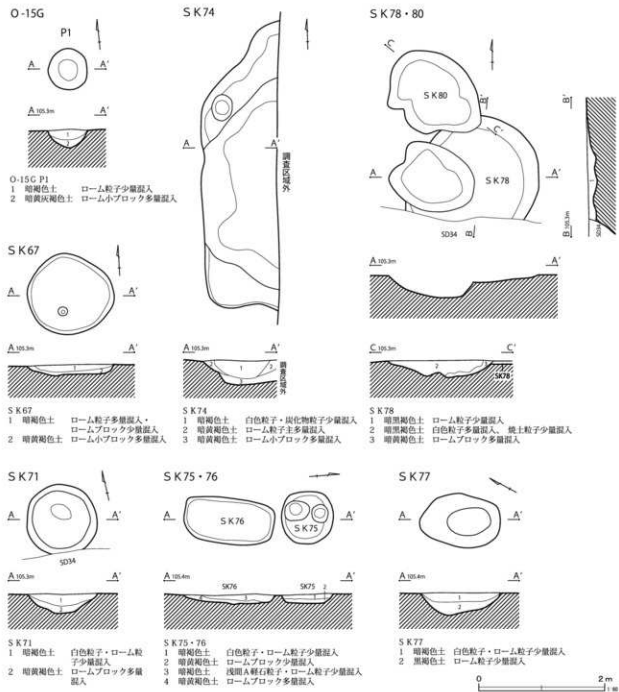
第121図 旧石器時代調査区・出土遺物

パー形深鉢の胴部である。両側縁に磨り消し懸垂文を構成する縦位の沈線が観察される。地文はRL単節縦位回転の縄文である。薄手の器壁で胎土は緻密、白色の砂粒が混入されている。10はRL単節縦位回転の縄文のみが施文される。11は無文の胴部で、全面に横位の磨きが観察される。浅鉢の胴部ないし、キャリパー形深鉢の頸部無文

帯と考えられる。胎土には雲母粒子が混入される。

第80号土壙出土遺物 (第123図12)

12は棒状工具による集合沈線が交錯する深鉢胴部で、加曾利EⅢ式と並行する唐草文系の土器であろう。胎土はきわめて砂質だが、焼成は良好である。



第122図 第67・71・74～78・80号土坑、O-15Gピット1

ウ. ビット

O-15グリッド ピット1 (第122図)

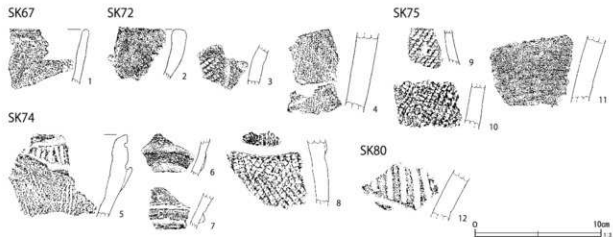
南塚原40号墳の墳丘下層から検出された。第67号土坑の北1.5mに位置する。直径0.65m、深さ0.3mの円形のビットである。遺物はない。

エ. グリッド出土遺物 (第124図)

1～33は土器片である。大半が中期後葉に位置

づけられる。1は前期後半の深鉢口縁部と考えられる。口唇断面角頭棒状で、ゆるやかな波状口縁をなす可能性がある。口縁直下からRL単節の細文が施文される。胎土は緻密で、焼成は良好である。

2～3はキャリパー形深鉢の胴部で、加曾利EⅡ式からEⅢ式古段階にかけての土器と考えられる。いずれも2本降帯の懸垂文が描かれる。地文



第123図 土壇出土遺物

は2がRL単節、3は施文が粗く判然としないがLR単節、4はrの燃糸文で、いずれも縦位回転で施文される。5は2本一組の微隆起線で曲線文が描かれるもので、同時期のものと思われる。地文はrの燃糸文である。

6～24は加曾利Ⅲ式期の土器である。

6・7は深鉢口縁部である。6は波状口縁の波頂部で、口縁部文様帯の渦巻文が口唇上に立ち上がり小突起となっている。7も口縁部文様帯の一部で、口縁と楕円形区画文の間に1条の沈線が介在している。8は口縁部文様帯下端の区画から胴部の磨り消し懸垂文までが残存する。地文はRL縦位回転の縄文である。9は2本隆帯による曲線文で、胴部中段に大柄の渦巻文を描くものであろう。地文はRL単節の縄文である。

10～14は磨り消し懸垂文の胴部破片である。地文は11がLR単節、他はRL単節の縄文で、いずれも縦位回転で施文される。

15は両耳壺の胴上半部の文様帯である。扁平な隆帯で渦巻文+楕円形区画文が描かれる。区画文の内部にはRL単節横位回転の縄文が充填される。

16・17は連弧文系の深鉢である。16は口縁部で、口唇断面内削ぎ状となり、口縁直下に3条の沈線が巡る。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。17は磨り消し連弧文で、3本沈線で文様を描

かれる。器面の風化により地文は判然としないが、16同様の条線が縦位の燃糸文と考えられる。

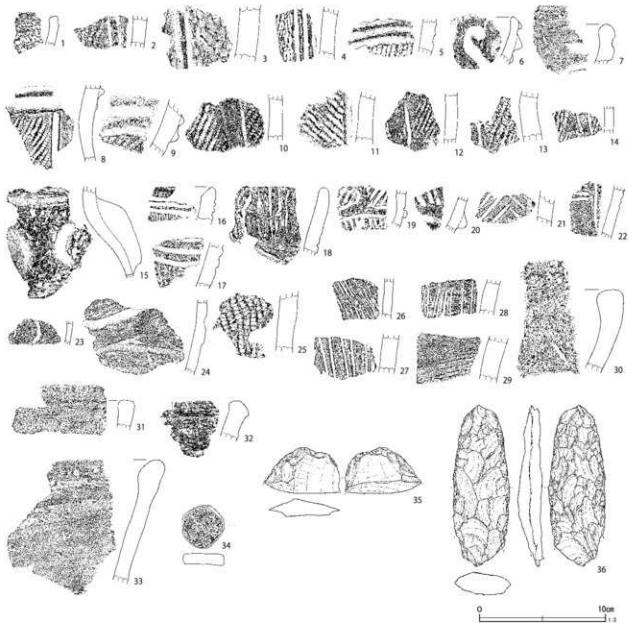
18は曾利Ⅳ式に類似の深鉢口縁部である。緩いキャリバー状の器形をなすものとみられる。口縁下に平行沈線による繋ぎ弧状のモチーフを描き、口縁との間に縦位の集合沈線が施文される。

19～22は北信の唐草文系の土器である。棒状工具による集合沈線を地文とする。19・20は口縁部文様帯の一部である。胴部との境を1条の隆帯で区画する。19は形骸化した渦巻文がみられる。また、口縁部と胴部で地文の方向を違えている。21は矢羽根状の沈線で、胴部の懸垂文の間隙に充填されたものとみられる。22は縦横の平行沈線により幾何学文が描かれる。

23・24は薄手の器壁で、ごく浅い沈線で無文地に曲線文が描かれるもので、鉢や壺等特殊な器形に伴うものと考えられる。胎土は緻密で、焼成は良好である。

25は縄文のみの胴部である。LR単節の縄文がやや不規則に施文されており、文様帯や把手などに隣接する部分である可能性がある。26～28は集合沈線の胴部である。28は鋭利な施文工具の特徴が19に類似する。29は無文の胴部である。

30～33は無文の口縁部で、浅鉢ないし曾利Ⅱ式的な深鉢と考えられる。いずれも口唇は強く肥厚



第124図 グリッド出土遺物

し、30は内湾、31・32は外屈する。33は断面内削ぎ状で、直線的に開いている。30は胎土に多量の砂を混入する。33の胎土には赤褐色の礫が特徴的にみられる。

34は土製円盤である。無文の胴部破片を不整形円形に加工し、周縁を磨っている。最大径3.4cm、厚さ0.8mm、重さ12.5gである。

35・36は打製石斧である。35は打製石斧の基部破片とみられる。表裏に広い剥離面を残しており、

左側縁を中心に両面からの細かな剥離により成形している。石材は頁岩である。

36は短冊形の打製石斧である。両側縁からの剥離により長楕円形のプロポジションを作り出している。背面2箇所に自然面を残すが極めて平滑であり、磨り石を再加工している可能性がある。長さ12.7cm、幅4.5cm、厚さ1.9cm、重量115.2gを測る。石材は硬質の砂岩である。

(3) 古墳時代

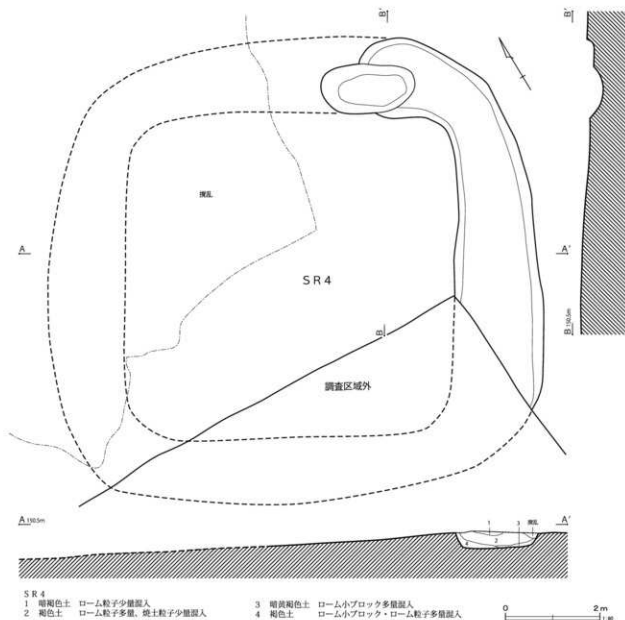
ア. 方形周溝墓

方形周溝墓は、調査区1の中央部南寄りから2基検出された。第2次調査と同じように2〜3基からなる単位群を形成するものと想定される。

第4号方形周溝墓 (第125図)

Q-14・15グリッドに位置する。第5号方形周溝墓の北西側に隣接し、攪乱により西半分が削平され、東溝と北東隅部付近のみを検出した。南半

分が調査区域外にかかるため推測の域をでないが、方台部の規模は東西長7.5m、南北長6.8m、周溝を含めた規模は東西長10.5m、南北長9.6mと推定される。主軸方位はN-31°-Eを指す。周溝は幅1.24~1.84m、深さ0.16~0.36mで、東溝は全体に深く掘り込まれ、北東隅部付近は浅く、北溝の端部には土壇状の落ち込みが検出された。埋土は褐色土を主体とし、焼土粒子が混入していた。遺物は出土しなかった。



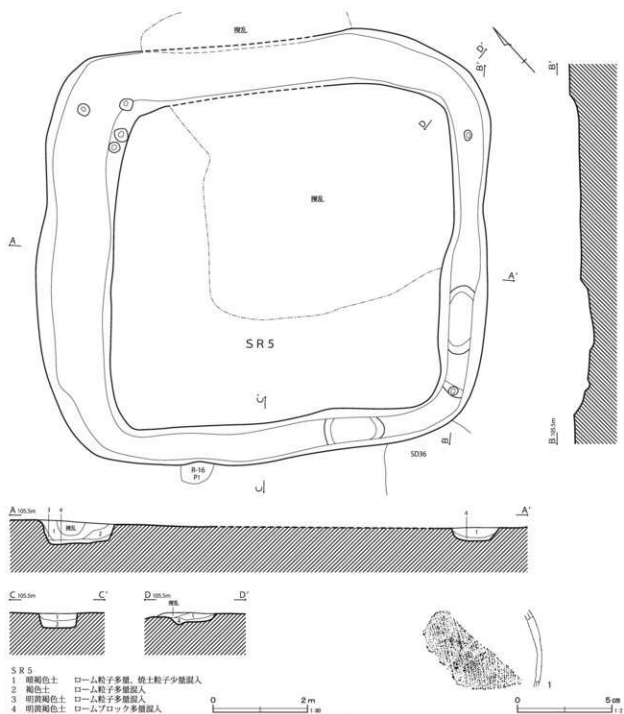
第125図 第4号方形周溝墓

第5号方形周溝墓(第126図)

Q-16、R-15~17グリッドに位置する。第4号方形周溝墓の南東側に約5m隔てて隣接する。方台部は後世の擾乱により大きく削平されていた

が、平面形の全容を把握することができた。

周溝の全周するタイプで、方台部は東西にわずかに長い方形を呈する。方台部の規模は東西長7.30m、南北長6.82mである。周溝を含めた規模



第126図 第5号方形周溝墓・出土遺物

第48表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表(第126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	方台裏	-	-	-	EHI	破片	良好	にぶい黄褐色	西溝 S字裏特有のクシ状のハケメ	

は東西長9.58m、南北長8.84mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

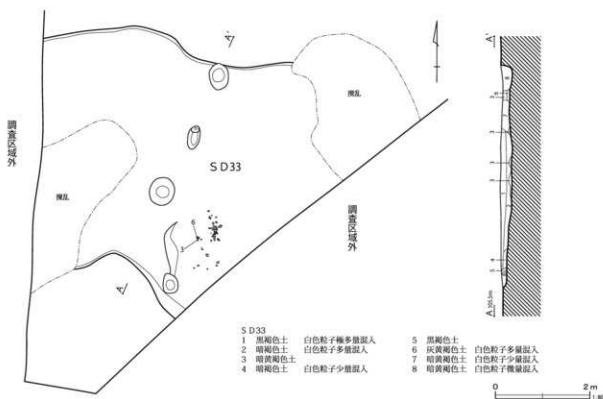
周溝は幅0.64~1.64m、深さ0.18~0.45mである。意図的に西溝を幅広く掘り込み、溝底面はほぼ平坦であった。一方、東溝および南溝は幅が狭く、断面箱形に掘り込まれ、南隅部の両脇の溝底面には浅い土塊状の落ち込みがみられた。溝中内埋葬の可能性を考慮したが、明確にし得なかった。

遺物は西溝からS字状口縁台付甕の胴部片が出土したのみである。

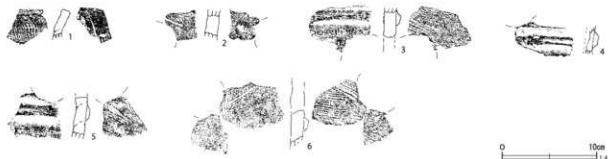
イ. 溝跡

第33号溝跡 (第127図)

調査区1の南端、U-15・16、V-15グリッドに位置する。攪乱により大きく壊され、遺存状況が悪く、大半が調査区域外にかかる。規模は幅4.96~5.16m、深さ0.08~0.28mで、円弧状に近い平面形を呈する。溝底面は概ね平坦である。底面から少し浮いた状態で円筒埴輪の細片 (第128図) が出土したことから、南側に墳丘をもつ古墳跡の周溝の可能性はある。



第127図 第33号溝跡



第128図 第33号溝跡出土遺物

第49表 第33号溝跡出土円筒埴輪観察表(第128図)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備 考	図版
1	円筒	—	—	—	ABEHI	普通	橙	破片	タテ 9	ヨコナデ	一括 内面へラ記号	
2	円筒	—	—	—	ABEHU	良好	橙	破片	タテ 13	ナナメ 13	一括 外面へラ記号	
3	円筒	—	—	—	ABEHU	良好	明赤褐	破片	タテ 8	ヨコ 8	No.33 突帯低台形	
4	円筒	—	—	—	ABEHU	普通	橙	破片	ナデ	器面剥離	一括 突帯台形	
5	円筒	—	—	—	ABEHU	普通	明赤褐	破片	タテ 10	ナナメ 10	一括 突帯低台形	
6	円筒	—	—	—	ABEHU	良好	橙	破片	タテ 10	ナナメ 10	一括 No.34 外面へラ記号	

ウ. 土壌

第72号土壌 (第129図)

調査区1の南側西端、S-15グリッドに位置する。平安時代の第1号土壌墓によって壊されていた。西側が調査区域外にかかるため全容は不明であるが、不整形円形の土壌と推定される。規模は長軸長5.60m以上、短軸長5.18m、深さ0.65mである。底面は中央部に向かって緩やかに傾斜する。

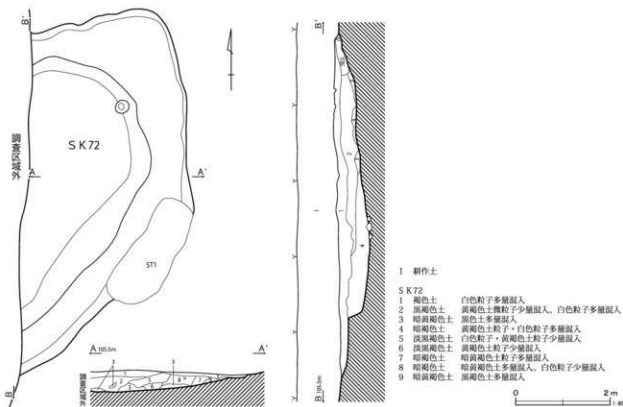
遺物はまったく出土していないが、遺構の重複関係や埋土の状態から古墳時代の遺構の可能性が強い。おそらく古墳跡の周溝の一部であろう。

エ. 性格不明遺構

第1号性格不明遺構 (第130図)

調査区1の中央部西端、O・P-13・14グリッドに位置する。西半分が調査区域外にかかるため全容については不明である。平面形は不整形を呈し、長さ15.71m、深さ1.96mの大規模な掘り込みをもつ。

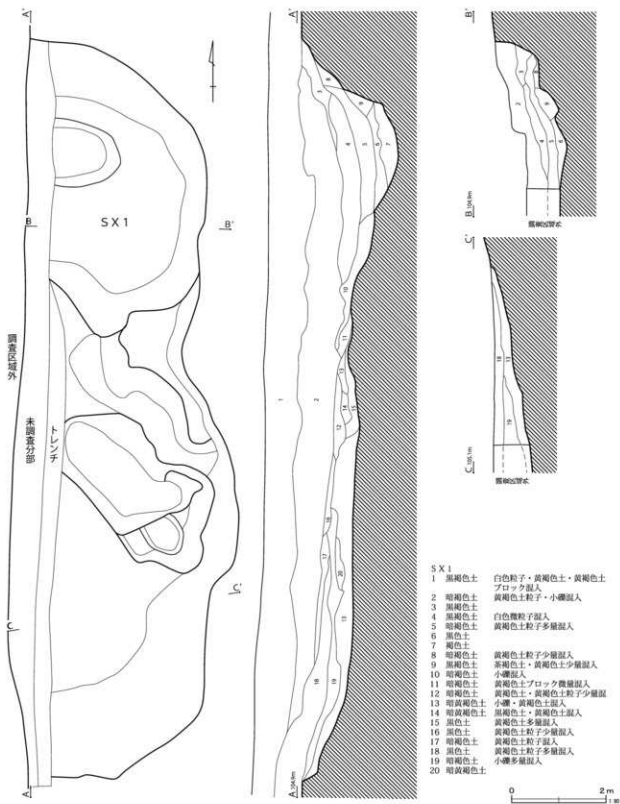
土層断面の観察では、黒褐色土と暗褐色土が互層をなしており、粘土採掘場のような堆積状況を示していた。底面は凹凸が顕著で、ローム下の礫層まで掘り込んでいた。



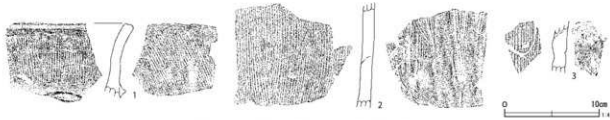
第129図 第72号土壌

南塚原40号墳の西へ約10m離れて位置すること
から、墳丘造成土の土取り跡の可能性が強い。

遺物は円筒埴輪の破片が少量出土したにすぎない(第131図)。



第130図 第1号性格不明遺構



第131図 第1号性格不明遺構出土遺物

第50表 第1号性格不明遺構出土円筒埴輪観察表(第131図)

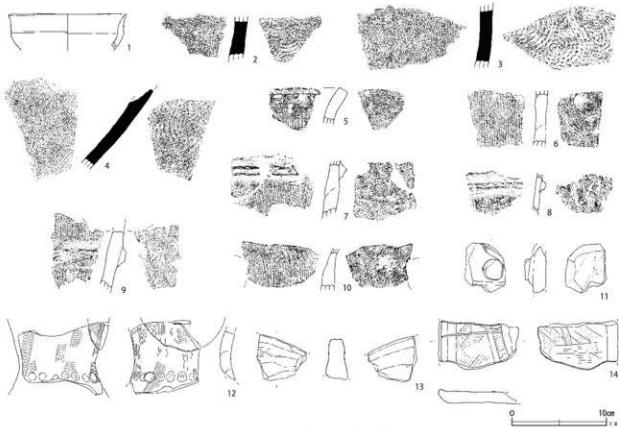
番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (%)	外面調整 (本/2cm)	内面調整 (本/2cm)	備考	図版
1	円筒	-	-	-	ABEHU	良好	にぶい橙	破片	タテ 12	ナナメ 9	一括 突帯三角形	
2	円筒	-	-	-	ABEHU	普通	橙	破片	タテ 8	ナナメ・ナデ14	一括	
3	円筒	-	-	-	ABCEHU	良好	橙	破片	タテ 12	指ナデ	一括 外面へら記号	

オ. グリッド出土遺物(第132図)

1は土師器の模倣坏である。口縁部と体部の境の段は弱く、口縁部は強く外反する、やや深身のタイプと推定される。第36号溝跡出土。2～4は須恵器甕の胴部破片である。2は外面ナデ調整、内面同心円文当て具痕を残す。3は外面平行叩き

目、内面同心円文当て具痕を残す。4の内外面調整は3と同じである。

5～10は円筒埴輪である。突帯の断面形は7が半截五角形、8・9が台形である。胎土に結晶片岩、白色針状物質の混入が目立ち、藤岡産と推定される。



第132図 グリッド出土遺物

第51表 グリッド出土遺物観察表(第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	(12.4)	[3.8]	—	ACEHJ	20	良好	にぶい赤褐色	SD36一括 体部内外面ナデ	内面不定方向
2	須恵器	甕	—	—	—	EIK	破片	良好	灰	1区 表探 群馬産か	
3	須恵器	甕	—	—	—	EIK	破片	良好	灰白	1区 群馬産か	
4	須恵器	甕	—	—	—	EIK	破片	普通	灰白	1区 群馬産か	

第52表 グリッド出土円筒埴輪観察表(第132図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	内面調整	備考	図版
		(cm)	(cm)	(cm)				(%)	(本/2cm)	(本/2cm)		
5	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 8	ヨコ 14	1区南側	54-3
6	円筒	—	—	—	ABEHJ	良好	橙	破片	タテ 10	ナナメ 10	1区表探	54-3
7	円筒	—	—	—	ABEHJ	普通	橙	破片	タテ 13	指ナデ	SK68一括 突帯半載五角形	54-3
8	円筒	—	—	—	ABEHJ	良好	明赤褐色	破片	タテ 11	指ナデ	器壁薄い	54-3
9	円筒	—	—	—	AEHIK	良好	明赤褐色	破片	タテ 11	指ナデ	1区表探 須恵質に近い	54-3
10	円筒	—	—	—	ABEHJ	良好	明褐色	破片	タテ 10	タテ・ナデ 10	1区南端 透孔一部残存	54-3

第53表 グリッド出土形象埴輪観察表(第132図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考	図版
					(本/2cm)	(本/2cm)		
11	不明	家	EHIK	普通	橙	ナデ	1区南半 円板状の貼付	54-3
12	人物	顔部	ABEHI	普通	橙	ハケメ 12	1区確認面 粘土粒による頭飾り表現	53-4
13	馬	タテガミ	AEHIK	普通	橙	ナデ	1区 粘土板成形	54-3
14	家	屋根部	AEHIJK	普通	橙	ハケメ 10	SD28 外面赤彩痕 破風の一部	54-3

11～14は形象埴輪の破片である。11は板状の破片で、幅4.2cmの粘土帯の上に径2.2cmのボタン状の粘土粒を貼付している。堅魚木をのせた家形埴輪の屋根部の破片であろう。12は人物埴輪の下顎から頸部にかけての破片である。下顎を表現する粘土板は剥離しているが、小さく開けた口の切り込みが一部残る。頸部には粘土粒を接するように密に貼り付け、丸玉からなる頭飾りを表現する。剥落が著しく、わずかに1個のみを残す。13は粘土板成形による馬形埴輪のタテガミである。14は入母屋造りの家形埴輪の破風と考えられる板状の破片である。端部は外側に緩く外反する。外面には赤彩痕が残り、横方向の線刻が1条認められる。

(4) 平安時代

ア. 溝跡

第28号溝跡(第133図)

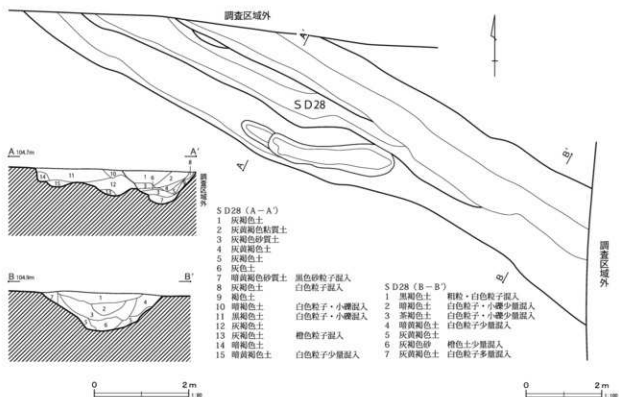
調査区1北東隅のM-15・16、N-16・17グリッドに位置する。上幅2.50～3.51m、深さ0.26～

0.78mの大きな溝跡である。走行方向はN-60°-Wを指す。土層断面や底面の状況から数回にわたって掘り直しが行われたことが読み取れる。溝の断面形は箱築形を呈し、溝底面は南東から北西へと緩やかに傾斜している。東側に隣接する神川町調査区の第14号溝跡と同じ溝跡である。町の調査では、底面に鉄分の沈殿がみられ、一定の水量があったと考えられている。今回の調査でも最下層に灰褐色の砂の堆積が認められた。南塚原40号墳を避けて溝を掘削していることから、溝が機能していた時期は、奈良時代以降で、埋土上層に浅間B軽石を含む土が堆積していたことから、12世紀以前に用水路的な機能を停止し、埋没しつつあったと想定される。

イ. 土墳墓

第1号土墳墓(第134図)

調査区1の南側西端、S-15グリッドに位置する。古墳の周溝と想定される第72号土壌の外縁部を壊して構築されていた。墓墳の規模は長さ2.49



第133図 第28号溝跡

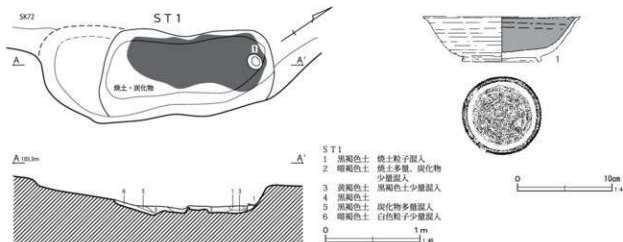
m、幅0.98m、深さ0.30mの長楕円形を呈する。主軸方位はN-38°-Eを指す。

埋土は焼土粒子・炭化物を多量に含む黒褐色土を主体とする。墓の構造は詳らかでないが、釘などを使わない組み合わせ木棺、もしくは布で直接遺体を包み、その周囲を簡単に木炭で覆う程度の土葬であったと考えられる。そして、墓壇の大きさからすれば、遺体は身体をのぼして埋葬されていたのであろう。墓壇の北東端部から灰黒陶器碗

が単独で出土した。焼土と炭化物を多量に含む土の上に口縁を上にした状態で置かれており、北枕の遺体の頭部の上に供えられていたのであろう。

1の灰黒陶器碗は、腰の張りが強く、口縁部が大きく外反する。高台は角高台で、底部外面にヘラケズリが施される。猿投産の黒笹14号窯式に比定され9世紀前半の所産と考えられる。

土壌墓の年代は、土器が墓に副葬されるまでの一定期間を考慮して9世紀半ば頃としたい。



第134図 第1号土壌墓・出土遺物

第54表 第1号土壙墓出土遺物観察表(第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰輪陶器	埴	16.6	4.7	8.4	CEIK	100	良好	灰黄	No.1 捺投産 黒世 14号窯式 チン飯 輪：にぶい黄 底部外面の三叉ト	53-6

(5) 中・近世

ア. 溝跡

中・近世の溝跡は、調査区1で12条、調査区2で8条の計20条を検出した。いずれも出土遺物が少なく、時期は不明であるが、埋土中に浅間A軽石を含むものが多いことから大半は近世以降であろう。

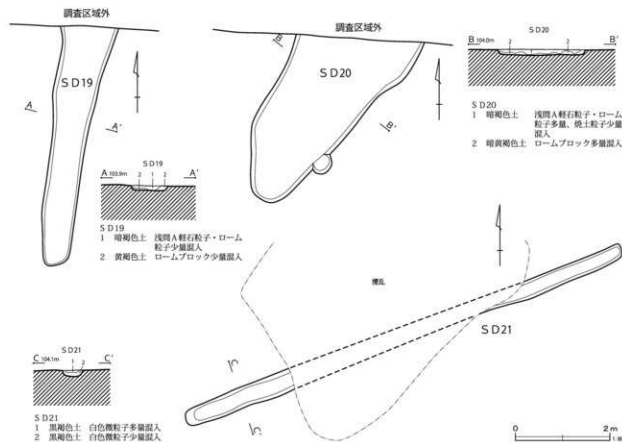
調査区1では、南塚原40号墳の墳丘裾を取り巻くように南北に伸び、近世以降の掘削と推定される第29・30号溝跡のほか(第138図)、調査区南側を東西に横断する第32号溝跡と、それに交差する第36号溝跡(第139図)、調査区南端を平行して東西に横断する第34号溝跡、第37号溝跡(第140図)などがある。

大塚稲荷古墳の南側に隣接する調査区2では、調査区北壁際に南北に走向する第19・20号溝跡、調査区中央に北東方向に伸びる第21号溝跡(第135図)、調査区の南端を東西に横断する第22号溝跡、それに集流する第23～26号溝跡が複雑に重複していた(第136図)。このうち第22号溝跡には古墳時代後期の須恵器残片(第137図)が流れ込んでいた。

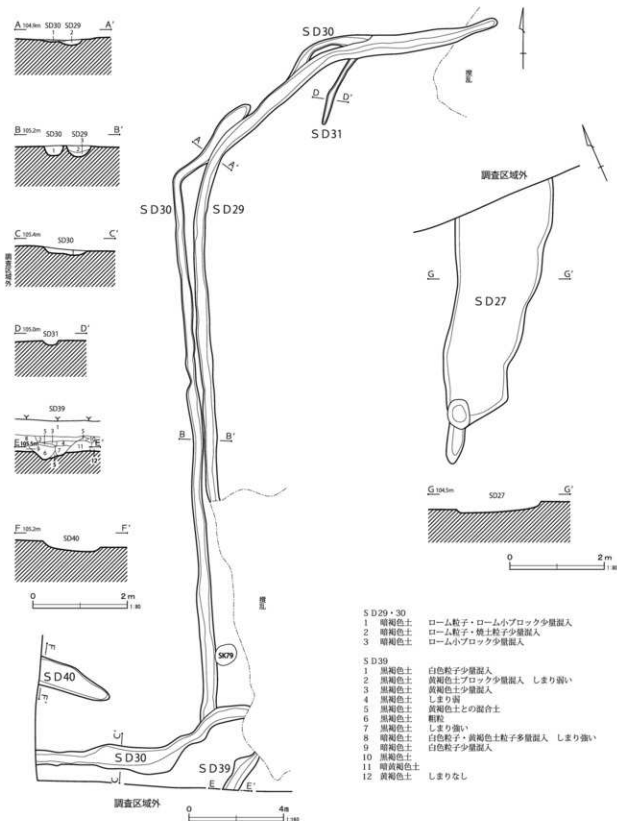
以下、主な溝跡について詳述する。

第22号溝跡(第136図)

調査区2の南端にあたるL-26グリッドに位置する。東西方向に緩やかに屈曲して伸びる溝跡である。第23～26号溝跡と複雑に重複し、個々の新旧関係は不明である。埋土中に拳大から人頭大の



第135図 第19～21号溝跡

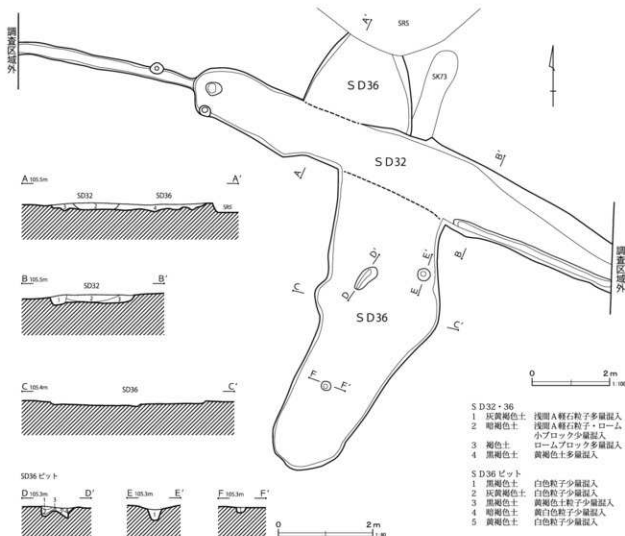


第 138 図 第 27・29～31・39・40号溝跡

第27号溝跡 (第138図)

調査区 1 の北西隅部、M・N-13・14グリッドに位置し、北側は調査区域外に延びる。溝底面

が平坦で幅広い溝である。検出された規模は長さ 5.8m、幅 1.2～1.5m、深さ 20cm である。走行方向は N-33°-E を指す。遺物は出土していない。



第139図 第32・36号溝跡

第29・30号溝跡 (第138図)

調査区1の北側から中央部にかけて、南北に延び、両端部はL字形に屈曲する細長い溝跡である。N-14・15、O・P-14、Q-13・14グリッドに位置し、総延長46m以上である。幅は20~30cmと狭く、部分的に重複しながら平行して延びる。南塚原40号墳の墳丘裾から6~7m隔てた位置(第118図)にあたることから、古墳を取り囲むように鉤の手状に延びた、地境の根切り溝であると考えられる。

第32・36号溝跡 (第139図)

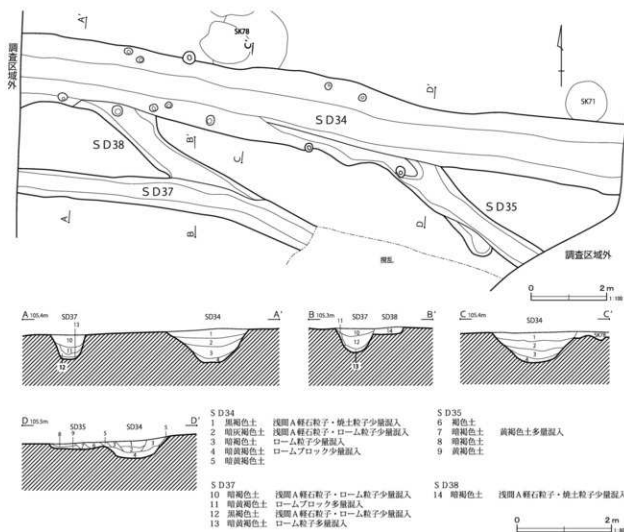
調査区1の南側、R-15、S-15~17グリッドを中心に位置する。第32号溝跡は調査区を東西に

横断する溝跡で、土層断面の観察によると幅1.85mの幅広の溝が埋没した後、幅0.25mの幅狭の溝が切り込まれていることが確認された。

第36号溝跡は、第32号溝跡に交差するように南北に延びる幅広の溝跡である。掘り込みは全体に浅く、溝底面には不定形なピットがみられた。埋土中から土師器環(第132図1)の破片が出土したため、神川町調査区に所在した南塚原37号墳の周溝の可能性も考えたが、埋土等の状況から遺物は流れ込みと判断した。

第34・37号溝跡 (第140図)

調査区1の南端、T-15~17グリッドを中心に位置する。1.5mほどの間隔を置いて、東西方向



第140図 第34・35・37・38号溝跡

に併行して延びる。第34号溝跡は幅1.46～1.94m、深さは0.45～0.85mで、断面箱葉研形の比較的規模の大きな溝跡である。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜し、東端は礫層の上面まで掘り込んでいた。溝の両側の壁面には不規則ながら小ピットが検出された。これらは入口施設に伴う杭列の可能性もあろう。第37号溝跡は、第34号溝跡よりも幅が狭く、断面箱形を呈する。

イ. 溝跡出土遺物 (第137図)

第22号溝跡から古墳時代後期の須恵器甕の破片が出土した。1は外面に2条の沈線によって断面三角形の突帯を作出し、波状文を施す口縁部片である。2は頸部の破片で、胴部外面調整は擬格子叩き目、内面調整は無文当て具痕をもつ。3は2

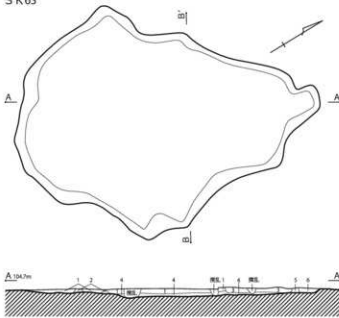
と同様の内外面調整を施す。

ウ. 土壌

土壌は、調査区1から9基検出された。のうち調査区1北側に位置する平面不整形の第63～66号土壌の4基(第141図)は、南塚原40号墳の周囲に点在することから、古墳の周溝、あるいは墳丘の盛土採取地等の可能性も考えたが、確証は得られなかった。調査区1中央部の第68号土壌(第142図)は隅丸方形の平面形を呈することから、住居跡の可能性も考えて調査に臨んだ。しかし、底面が中央部に向かって浅く凹み、キ跡や貼床、硬化面なども認められなかったことから、土壌と判断した。

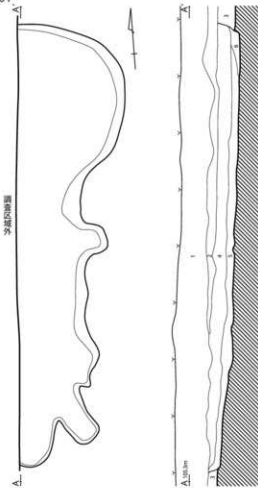
以下、主な土壌について詳述する。

SK63

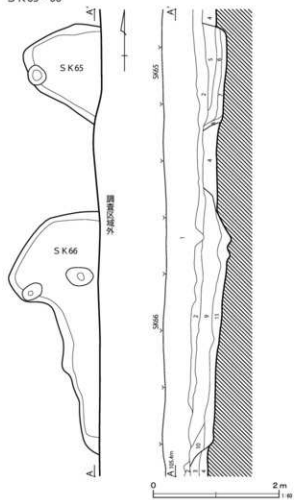


- SK63
- 1 黒褐色土
 - 2 黄褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗黄褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 暗黄褐色土
- 黄褐色土粒子少量混入
しまり強い
砂質土
- SK64
- 1 暗黄褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 褐色土
 - 5 暗黄褐色土
 - 6 黄褐色土
- 浅層A軽石粒子多量混入
ローム粒子・粘土粒子少量混入
ローム小ブロック・焼土粒子少量混入
ローム粒子・炭化物少量混入
ローム粒子・炭化物粒子少量混入
ローム主体
- SK65・66
- 1 灰褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗黄褐色土
 - 6 暗褐色土
 - 7 暗黄褐色土
 - 8 暗黄褐色土
 - 9 黒褐色土
 - 10 暗褐色土
 - 11 暗黄褐色土
- 浅層A軽石粒子多量混入
白色粒子・ローム粒子少量混入
ローム粒子少量混入
ロームブロック多量混入
ロームブロックを多量混入
ローム小ブロック少量混入
ローム小ブロック少量混入
ロームブロック多量混入
ローム粒子多量混入
ローム粒子少量混入
ロームブロック・ローム粒子多量混入

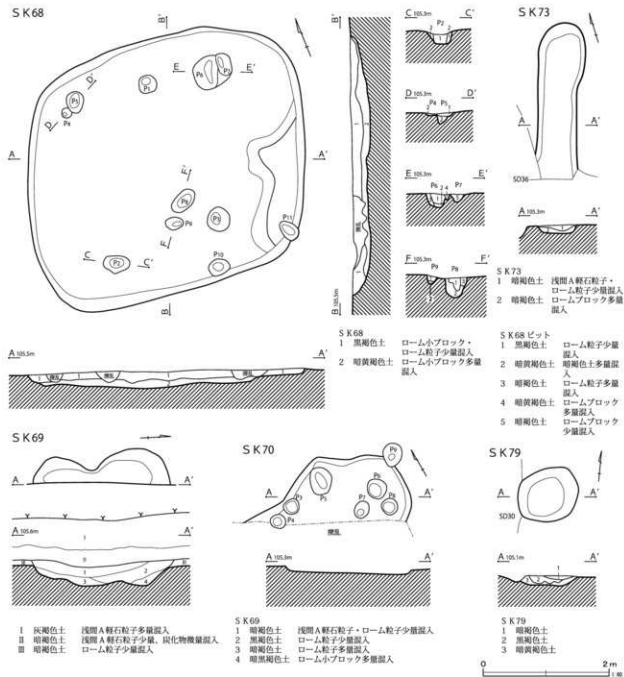
SK64



SK65・66



第141図 第63～66号土壇



第142図 第68～70・73・79号土壌

第63号土壌 (第141図)

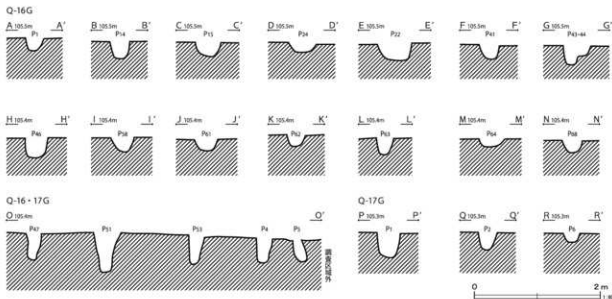
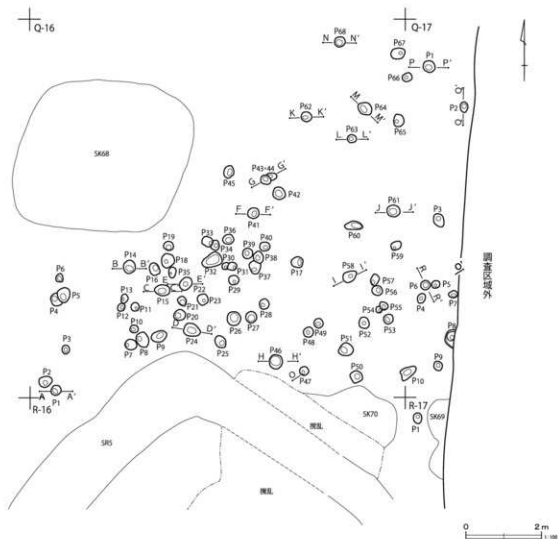
調査区1北西隅付近のN-14グリッドに位置する。平面不整形の土壌である。規模は長軸長4.87m、短軸長3.73m、深さ0.17mである。掘り込みは浅く、底面にはやや凹凸がみられた。長軸方位はN-23°-Eを指す。埋土は基本的に自然堆積である。

遺物は出土していない。

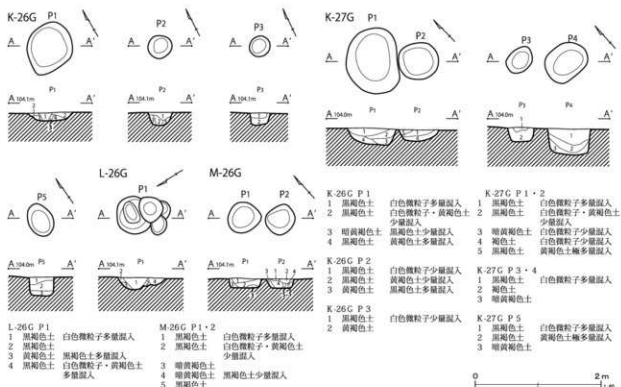
第64号土壌 (第141図)

調査区1北側西端のN・O-13グリッドに位置し、西半部は調査区域外にかかる。平面不整形の土壌である。規模は長軸長7.02m、深さ0.33mである。底面は概ね平坦である。長軸方位はN-4°-Eを指す。埋土は褐色土・黄褐色土が主体で、概ね自然堆積を示す。

遺物は出土していない。



第143図 ビット(1)



第144図 ビット(2)

第65号土壌 (第141図)

調査区1北側東端のN-17グリッドに位置し、第66号土壌の北側に隣接する。東半部が調査区域外にかかるため、平面形は不明であるが東西方向に長軸を採る楕円形と推定される。検出された規模は長軸長1.24m、短軸長1.57m、掘り込み面からの深さ0.35mである。長軸方位はN-90°-Eを指す。遺物は出土していない。

第66号土壌 (第141図)

調査区1の北側、O-17グリッドに位置し、第65号土壌の南側に隣接する。平面形は不整形である。規模は長軸長3.85m、短軸長0.57~1.40m、掘り込み面からの深さ0.40mである。底面は概ね平坦で、小ビットのみみられる。

遺物は出土していない。

第68号土壌 (第142図)

調査区1の中央部、Q-15・16グリッドに位置する。平面隅丸方形を呈する堅が状の土壌である。規模は長軸長4.50m、短軸長4.01m、深さ0.31mである。床面は中央部に向かって摺鉢状に浅く凹

む。キ跡などは検出されなかった。ビットは11基検出されたが、配列にあまり規則性がなく、土壌に直接接うかどうかは明確でない。長軸方位はN-84°-Wを指す。

遺物は出土していない。

エ. ビット

時期不明を含むビットの数は、調査区1が95基、調査区2が11基の合計106基を検出した。

調査区1では、Q-16・17グリッドを中心に約80基が集中していた(第143図)。大きさや深さが一様でなく、柱痕の確認されたものはない。直線的に並ぶビット列もみられるが、積極的に掘立柱建物跡や柵列として認定することはできなかった。いずれも遺物の出土はなく、時期・性格を特定することはできない。この他に調査区北西隅のM-13グリッドに5基、調査区南側のS-15・16に8基がまとまって分布していた。

調査区2では、北側のK-26・27グリッドに8基がまとまって分布していた(第144図)。いずれも遺物の出土はなく、時期・性格を特定できない。

IX 皂樹原遺跡第4次調査

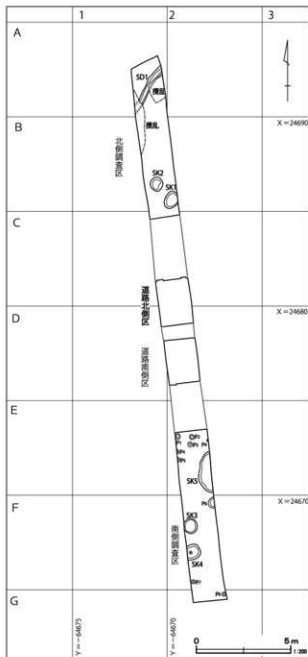
1. 調査の概要

皂樹原遺跡は、行政区を隔てて隣接する上里町楡下遺跡とともに、昭和58年から同62年にかけて皂樹原・楡下遺跡調査会（第1次）によって調査が実施され、奈良・平安時代の大規模集落跡であることが明らかにされた（篠崎・平田1989、篠崎1990・1991・1992）。その後、平成21年には当事業団（第2・3次）によって隣接地が調査されている（岩瀬2011）。これまでに奈良・平安時代の竪穴住居跡296礎、掘立柱建物跡142棟が検出され、隣接する中原遺跡や金屎遺跡、大規模灌漑用水路と想定される女堀大溝を含め、律令期集落の構造を読み解く条件が整いつつある。

さて、今回報告する第4次調査地点は、かつて取り付け道路部分として調査された、皂樹原遺跡南部地区と金屎地区に挟まれた西寄りの位置にある（第146図）。この部分は集落の中心域から南西に大きく外れているため、遺構の分布は全体に希薄となっている。しかし、調査地点の南側には鍛冶工房跡と炭焼窯の検出された金屎遺跡、北側には同じく炭焼窯の検出された中原遺跡が所在しており、鉄生産との関わりの深い区域の中に位置している。

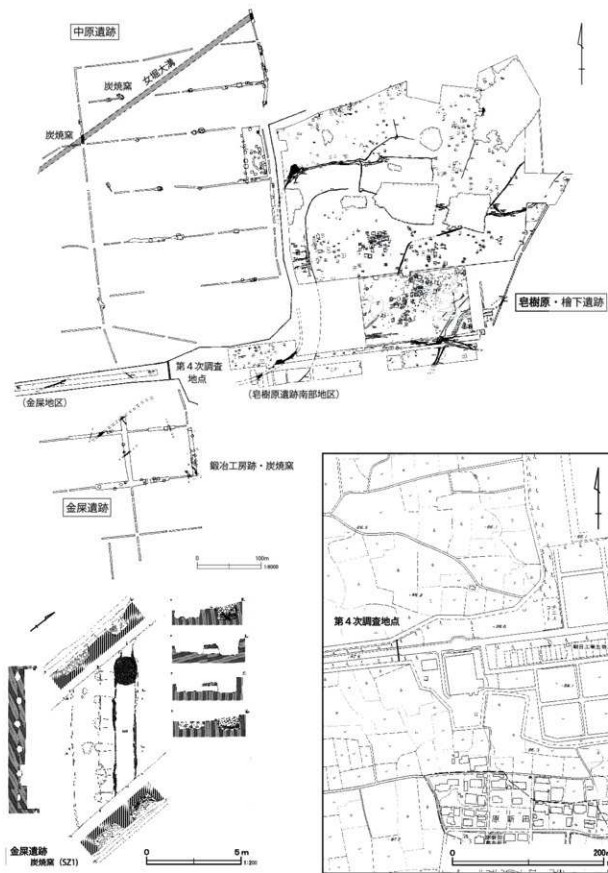
今回の調査は、町道2030号を横断する農業用水路の敷設工事に伴うもので、調査面積は57㎡である。片側交互通行による交通規制が必要なため、長さ31m、幅1.8mの狭小な調査範囲を二回に分けて調査を実施せざるを得なかった。調査区については町道の中央線を境として、北から北側調査区・道路北側区・道路南側区・南側調査区の四つに便宜的に分けた（第145図）。調査はまず北側調査区・道路北側区から着手した。調査終了後、埋め戻しを行い、道路を復旧し、南側調査区・道路南側区の調査を実施した。

検出された遺構は、平安時代の溝跡1条、土塀



第145図 皂樹原遺跡第4次調査区全測図

5基、ピット9基である。ほとんどの遺構から遺物が出土しておらず、明確な時期を特定することは難しい。しかし、遺構の多くは平安時代の土器を含む遺物包含層を掘り込み面としていることから平安時代を中心に営まれたものと推定される。



第146图 皂樹原遺跡位置图

2. 遺構と遺物

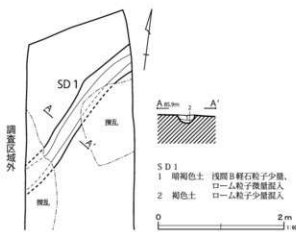
(1) 平安時代

ア. 溝跡

第1号溝跡 (第147図)

北側調査区のA-1グリッドに位置する。調査区の北端を緩やかに屈曲しながら斜めに横切る。攪乱によって一部壊されているが、溝幅0.31~0.36mの幅の狭いもので、深さは0.14~0.16mと浅い。走行方向はN-33°-Eを指す。埋土上層に浅間B軽石粒子を少量含む。

遺物は出土しなかった。



第147図 第1号溝跡

イ. 土壌

土壌は、北側調査区2基、南側調査区3基の計5基を検出した。いずれも遺物は出土していないが、遺物包含層(旧表土面)を掘り込み面としていることから平安時代の遺構と考えられる。

第1号土壌 (第148図)

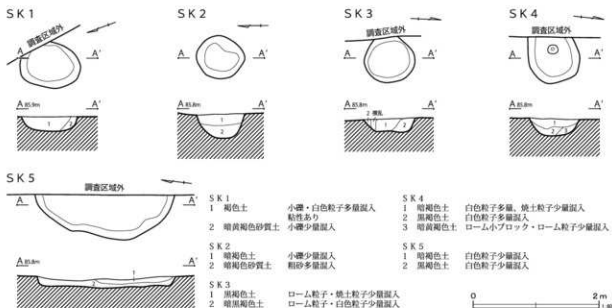
北側調査区のB-1・2グリッドに位置し、北西側に第2号土壌が隣接する。一部調査区域外にかかるが、平面楕円形と考えられる。規模は長軸長0.95m、短軸長0.73m、深さ0.22mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

第2号土壌 (第148図)

北側調査区のB-1グリッドに位置し、第1号土壌に隣接する。平面形態は略円形で、規模は長軸長0.77m、短軸長0.70m、深さ0.39mである。断面形は鍋底形に近い。

第3号土壌 (第148図)

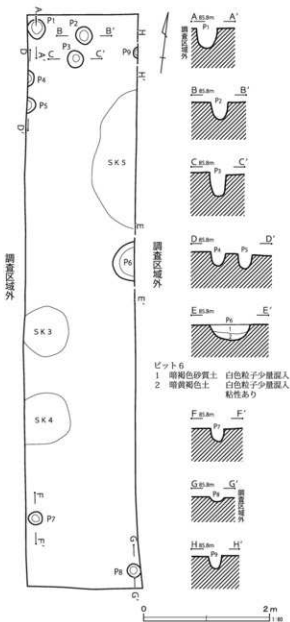
南側調査区中央部のF-2グリッドに位置する。平面略円形で、一部調査区域外にかかる。規模は長軸長0.80m、短軸長0.76m、深さ0.23mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。



第148図 第1~5号土壌

第4号土壌 (第148図)

南側調査区のF-2グリッドに位置し、東半部が調査区外にのびる。平面形は楕円形と推定され、規模は南北長0.82m、深さ0.27mである。平坦な底面の中央に小ピットがみられた。埋土は3層に区分され、暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土からなる自然堆積である。



第149図 ピット

第5号土壌 (第148図)

南側調査区のE-2グリッドに位置し、東半部が調査区外にかかる。掘り込みの浅い平面不整形の土壌と推定される。規模は南北長2.22m、深さ0.14mである。埋土は概ね自然堆積を示す。

ウ. ピット

南側調査区からピット9基を検出した。調査区の北端部に6基が集中し、その他は単独に近い(第149図)。調査区北西隅に集中する一群は掘立柱建物跡や柵列等の可能性も考えられる。

ピットの規模は、径18~61cm、深さ6~34cmと幅があり、概して小型のものが多く。

エ. グリッド出土遺物 (第150図)

1は楕円形鍛冶滓の破片とみられる。硬質で比重が高い。表面は平滑であるが、側面は破面である。緻密であるが、気孔もある。裏面はやや平滑で半球状の底面をなす。調査区周辺で表採されたものである。

なお、調査地点の南側に接する金屎遺跡は小字名の「金屎」からもうかがわれるように、昔から「金屎=鉄滓」が採取されており、神流川の砂鉄を原料とした製鉄関連地名と考えられる。神川町教育委員会が実施した金屎遺跡と中房遺跡の調査において、それを裏付けるように古代にさかのぼる鍛冶工房跡や特徴的な「八つ目うなぎ型窯」の炭焼窯が検出されている。



第150図 グリッド出土遺物

第56表 グリッド出土遺物観察表 (第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	鉄滓	楕円鍛冶滓	長さ 3.5	幅 3.9	厚さ 2.6	重さ 54.6			表採	硬質で比重が高い	55-6

X 発掘調査のまとめ

1. 調査の成果

向遺跡・十二天遺跡

今回の調査成果として、大きく二つの点が挙げられる。一つは古墳時代前期の住居跡と土壇が検出され、該期の集落跡の様相が具体的に把握されたことである。もう一つは過去の調査で明らかにされてきた平安時代の集落跡の様相を、より豊富な資料によって再確認することができたことである。両遺跡を合わせた平安時代の遺構数は、住居跡16軒、溝跡8条、土壇7基を数え、住居跡は9世紀後半から10世紀前半を主体とする。

遺物では、本庄市域では初めて朱書土器が出土したことも特筆される。土器に記された文字は、則天文字に類する特殊な字形であり、土器の内外面に同じ一文字を記す。その意味するところは明確にしないが「一種の吉祥または呪術的な意味合いを含めた特殊な字形」と考えられる（平川2000）。また、猿投産の緑釉陶器や東濃産を主体とする灰釉陶器も比較的豊富に出土しており、施釉陶器の保有率の高い集落といえる。

青柳古墳群南塚原支群

旧石器時代 第2次調査において有髄尖頭器が単独で出土した。県内では本庄市浅見山1遺跡・地神遺跡、滑川町中村遺跡、熊谷市籠原裏遺跡、入間市西武蔵野遺跡、富士見市打越遺跡第2地点、和光市花ノ木遺跡・城山南遺跡等が散見されるだけで、稀少な資料といえる。

縄文時代 第3次調査で縄文時代中・後期の土壇が8基検出され、加曾利EⅢ式が主体である。

古墳時代前期 第2・3次調査で5基の方形周溝墓が検出された。北側の第1～3号周溝墓と南側の第4・5号周溝墓の2群に分かれ、両者は約80mの距離を隔てており、小グループがかなり距離において群在した景観が復元される。このような分布状況は自然堤防上に占地する本庄市諏訪遺

跡や飯玉東遺跡等と共通したあり方を示す。遺物は、第3号周溝墓から壺が出土しただけで、供献土器の少ないことも特徴の一つである。

古墳時代後期 南塚原74号墳は周溝から円筒埴輪や形象埴輪がまとまって出土した。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品を主体とし、底部調整がみられる。形象埴輪は鞍や大刀等の器財埴輪が目立つ。埴輪は、胎土の特徴から複数の生産地から供給されたものと考えられる。このうち胎土に片岩や白色針状物質を含むA類は、神流川を隔てて、西へ約3km離れた本郷埴輪窯跡群から供給された可能性が高い。南塚原82号墳は、周溝が全周せず西側にのみ大規模な周溝が掘削されていた。また、埴土側の法面に貼石を施した特異な周溝形態であった。なお、第3次調査の第1号性格不明遺構は南塚原40号墳との位置関係から、埴土造成土の土取り跡の可能性が考えられる。

平安時代 第3次調査では、古墳群の一角に平安時代の土壇墓が1基検出された。当時、稀覯品であった灰釉陶器の塊を副葬したもので、8世紀代に盛行した火葬墓から土葬墓へ回帰したことを示し、畿内の官人墓からの影響がうかがわれる。

中世 第1次調査では、室町時代末から戦国時代にかけて、古墳の埴丘を取り込み形で構堀を巡らした屋敷跡と、それに付属する土壇墓群（墓域）と思しき遺構群が検出された。南塚原支群の東側の新里集落には、丹党の新里氏との関連が想定される光明寺や岡部屋敷などが所在しており、周辺部の調査の進展が期待される。

皂樹原遺跡

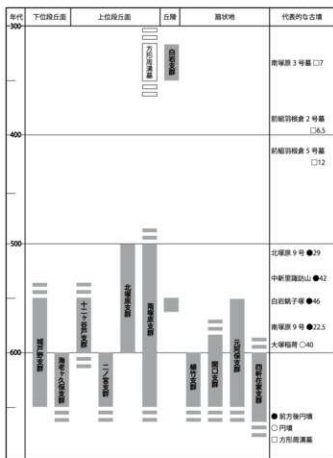
今回の調査は広大な面積を擁する遺跡群における点的な調査ではあったが、平安時代の溝跡や土壇が検出され、集落域の南西への広がりを具体的に把握することができた。

2. 青柳古墳群の成立背景

第151図は、神川町教育委員会による発掘調査の成果を基に青柳古墳群の各支群の変遷過程をまとめたものである(田村・金子1997)。各支群の様相については検討の余地を残すが、前方後円墳の存否や横穴式石室、埴輪等の様相に各支群の消長や性格が反映されている。

南塚原支群は、横穴式石室採用以前の竪穴系埋葬施設をもつ可能性のある古墳を含むことから、6世紀初頭に横穴式石室を導入した北塚原支群(増田1977)よりも先行して、支群形成が始まった可能性が高い。6世紀後半代には、墳長22.5mの前方後円墳の南塚原9号墳、象嵌装大刀を出土した南塚原10号墳、直径40mの大型円墳の大塚稲荷古墳などの有力墳を継起的に輩出している。

今回、南塚原支群において古墳時代前期の方形周溝墓群が検出されたことから、青柳古墳群の成立背景、とりわけ前・中期古墳との関連性について再検討が必要となった。つまり、以前から前期古墳の可能性が指摘されていた白岩丘陵頂部に立地する小規模墳の位置づけである(柿沼他1986)。現状では調査をしていないため推測の域を出ないが、方形周溝墓群からは白岩丘陵頂部を仰ぎ見るような位置関係にあるこ



第151図 青柳古墳群変遷図

とに留意したい。南塚原支群の眼前に広がる金鑽川の形成した低地帯を生産基盤とした伝統的地域集団を母胎として、古墳群の礎が築かれたと考えられるのもあながち誤りとはいえないだろう。

引用・参考文献

- 岩瀬 謙 2011『皂樹原・楡下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第376集
- 柿沼幹夫他 1986『前組羽根倉遺跡発掘調査報告書』前組遺跡発掘調査団
- 金子彰男 1996『青柳古墳群南塚原支群Ⅱ』神川町教育委員会文化財調査報告第14集
- 埼玉県教育委員会 1998『埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』
- 篠崎潔・平田重之 1989『皂樹原・楡下遺跡1中世編』皂樹原・楡下遺跡調査会報告書第1集
- 篠崎 潔 1990～1992『皂樹原・楡下遺跡Ⅱ～Ⅳ 奈良・平安時代編1～3』皂樹原・楡下遺跡調査会報告書第2～4集
- 菅谷浩之他 1973『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会
- 鈴木徳雄他 1981『金屋遺跡群』児玉町文化財報告書第2集 児玉町教育委員会
- 田村誠 1993『青柳古墳群南塚原支群Ⅰ』神川町教育委員会文化財調査報告第10集
- 田村誠・金子彰男 1997『青柳古墳群城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』神川町教育委員会文化財調査報告第16集
- 平川 南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 増田進朗 1977『北武蔵における横穴式石室の変遷』『信濃』第29巻第7号 信濃史学会